

青森市埋蔵文化財発掘調査報告書 第26集

# 桜 峯 ( 2 ) 遺 跡

発掘調査報告書

平成6年度

青 森 市 教 育 委 員 会

## 序

平成6年夏、記録的な猛暑のなか、「三内丸山」ブームに青森市民は胸を躍らせました。

青森県教育委員会が調査を進める三内丸山遺跡から、従来の縄文文化の定説をくつがえす驚異的な事例が、県内はもとより全国へ連日発信され、「三内丸山びと」なる言葉さえ生まれるようになりました。三内丸山遺跡の名は、一躍、縄文文化の代名詞となりました。

このような縄文ブームのなか、青森市教育委員会では、当市南部に位置する横内地区で発掘調査を実施いたしました。この調査は、国道103号横内バイパス道路改良工事予定地が周知の遺跡である桜峯(1)・(2)遺跡を通るため、埋蔵文化財の取り扱いについて事業者と協議を重ねた結果、事前に発掘調査を実施し、記録による保存を図ることになったために行われたものです。

八甲田山の裾野に位置する横内地区は、遠い縄文の太古より、その北玄関、またはその足掛かり的な拠点であったと思われます。今回の調査で、その一部を垣間見ることができました。

本報告書は、今年度の成果をまとめたものでありますが、研究者はもとより市民の皆様にとりましていささかでも役立つことができれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査員、関係機関並びに各位からのご指導、地元各町会からのご協力、さらに事業者である青森県土木部のご理解に対して心より感謝申し上げます。

平成7年3月

青森市教育委員会

教育長 池田 敬

## 例 言

1. 本報告書は、青森市教育委員会が平成6年度に実施した国道103号横内バイパス道路改良工事に係る桜峯(1)・(2)遺跡発掘調査の成果のうち、桜峯(2)遺跡について収録した報告書である。

なお、桜峯(1)遺跡については、平成7年度に継続して調査を実施する予定であり、調査完了の後、平成6年度分の調査も含め平成8年度に報告書を作成刊行する予定である。

2. 桜峯(2)遺跡の遺跡番号は01208である。

3. 各遺構の規模については、長軸・短軸及び壁高では確認面を起点として、遺構内ピット・壁溝では床面・底面を起点とした測定値を記した。

4. 遺構番号は、各種遺構ごとに通し番号を用いた。

5. 資料・試料の鑑定及び同定、分析について次の方々へ依頼した(敬称略、順不同)

[ 本書内報告 ]

・遺跡周辺の地形及び地質

青森県立弘前高等学校教諭

工藤 一彌

・石器の石質鑑定

”

[ 平成8年度報告予定 ]

・火山灰の分析

奈良教育大学教授

三辻 利一

・無機燐酸及び残存脂肪酸組成の分析

八戸工業高等専門学校教授

小山 陽造

・放射性炭素年代測定

八戸工業大学助教授

村中 健

・赤色顔料の分析

岩手県立博物館主任専門学芸員

赤沼 秀男

6. 遺構、遺物の文、図中での表現は原則として次の基準、様式に依った。

(1) 土層の注記については「新版標準土色帖」(小山正忠、竹原秀雄1993)に準拠した。

(2) 挿図の縮尺は各図ごとに示し、各種遺構平面図での方位は磁北を示した。

7. 引用・参考文献は巻末に収めている。なお、文中で引用・参考にした文献については、著者名と刊行西暦年で示している。

8. 執筆者名は、依頼原稿では文頭に記し、その他は文末に記している。

9. 発掘調査における出土遺物、実測図、写真等は、現在、青森市教育委員会に保管している。

10. 発掘調査及び報告書の作成にあたって次の各機関・各氏からご指導ご教示ご協力等を賜った。

(以下敬称略、順不同)

奈良教育大学、八戸工業高等専門学校、八戸工業大学、北海道教育庁生涯学習部文化課、  
仙台市教育委員会、函館市教育委員会、東北歴史資料館、北海道開拓記念館、仙台市博物館、  
市立函館博物館、八戸市博物館、七ヶ浜町歴史資料館、青森県埋蔵文化財調査センター、  
地元各町会

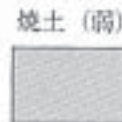
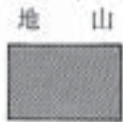
宇部則保、大沼忠春、小笠原善範、小保内裕之、工藤竹久、坂川 進、佐藤好一、佐藤智雄、  
田中則和、田原良信、野村 崇、野村祐一、畑 宏明、原河英二、藤田亮一、村木 淳、  
山田洋一

## 凡 例

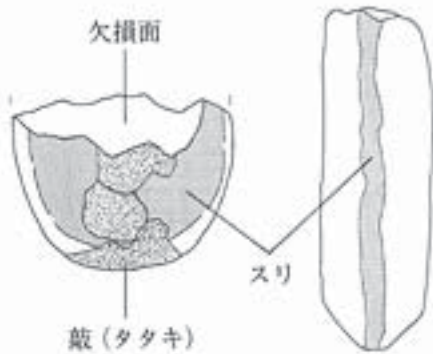
本報告書内で使用する、略称・表現方法・スクリーンパターン等は以下のとおりである。

- [略称]・「第 号住居跡」 「 住」 ・「第 号土壌」 「 土」  
 ・「第 号配石遺構」 「 配」 ・「第 号埋設土器遺構」 「 埋」  
 ・「十和田 a 火山灰」 「To - a」 ・「白頭山苦小牧火山灰」 「B - Tm」  
 ・遺構内のピット番号と深さ「第 1 号ピット深さ 30」 「Pit1( - 30)」  
 ・「安山岩」 「安山」 ・「石英安山岩」 「石英安山」  
 ・「凝灰岩」 「凝灰」 ・「輝緑凝灰岩」 「輝緑凝灰」  
 ・「溶結凝灰岩」 「溶結凝灰」 ・「頁岩」 「頁」  
 ・「閃緑岩」 「閃緑」 ・「結晶片岩」 「結晶片」  
 ・「ヒン岩」 「ヒン」

〔遺構でのスクリーンパターン〕

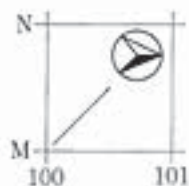


〔礫石器でのスクリーンパターン等〕



〔グリッド名〕

(例) M-100



# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
第 章 調査に至る経過と調査要項	
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査要項	2
第 章 調査の方法と経過	
第1節 調査の方法	5
第2節 調査の経過	5
第 章 遺跡の環境	
第1節 遺跡周辺の地形と地質	11
第2節 調査区域内の基本土層	14
第3節 周辺の遺跡	17
第 章 検出遺構と出土遺物	
第1節 検出遺構と遺構内出土遺物	20
1 竪穴式住居跡	20
2 土 壇	24
3 配石遺構	42
4 埋設土器遺構	42
第2節 出土遺物の概要	45
1 土 器	45
2 石 器	51
まとめ	63
引用・参考文献	
写真図版	
報告書抄録	

## 第 章 調査に至る経過と調査要項

### 第 1 節 調査に至る経過

県道青森・十和田湖線は、近年、県道から国道 103 号に昇格し、十和田湖と秋田県大館市とを結ぶ従来の国道 103 号と接続した。これにより国道 103 号は、青森市から八甲田山・十和田湖を經由し大館市まで続く、まさしく観光道路的な要素を持った 1 本の路線となった。

このようななかであり、国道 103 号横内バイパスは、当市横内地区の通称横内十文字を中心として起こる交通渋滞の解消等を目的に計画され、青森県土木部が既に一部完工・供給している。

県土木部は、残る区間について新たに着工を決定し、青森県教育委員会へ予定地内の埋蔵文化財の所在有無の確認を行った。

これを受けた県教育庁文化課は、区間内での遺跡の所在について分布調査を実施したところ、数地点において遺物の散布地を確認した。そこで、県土木部と協議し、遺物の散布が薄い地点について遺跡の所在確認のために試掘調査を実施した。調査の結果、トレンチから縄文時代前・中・後期の土器が出土するとともに「土坑」が確認されたため、その地点を埋蔵文化財包蔵地であるとして新規に桜峯(2)遺跡として遺跡登録するに至り、同時に他方の散布地についても桜峯(1)遺跡として登録した(青森県教育委員会、1994)。

改めて県文化課は、県土木部へ試掘調査の結果について回答するとともに、計画を変更し埋蔵文化財の現状保存が図られるよう要望し、もし変更できない場合には記録保存のため発掘調査が必要である旨を通知した。その後、両者による保存についての協議が行われたが、結局、計画変更は難しいとの結論に至り、発掘調査による記録保存が図られることとなった。

しかし、当初調査を担当する予定であった県教育委員会では激増する調査件数のため数年内には担当不可能という状況が明らかになり、県土木部と県文化課との協議の結果、工事の遅延を避けるために、遺跡所在地の管轄である青森市教育委員会へ調査を依頼することとなった。

そこで、県土木部では、平成 5 年 12 月 9 日付青道建第 358 号「平成 6 年度国道 103 号横内バイパス道路改良事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査について(依頼)」において当市教育委員会へ調査の依頼を行なった。

これを受け当委員会では、県土木部と県文化課との両者からこの間の説明を受け、当該路線の早期完成の趣旨を検討するとともに、当委員会における他の調査事業との調整を図った結果、文化財の保護と開発事業との円滑な調整を図るためにも調査依頼を受諾することに至り、平成 5 年 12 月 20 日付青市教委社第 439 号において県土木部へ受諾の旨の回答を行った。

その後、分布調査を担当した県文化課から、現地の状況について説明を受け、桜峯(2)遺跡については全面調査区域と試掘調査区域との二つの区域を考えているとの趣旨が述べられ、当委員会でもその方向で調査を進め状況に応じてそれに対処することとした。

県土木部と協議の場を持ち、工事予定の概略について説明を受けるとともに、調査にあたって当委員会側の要望等について話し合い、現地での調査期間を平成 6 年 5 月 11 日から同年 10 月 28 日までとし、調査面積を 7,700 m<sup>2</sup>とする予定で調査を実施することに至った。

なお、調査開始に先立ち、平成 6 年 5 月 9 日、調査指導員・調査員、県土木部、青森土木事務所、県

文化課、当委員会の各関係者出席のもと調査打ち合わせ会議を開催した。 (小 林)

## 第2節 調査要項

### 1. 調査目的

国道103号横内バイパス道路改良工事に先立ち、予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資する。

### 2. 遺跡名及び所在地

桜峯(1)遺跡(遺跡番号:01207)

青森市大字横内字桜峯92-32

桜峯(2)遺跡(遺跡番号:01208)

青森市大字横内字桜峯122-6ほか

### 3. 事業予定期間

平成6・7年度(継続事業)

### 4. 発掘調査予定期間

平成6年5月11日～平成6年10月28日(第1年次)

### 5. 調査対象予定面積(第1年次)

桜峯(1)遺跡1,600㎡

桜峯(2)遺跡6,000㎡(全面調査予定区域約3,500㎡、試掘調査予定区域約2,600㎡)

### 6. 調査委託者

青森県土木部

### 7. 調査受託者

青森市教育委員会

### 8. 調査担当機関

青森市教育委員会生涯学習部社会教育課

### 9. 調査協力機関

青森県教育庁文化課

青森県土木部青森土木事務所

10. 調査体制

調査指導員	村 越 潔	弘前大学教授（考古学）
調査員	高 島 成 侑	八戸工業大学教授（建築史）
〃	市 川 金 丸	青森県考古学会会長（考古学）
〃	赤 沼 英 男	岩手県立博物館主任専門学芸員（保存科学）
〃	工 藤 一 彌	青森県立弘前高等学校教諭（地質学）
〃	奈 良 昌 毅	青森県立青森北高等学校教諭（考古学）
〃	長 崎 勝 巳	青森市立久栗坂小学校教諭（考古学）
調査協力員	今 正 秀	南部二区連合町会長
調査事務局	青森市教育委員会	
	教 育 長	花 田 陽 悟（現、青森市助役）
	〃	池 田 敬
	生涯学習部長	矢 野 順 平
	社会教育課長	津 川 久 善
	同課課長補佐	遠 藤 正 夫
	同課主幹兼埋蔵文化財係長	塩 谷 光 男
	同 課 主 査	武 田 均
	同課指導主事	長 沼 圭 一
	〃	徳 差 義 男（調査担当）
	〃	小 林 淳（ 〃 ）
	同 課 主 事	田 澤 淳 逸
	〃	上 野 隆 博





第1図 遺跡位地図

## 第 章 調査の方法と経過

### 第 1 節 調査の方法

今年度予定した桜峯(1)遺跡と桜峯(2)遺跡との調査区域は、直線距離にして約1km離れており、標高差にして約50mもあるため、それぞれの区域ではグリッドと測量原点(B.M.)は各々に設置した。ただし、グリッド名の呼称はそれぞれ異なるが、メッシュについては基本的に先行して調査を進める桜峯(2)遺跡調査区域のそれを拡張する形で、桜峯(1)遺跡調査区域も網羅できるようにした。

桜峯(2)遺跡調査区域でのグリッドの設定は、工事用中心杭No2500とNo2580とを結ぶ直線を調査区長軸方向の基準線(Mライン)とし、中心杭No2500でこれに直交する線を短軸方向の基準線(100ライン)として、調査区域全体に4m×4mのメッシュを組んだ。

グリッド杭の表示は、中心杭No2500(M-100)を基点として、北へ101、102、103・、南へ99、98、97...の順に算用数字を付し、また、東へL、K、J...、西へN、O、P...の順にアルファベットを付した。

各グリッドの呼称は、アルファベットと算用数字を組み合わせて示した(凡例参照)。具体的にはそのグリッドの南東隅のグリッド杭の表示によるものとした。

なお、南北方向の長軸基準線は、ほぼ磁北を示しその西偏角は1°未満である。

また、桜峯(2)遺跡調査区域での測量原点(B.M.)の設置は、青森土木事務所が既に設置していた工事用のB.M.(標高31.474m)を基準とし、ここから原点移動を行い標高50.350mの原点(B.M.1)を設置した。これを基準として、高低差およそ20mの調査区域全域を対処できるようにさらに数箇所を設定した。

桜峯(2)遺跡調査区域は、試掘調査区域と全面調査区域とに区別したこともあり、試掘調査区域では試掘先行で進め必要に応じて範囲を拡張することとした。全面調査区域でもほぼそれに準じる方法で全面調査に臨んだ。

また、事業者との協議により、平成6年度は桜峯(2)遺跡の調査完了を目指すため、桜峯(1)遺跡については主に次年度調査の基礎資料作成のための試掘調査を行うこととした。

粗掘りは、土層の堆積状況を観察するために適宜セクションベルトを設定して、グリッド単位で掘り進めた。

遺構の精査は、竪穴式住居跡では四分法、土壌等では二分法という方法で臨み調査を進めた。

実測は、基本的には簡易遣り方測量で行い、必要に応じ平板測量も行った。縮尺は、20分の1を原則とし、微細図に関しては10分の1を採用した。

写真撮影にあたっては、35mmのモノクロームとカラーリバーサルの各フィルムを併用し、作業の進展に伴い必要に応じて行った。

(小林)

### 第 2 節 調査の経過

5月11日、桜峯(2)遺跡調査区域内の環境整備及び草刈り作業をもって調査の開始とした。グリッド設定にあたっては、道路建設工事用の杭が一直線上にある区域を活用し、この延長軸線を基準線とするこ



ととした。また、堆積土層確認のため数か所にテストトレンチを設定した。

翌12日、前日のトレンチの状況を考慮しながら、杉などの伐採後に放置されていた幹や枝などの上物及び表土処理のため重機を使用し、作業の効率化を図った。

5月16日、全面調査区域と試掘調査区域とに作業員を配置し、粗掘りを開始した。

両区域ともに丘陵の斜面上であるため排土の運搬・処理に困難な面があった。特に全面調査区域では第一に排土置場の確保を急務と考え、斜面下方をその予定地とした。この部分から粗掘りを行い、必要範囲を調査した後に斜面上位に作業を移行することとした。

6月に入り、試掘調査区域の調査を先行させ、任意に10か所の試掘坑を設定し粗掘りを進めた。

この区域では、予想外に黒色土層が薄く、基盤となるローム層が表土下10～30cmで確認された。層の薄さについては、場所が頭頂部であるため腐植土層を構成する以前に降水等により斜面下方へ流出したものと思われた。この区域は全体的に同様の堆積状況が広く見られた。このような薄層ながらもわずかながら土器が数片出土する箇所もあるため、それぞれの地点を拡張し状況を判断することにした。しかし、それ以上の遺物は出土せず、まさしく散布地的な状況であった。

さらに作業を進め、地点を変えて試掘坑を設定したところ、徐々に比較的良好な自然層と思われる黒色土層が見られるようになり、遺物の出土も若干ながらそれまでより多く見られるようになったため、Qラインに沿って20mの試掘坑を設置した。粗掘りが進むと、調査前には識別できなかった緩やかな凹地の存在が確認された。さらに、この凹地の状況を確認するため、Qラインに直交する直線トレンチを設け掘り進めると、凹地と思われた地点は、小さな谷状地形であり良好な黒色土はその両横からの流れ込みによるものであることが確認された。また、この地点は、結果的に、この区域のなかで最も遺物が集中し出土した地点でもあった。0 - 136グリッドでは、漸移層まで掘り下げた時点で、時代・時期が不明ながらも1辺1mほどの方形の遺構が確認された。そのため、委託者へ状況を説明し、この区域の扱いについて協議した結果、この区域は試掘調査区域として受諾していたため、全面調査区域の状況を判断したうえで調査を再開することとなった。

全面調査区域の粗掘りも同時に進めていたが、U字形の谷状地形や記録的な猛暑の影響もあり作業は遅れぎみであったが、7月末頃にもなると基盤となる第 層地山まで掘り進むようになった。

尾根頭頂部に移り粗掘りを開始したところ、J - 100グリッドから平成5年県教育庁文化課調査の試掘坑が表れ「土坑」として報告された遺構が確認された。この尾根頭頂部の粗掘りの範囲を拡張したところ、尾根の稜線沿い南側に遺構らしい落ち込みが点々と確認された。それらの規模から、いずれも土壌と推測された。確認面での色調には黒色系のものも見られたが、その大半は第 層とほぼ同様のものではなかった。これらの土壌のうち、最初に確認した土壌を半截したところ、フラスコ状を呈し、その他の遺構についても、その配置・規模等の類似点からフラスコ状ではないかと予測された。

8月中旬、これらの遺構の精査を進めて行くと、フラスコ状を呈する土壌が次々と検出された。さらに、このうち2基の底面から赤色顔料が検出され、墓壙として利用されたことが推測された。

遺構の精査に併行し、尾根を下る北側斜面へ粗掘りを進めた。しかし、尾根の北側では、南側のような遺構の検出は見られなかった。

9月に入り、試掘調査区域の調査再開について、改めて委託者との調整を図った。その結果、全面調査区域の調査を継続しながら、試掘調査区域で拡張を要する範囲の調査を再開することになった。また、当初予定していた桜峯(1)遺跡の試掘調査は用地取得の進展状況により変更せざるを得ないため、取得済

みの一部の調査をもって行うこととなった。

試掘調査区域の要拡張範囲で黒色土の粗掘りを終えると、遺物の出土する箇所は拡張の発端となった136ラインに集中しており、距離が離れるにしたがい遺物の出土が見られなくなった。このことから、この区域は、遺跡の一部ではあるが中心から離れた縁辺部としてとらえるべきとの結論に至った。

一方、全面調査区域では、遺構の精査と併行し105 - 115ライン内での試掘先行による調査を行った。108ラインを中心とした谷状の地形には黒色土が厚く堆積し流れ込みの様相を呈しながらも同一個体と思われる土器の破片が散在状態で出土したりした。

9月下旬、この区域が斜面であることと黒色土が厚く堆積していたことも影響し、作業の進展に遅れが見られるようになった。そのため、当初予定した終了月日を変更し6日間延長の11月8日を終了日とすることとし、委託者及び雇用者、関係機関等に連絡した。

10月9日、現地見学会を開催し、考古学に関心をよせる熱心な市民が多数来跡した。丘陵地の斜面における調査であるためか、『こんなところにも遺跡があるのか』、『いろいろな遺跡があるもんだ』など、新たな関心を抱いたようであり、多少なりとも啓蒙活動の一助となったと思われる。

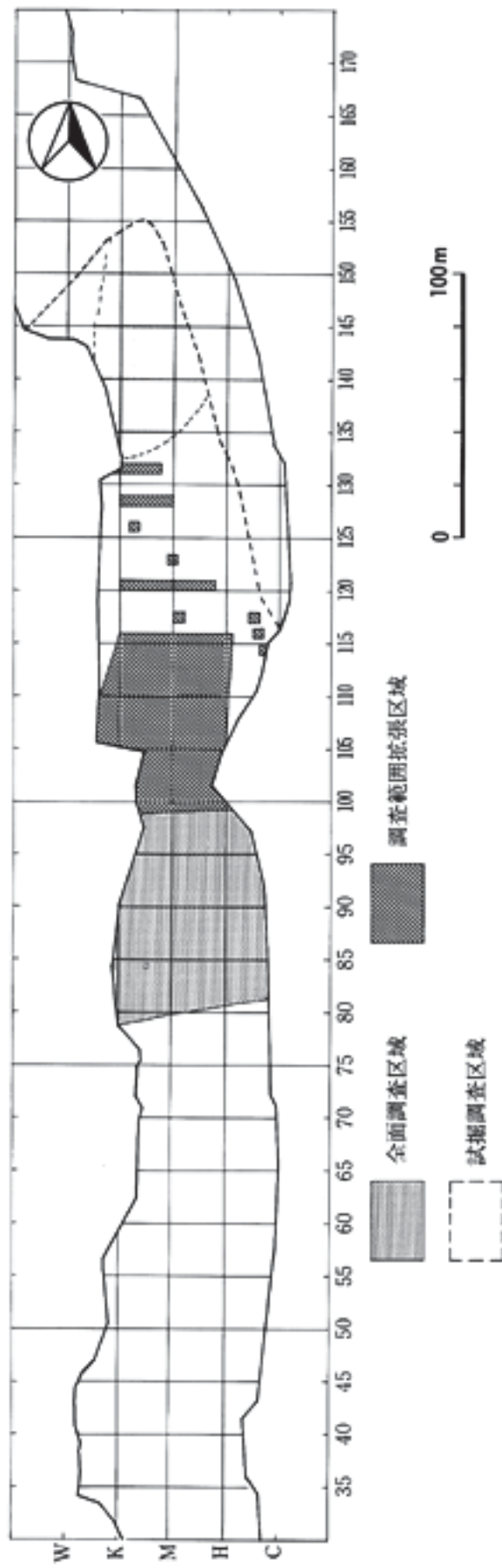
10月中旬、全面調査区域の粗掘りもほぼ終了し、残った遺構の精査と桜峯(1)遺跡の調査に重点を置いた。

11月8日、調査の全日程を無事終了した。丘陵地斜面での調査のためか調査面積に対し遺構検出数・遺物出土数ともに比較的少数であった。

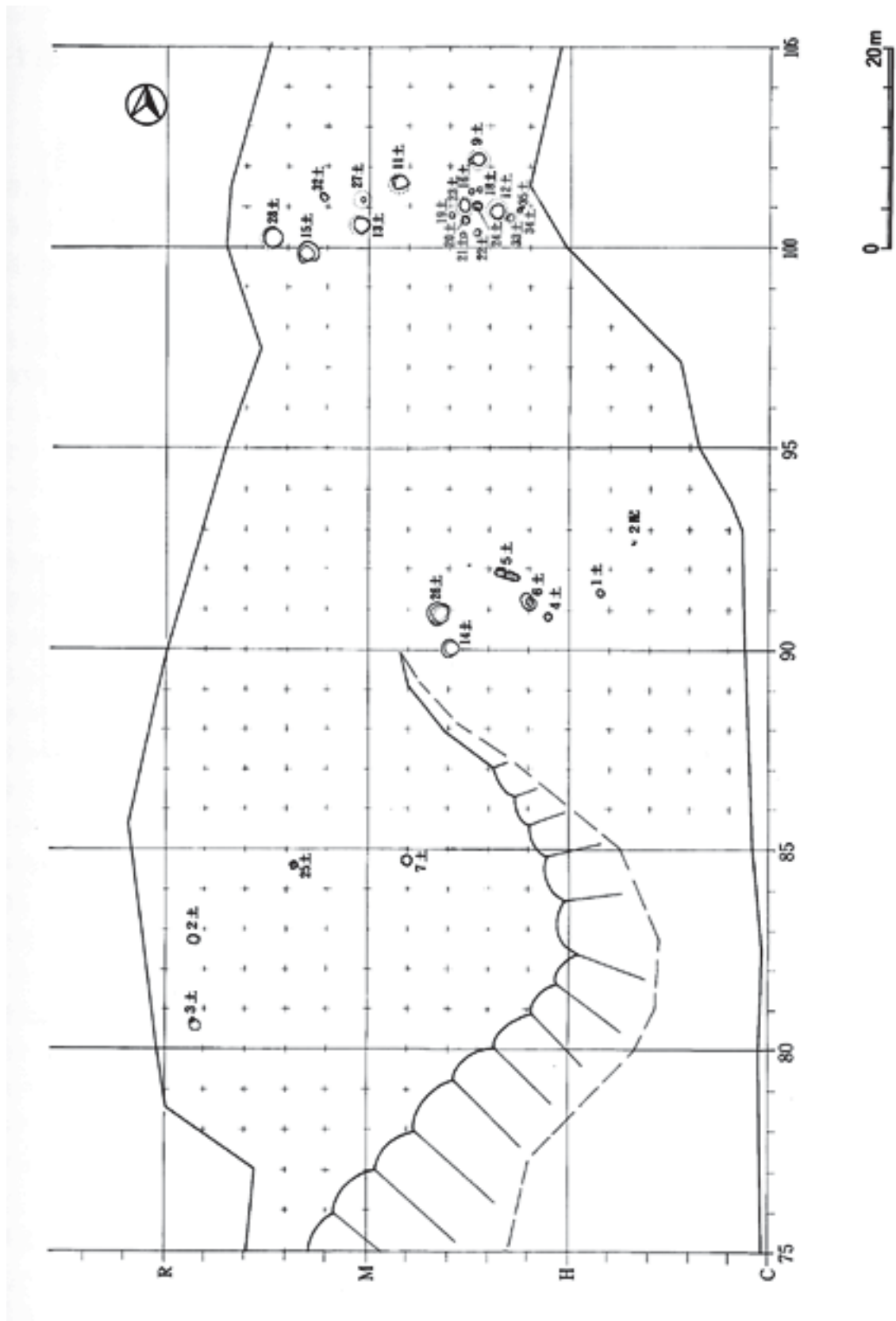
検出した遺構は、竪穴式住居跡1軒、土壇35基、埋設土器遺構1基、配石遺構2基である。このうち試掘調査区域での検出遺構は、土壇1基のみであり、その他はいずれも拡張範囲を含めた全面調査区域での検出である。

また、両区域から出土した遺物は、土器・石器合わせてダンボール箱約10箱分である。土器の多くは破片であり復元できた個体数は少ない。時期も特記するような一型式での集中は見られず、縄文時代前・中・後期の土器が比較的主体を占めていた。

(小林)

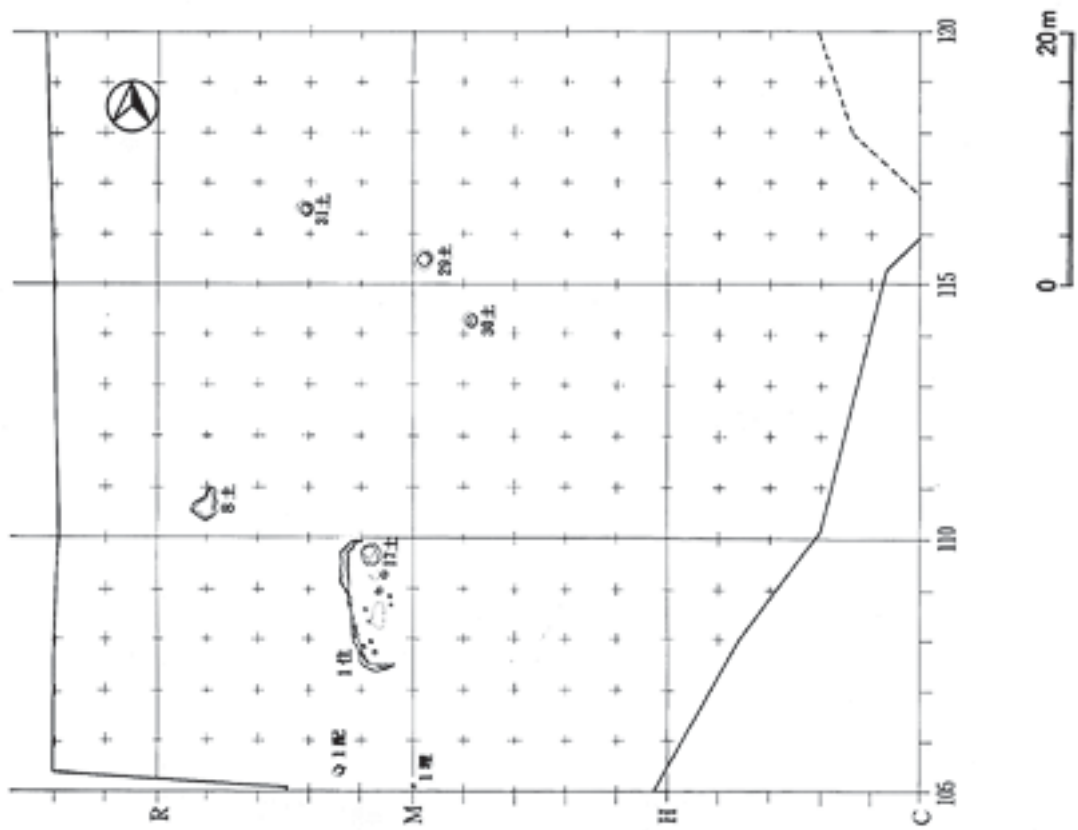
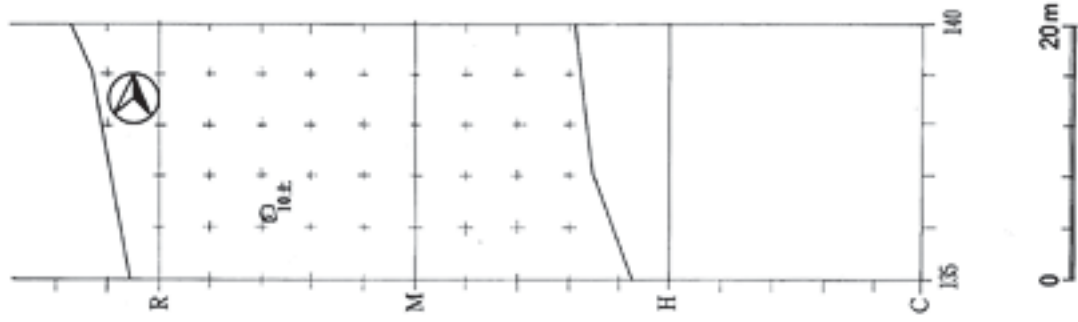


第2図 桜峯(2)遺跡調査対象区域図・グリッド配置図



第3図 遺構配置図(1)





第4図 遺構配置図(2)

## 第 章 遺跡の環境

### 第 1 節 遺跡周辺の地形と地質

青森県立弘前高等学校教諭 工 藤 一 彌

青森平野は新生代第四紀に形成された海岸平野であり、東西約10km南北約5kmのほぼ三角形をしている。北は陸奥湾に面し、南～東は八甲田山につらなる火山性の台地、西は標高50～150mの比較的緩傾斜の開析が進んだ丘陵に囲まれている。西部の丘陵地との境界には「入内断層」と呼ばれる南北方向の大きな断層が存在している。この断層は第四紀洪積世から活動を始め、断層の東側が最大で800m以上も北に落ち込み、海進によって非常に厚い地層が形成され、平野の原形が形成されていった。

南側の火山性台地は八甲田カルデラから噴出した八甲田火砕流堆積物、いわゆる「田代平溶結凝灰岩」からなる台地で、村岡・長谷(1990)はK-Ar法により40万年前の活動としており、「入内断層」によってできた低地を埋め、緩やかな勾配で北西側に傾斜し、横内～駒込付近から平野に没し、平野部の試錐データによると断層の東側で1000m、市の中心部では500m、市東部の矢田前付近では300mの深さまで達している。

西部の丘陵地は開析がすすみ、稜線の標高は50～150mで緩やかに北に傾斜している。砂・砂質シルト層からなる洪積世の岡町層を基盤に砂・砂礫や八甲田火砕流堆積物などが重なり、最上位に火山灰層が堆積している。八甲田火砕流堆積物は村岡・長谷(1990)によると、大きく2つに区分され、そのうち1期のものには水底火砕流堆積物として産する場合があります、従来の鶴ヶ坂層がこれに相当するという。2期のものは従来の田代平溶結凝灰岩に相当し、陸上火砕流堆積物が主体である。

本地域の火山灰層は沢田(1976)により3層に区分され、下位から三内火山灰・大谷火山灰・月見野火山灰と呼ばれている。下位の三内火山灰は中部と最下部に浮石帯をもつ赤褐色粘土質降下火山灰で、中位の大谷火山灰は赤褐色粘土質降下火山灰と茶褐色浮石質降下火山灰よりなり、分布範囲は狭い。上位の月見野火山灰は最も広範囲に分布しており、黄褐色浮石質火山灰からなり、浮石流～火山灰流の部分も多い。

本遺跡は南部の火山性台地の北縁斜面上に位置する。火山性台地は八甲田火山地の北方につづく標高40～500mの台地で北方に緩やかに傾斜しており、第四系の八甲田火砕流堆積物(田代平溶結凝灰岩)を基盤に、その上位に重なる薄い火山灰層から構成されている。八甲田牧場(標高500m)・雲谷平(標高200m)・梨の木平(標高200m)・青森ゴルフ場(標高150m)・月見野霊園(標高100m)など緩傾斜の平坦面を広く残しており、多方面に利用され、傾斜は横内川兩岸の雲谷平・田茂野木で約5度、合子沢川左岸で約4度、平均で5度前後である。この台地は駒込川・横内川・合子沢川・堤川(荒川)など北流する河川によって開析されており、溶結凝灰岩が浸食に弱いためいずれの河川の谷壁も25～40度と他の開析谷に比べて著しく急傾斜となっている。

本遺跡は平坦面の尾根に位置する横内浄水場と横内川左岸の河岸段丘面上を走る国道103号(旧県道青森・十和田湖線)との間の標高40～60mの斜面上に位置する。段丘面は横内川の谷底平野に比べ10mほど高く緩やかに北に傾斜している。段丘構成層について詳しい調査はしていないため、時代などは不明である。遺跡の基盤は八甲田火砕流堆積物であり塊状無層理で灰色を特徴とし、赤紫色を帯びる所も

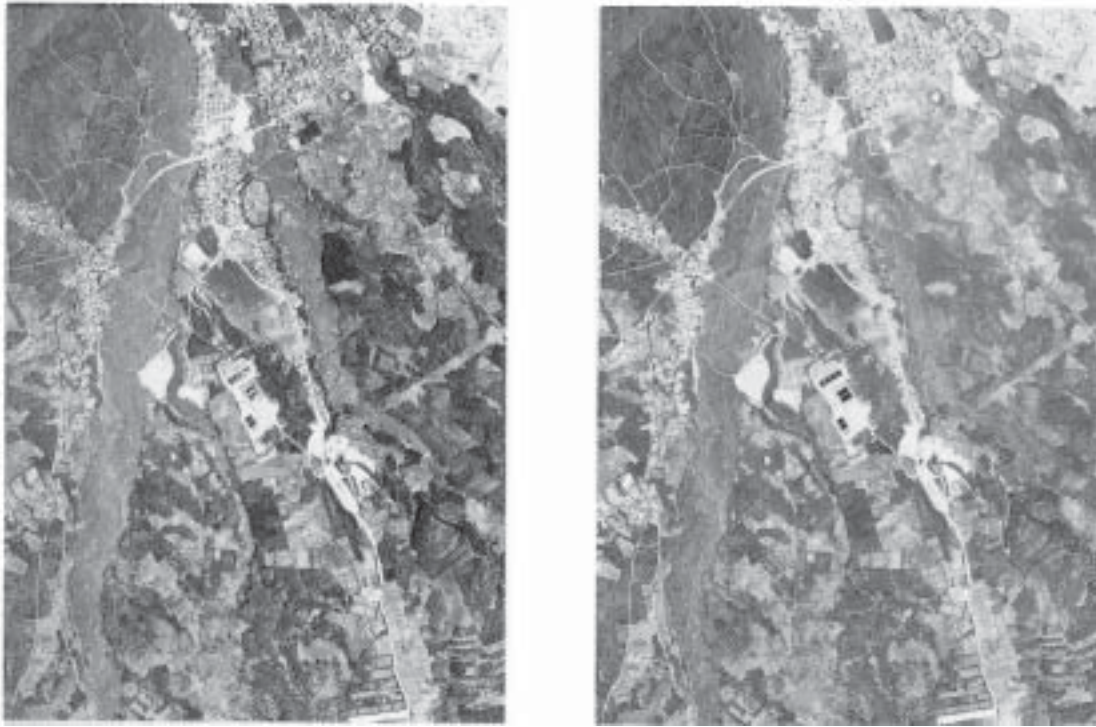


多い。径が1mm前後の石英や斜長石を多量に含み、軽石や本質レンズは比較的少ないため、風化面では石英などの鉱物粒の多いことが特徴である。八甲田火砕流堆積物の層厚は50～100mに見積もられており、荒川や駒込川などのように下位の第三系は比較的浅いところにあるものと推定されるが、遺跡周辺では確認されていない。野内川上流一帯、駒込川中流、雲谷峠付近、荒川中上流には新第三紀中新世中期の地層が分布するので、本遺跡の第四系の基盤にも同様の地層が分布しているものと推定できる。上位の黄褐色火山灰は地形の起伏によって厚さが異なり、凸部で薄く、凹部で厚くなっており、最上位の黒色土でも同様の傾向が認められる。黄褐色火山灰の中には石英粒を含む粘土質の灰色縞模様が見られる所もあり、再堆積の可能性もある。

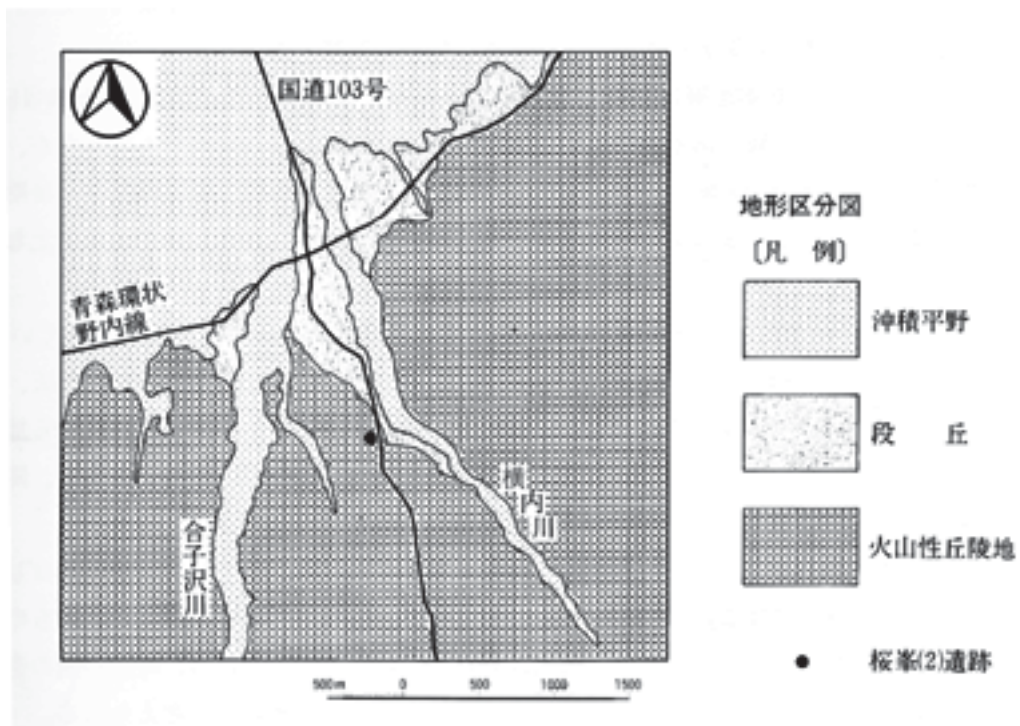
なお、地形区分では1948年・1969年撮影の航空写真を使用し、原地形での区分を行った。

#### 引用・参考文献

- |           |      |                                    |
|-----------|------|------------------------------------|
| 青森県教育委員会  | 1976 | 近野遺跡発掘調査報告書( )<br>三内丸山( )遺跡発掘調査報告書 |
| 青森県教育委員会  | 1978 | 近野遺跡発掘調査報告書( )                     |
| 青森県       | 1982 | 土地分類基本調査「青森西部」                     |
| 青森県       | 1983 | 土地分類基本調査「青森東部」                     |
| 村岡洋文・高倉伸一 | 1988 | 10万分の1八甲田地熱地域地質図・説明書               |
| 村岡洋文・長谷紘和 | 1990 | 5万分の1地質図幅 黒石地域の地質                  |



実体視空中写真（国土地理院 1969 年撮影）

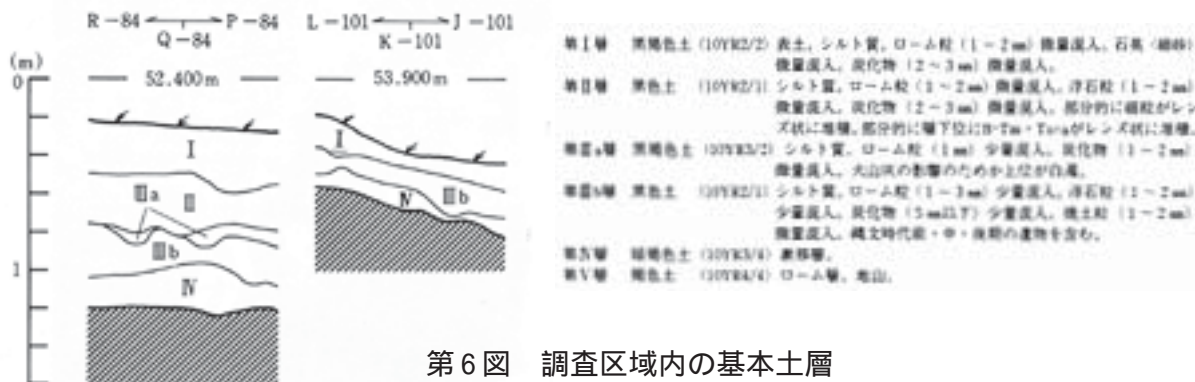


第5図 遺跡周辺の地形

## 第2節 調査区域内の基本土層

### (1) 基本土層

桜峯(2)遺跡調査区域の基本土層は次のとおりである。



第6図 調査区域内の基本土層

丘陵地形の起伏のため、尾根頭頂部と谷部とでは、堆積状況にかなりの差が見られる。

第一に、黒色土層の層厚である。頭頂部では10~30cmほどで漸移層に移行するのに寸し、谷部では、最深1m以上にも及んでいる。これは、降水等の影響により上位から下位へと流出したものである。頭頂部から谷部に移行する中位斜面においてわずかながら土器の破片が出土していたが、これも上位面からの流れ込みの可能性が高い。実際、それらの器表面や破碎断面からは摩滅した様子が観察された。

第二に、黒色土のシルト質である。頭頂部に薄く堆積する黒色土に比べ、谷部に厚く堆積した黒色土の方は、同じシルト質ではあるものの若干粘性が強く粒子もより細くなっているようである。このことも、地形的な所以による水分の影響や前述のような流出作用の影響であろう。

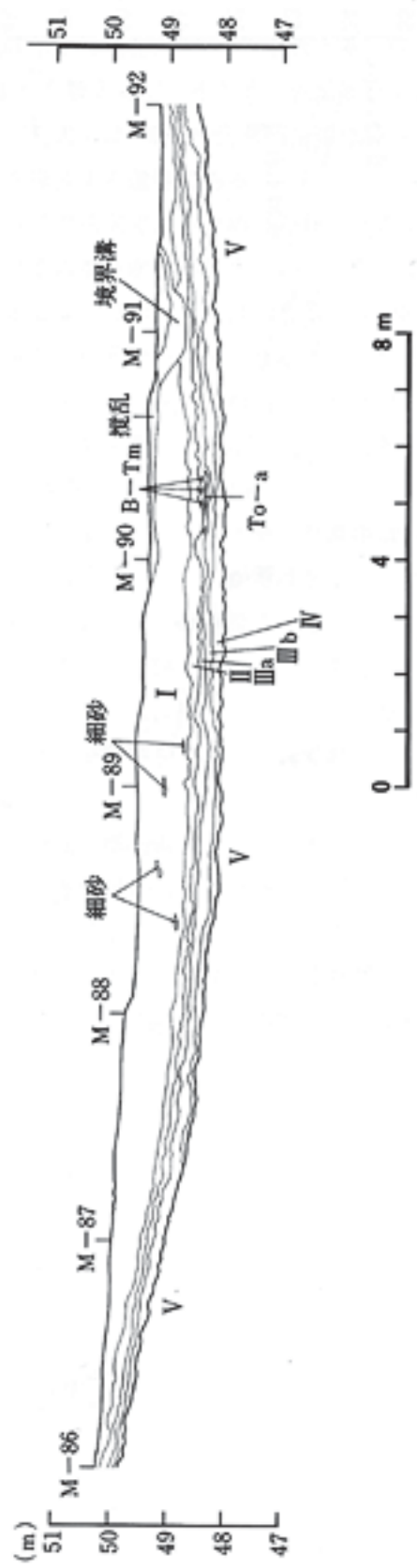
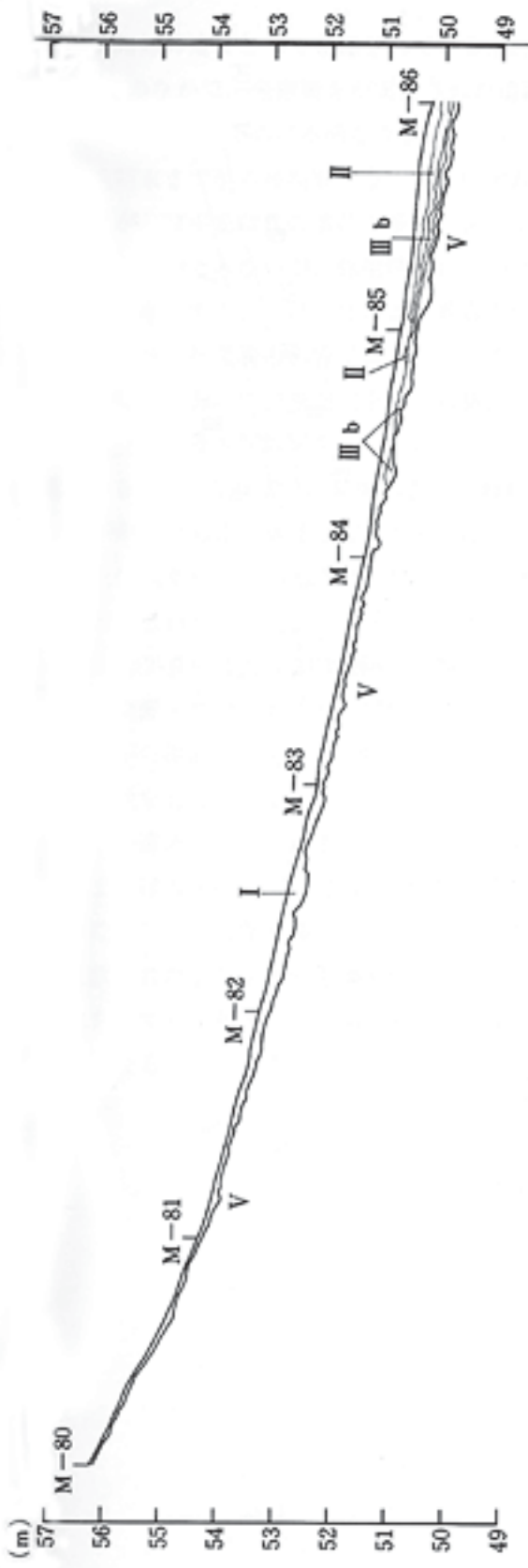
なお、107・108ラインでは基本土層に適合しない黒色土層が一枚見られた。第a層と第b層の間に挟まれたプライマリーな自然層である。この層が見られた際、基本土層の見直しも試みたが、この地点に限られる堆積であるため第x層(間層)と位置づけた。この層からは、縄文時代中・後期の土器が若干出土している。また、この層は第1号住居跡を覆っていたが、そこから石鏃が1点出土した。

### (2) 降下火山灰

東北北部地域では、10世紀前半に降下堆積したと推測される2枚の火山灰の存在が知られている。(町田・新井, 1992)。それに同定される火山灰が今回の調査区域でも、上位に白頭山苦小牧火山灰、下位に十和田a火山灰という堆積状況で検出された。これら火山灰が基本土層にレンズ状に堆積する地点は谷部に限定されており、頭頂部や中位斜面では風倒木痕以外検出されていない。このことから、降下後まもなく風に飛ばされたり前述のように降水で流されたりしたものである。

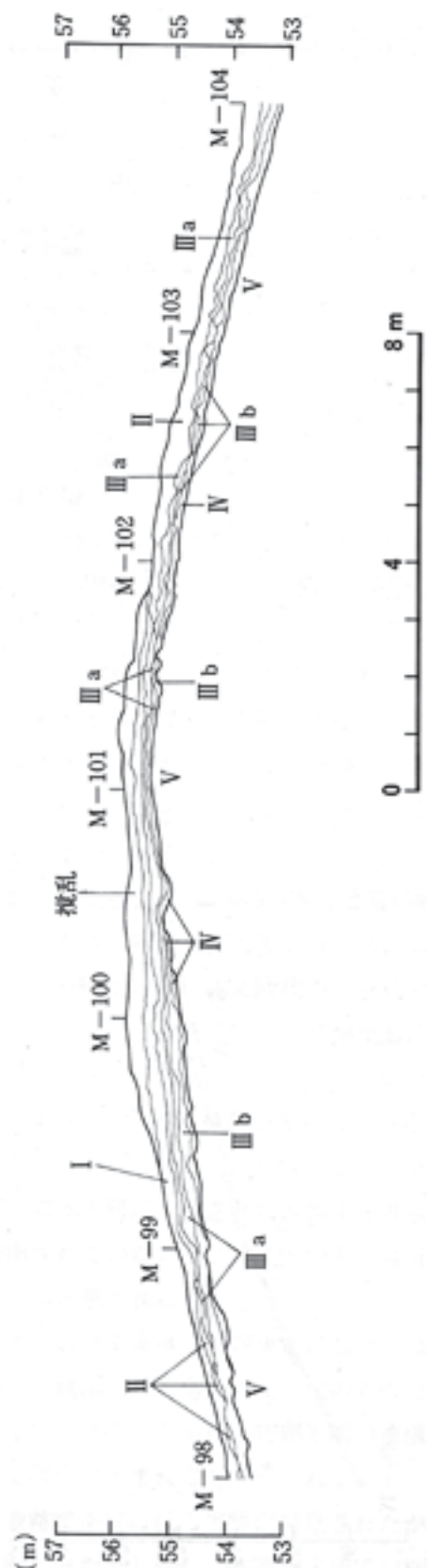
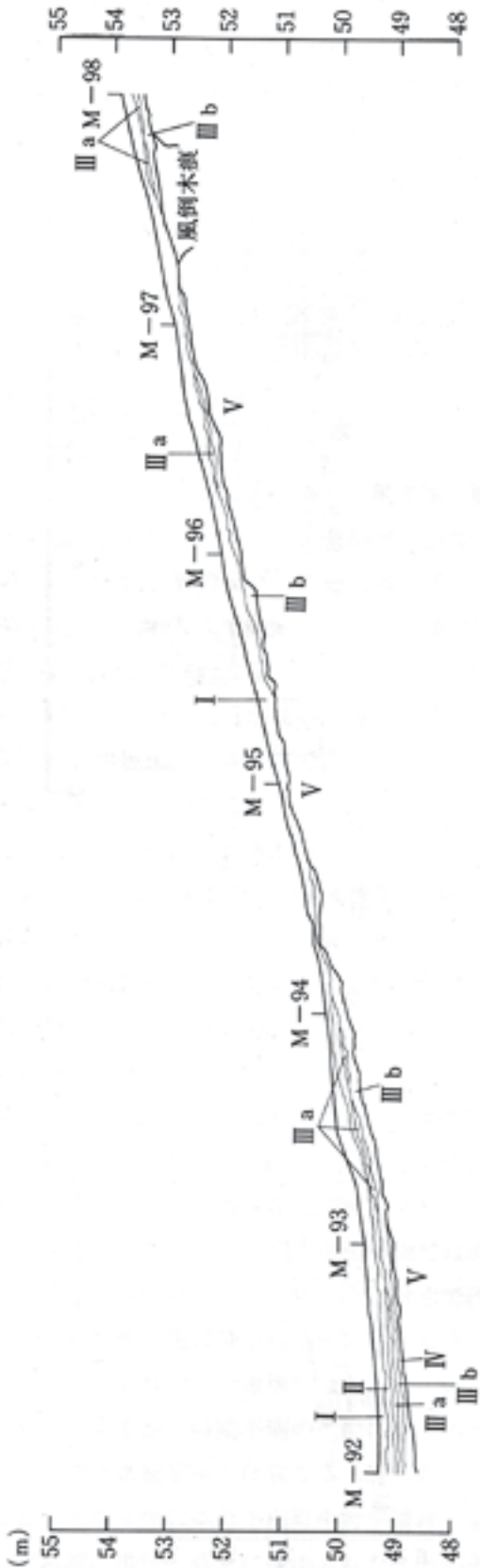
この2枚の火山灰は降下時期が特定されるため、10世紀前半における遺構の時期決定にしばしば利用されるが、今回検出した遺構にはこの火山灰は堆積していない。検出した遺構が縄文時代のものであったためではあるが、時期不明の遺構にもこの火山灰は見られない。このことから、時期不明の遺構についてもこの10世紀前半とは異なると思われ、他の状況から縄文時代に含まれると考えられる。

なお、平成6年に本県下田町中野平遺跡と東北町往来ノ上遺跡で平安時代の畑跡が発見されたが、火山灰が畝間に堆積し縞状に検出されたことがその確認の発端となった。しかし、本調査区域での検出状況では、縞状の堆積は見られずレンズ状の堆積が点在するのみである。このため、前述の2例とは異なり、何らかの原因で生じた小凹地に堆積したものである。(小林)



第7図 Mライン堆積状況(1)





第8図 Mライン堆積状況(2)

### 第3節 周辺の遺跡

青森市内で周知の遺跡として登録されている遺跡は、平成6年4月現在で228か所を数える。

この228遺跡のなかで、発掘調査が実施された遺跡は30あまりを数えるが、その他は表面観察による遺跡の把握である。そのために不明な点が多いことは否めないが、大半は、縄文時代前期中頃以降、中期・後期を経て晩期末まで至る長期間のなかで、いずれかの時期を複合する遺跡である。

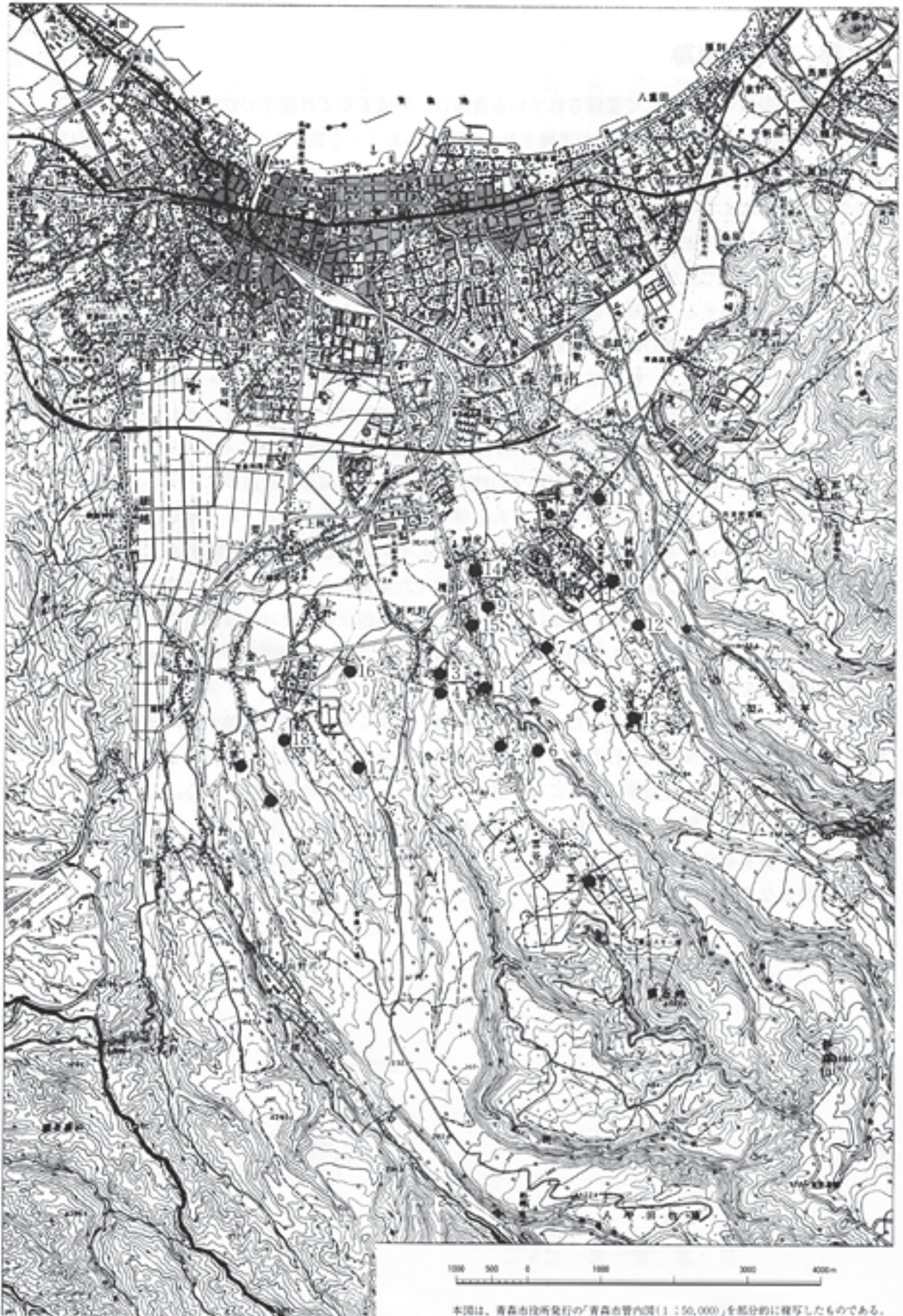
また、時代がとび平安時代の遺跡も多い。あくまでも現時点での状況であるため、今後、どのような展開になるのか予測できないが、弥生時代から奈良時代にかけての遺跡が極端に少ないことと平安時代以降になり再度増加することは、従来より青森市の歴史を考えるうえでの大きな謎である。社会的な何らかの変化または自然環境の影響によるものと考えられ、今後さらに重要な問題になると思われる。

このようななかであって、横内川を中心に駒込川・合子沢川に挟まれた幸畑・横内・合子沢地区、また上流域の雲谷・田茂木野地区を含むこの一帯での周知の遺跡は、第1表にまとめたとおりである。これらの遺跡のなかで、これまでに発掘調査が行われた遺跡は、8遺跡である。それらの遺跡の時代は、15の横内城跡が中世である以外ほとんどが縄文時代の遺跡である。桜峯(2)遺跡から出土した遺物は、少量ではあるが主に縄文前・中・後期の土器とそれに伴う石器である。また、わずかではあるが、早期後半～前期初頭と思われる尖底土器と晩期の土器も出土している。これらのことを踏まえると、3の横内遺跡と4の横内(2)遺跡は、桜峯(2)遺跡とは峰を1つ隔てた関係にあり、遺物も縄文前・中期の土器が出土しており、位置・時期ともに近い関係にある。また、7の四ツ石遺跡は、横内川を挟んだ東側台地に位置し、古くから後期の遺跡として知られている。これまで3度の発掘調査が実施されており、桜峯(2)遺跡とも同時性を有している。

簡単に周辺の遺跡について記述したが、この一帯は、平成5年度の横内遺跡・横内(2)遺跡発掘調査が実施されるまでは大規模な開発行為による緊急発掘調査や分布調査がほとんど実施されなかった地域である。そのために、広大な面積のわりには、遺跡数は少ないというのが実情である。このことは、青森市郊外に敷設された主要地方道青森環状野内線を境として、これまで内側の開発が主に行われてきたために、緊急を要する分布調査があまり実施されなかったと言わざるを得ない。今回の調査が、今後の調査への契機となることに期待したい。

(小林)





第9図 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡

番号	遺跡名	所在地	種別	主な時代	備考	遺跡番号
1	桜峯(2)	構内字桜峯・亀井	包蔵地	縄文(前・中・後)	1994調査(青森市教育委員会、1995本書)	208
2	桜峯(1)	構内字桜峯	散布地	縄文(前・中・後)	1994調査(青森市教育委員会、1997予定)	207
3	構内	合子沢字山崎	集落跡	縄文(前・中)	1993調査(青森市教育委員会、1995予定)	164
4	横内(2)	合子沢字山崎	集落跡	縄文(前・中)、平安	1993調査(青森市教育委員会、1995予定)	206
5	雲谷山吹(1)	雲谷字山吹	散布地	縄文(後)		199
6	鏡山	横内字鏡山	散布地	縄文(前・中・後)		209
7	四ッ石	四ッ石字里見	包蔵地	縄文(後)	1962・63調査(青森市教育委員会、1965) 1984調査(葛西・高橋、1987)	28
8	四ッ石(2)	四ッ石字里見	散布地	縄文(中・後)		194
9	四ッ石(3)	四ッ石字里見	散布地	縄文		215
10	阿部野	幸畑字阿部野	集落跡	縄文、平安		50
11	阿部野(2)	幸畑字阿部野	散布地	平安		219
12	阿部野(3)	幸畑字阿部野	散布地	平安		220
13	田茂木野	田茂木野字阿部野	包蔵地	縄文(晩)	1985調査(青森市教育委員会、1986)	160
14	野尻館	野尻字野田	城館	中世		173
15	横内城跡	横内字亀井	城館	中世	1986調査(青森市教育委員会、1987)	174
16	新町野	新町野字菅谷	散布地	縄文(前・中・後)、平安		167
17	野木	野木字山口・野尻、 合子沢字松森	散布地	縄文、平安		210
18	野木沢田	野木字沢田	散布地	平安		216
19	葛野(1)	大別内字葛野	散布地	縄文		217
20	葛野(2)	大別内字葛野	散布地	縄文、平安		218



## 第 章 検出遺構と出土遺物

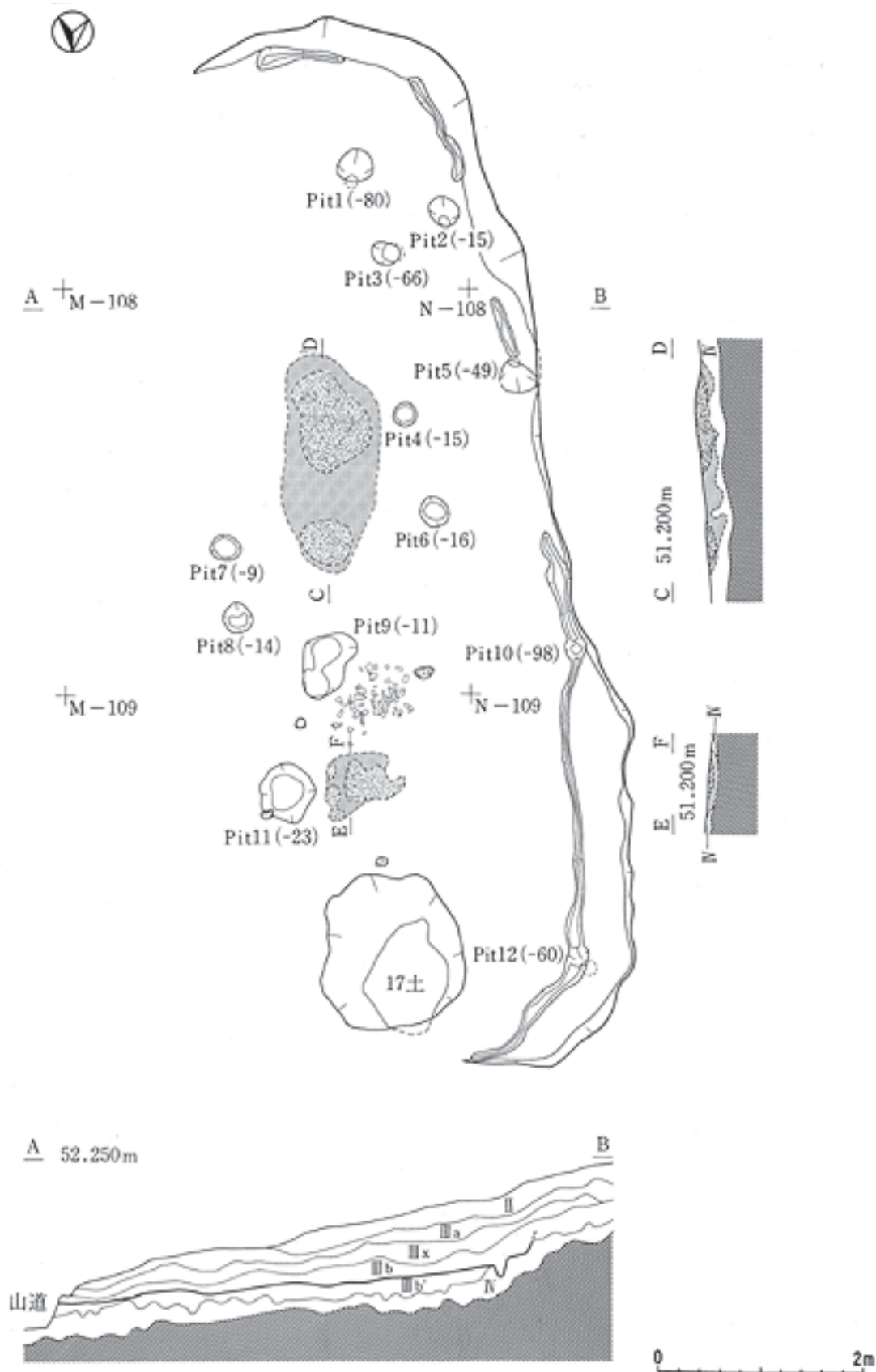
### 第 1 節 検出遺構と遺構内出土遺物

#### 1 竪穴式住居跡

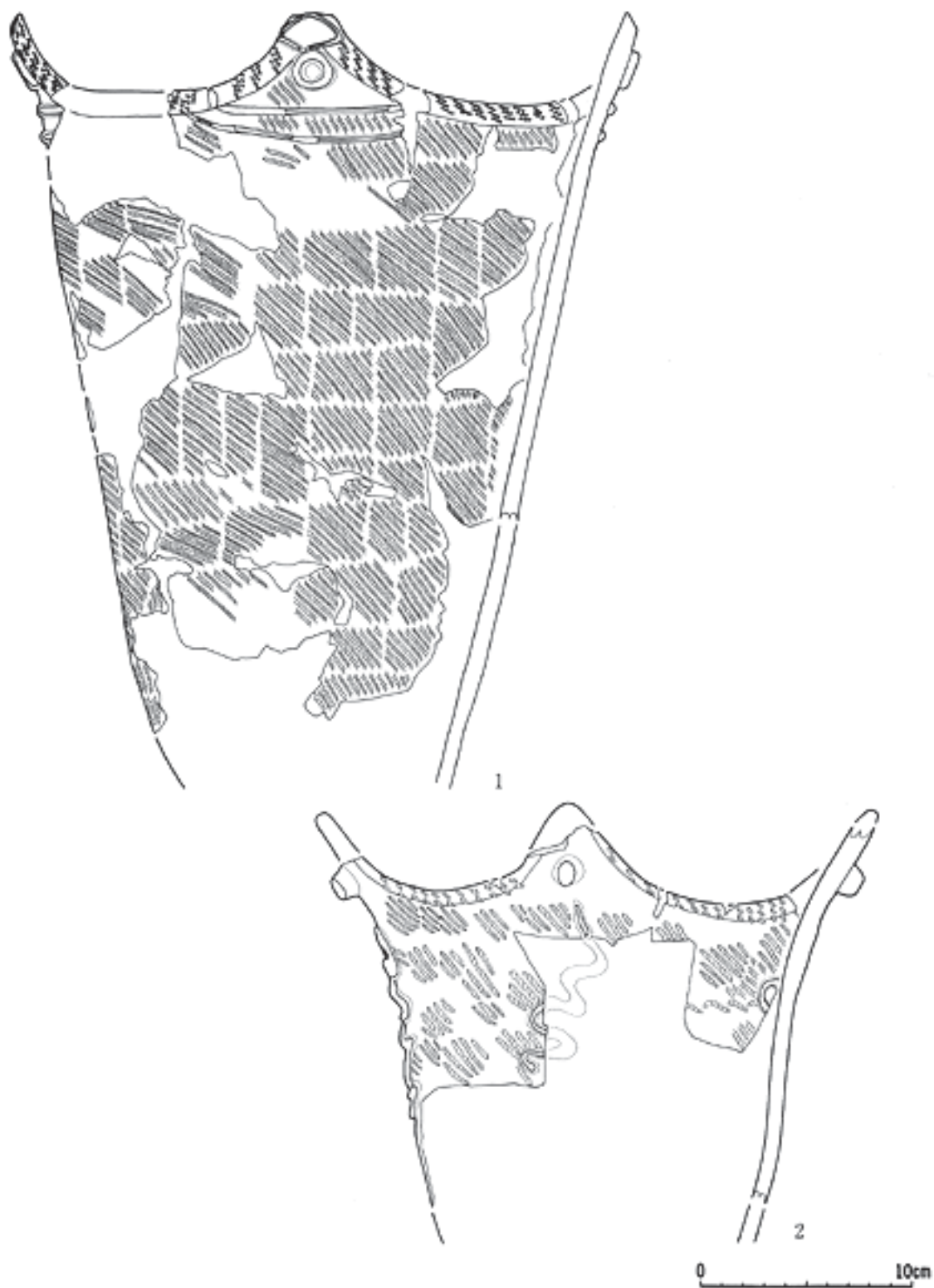
##### 第 1 号住居跡（第 10 ～ 12 図）

- [位置] M・N - 107 ～ 109、第 層で確認した。本遺構は、10m で 3.5m 下降する勾配角約 20° の西側急斜面が一旦緩やかに移行する地点に構築されている。また、調査以前この地点は地形を利用した山道になっており、その影響で遺構東側が一部攪乱・削平を受けている。
- [重 複] 複 2 軒の切り合いあるいは増改築が考えられたが、確認することはできなかった。また、遺構内北側に第 17 号土壌が位置するが、攪乱の影響もあり、付属施設の是非・構築順位を確認することはできなかった。
- [平面形・規模] 東側の攪乱・削平のため平面形・規模ともに不明である。炉の位置と現存する壁の形状から 10 × 5m はどの長円形を呈していたものと推測される。
- [壁] 現存する壁面は、ほぼ直立する。漸移層を壁面としており比較的脆弱である。壁高は、45cm である。
- [床] 傾斜地での構築のため、第 層まで掘り込んで床面とする部分と第 b 層黒色土から第 層漸移層を床面とする部分とが見られる。全体的に凹凸が見られ、床面としては比較的脆弱である。
- [壁 溝] 現存する壁溝から断続的ながらも全周していたと思われる。帽 8 ～ 20cm、最深 38cm である。
- [柱 穴] 計 12 基の柱穴状ピットを検出したが、支柱穴の配置は不明である。また、12 基のなかには外向するため上屋を支える柱としては不適なものもある。
- [炉] 地床炉 2 基を検出した。炭化物の広がり等から、ともに第 b 層黒色土が燃焼を受けていたと考えられる。第 層の焼土化の状況から、一時的なものではなくある期間連続して使用されたものと思われる。また、2 基の時間差については確認できなかった。
- [堆 積 土] 基本土層との関係で覆土の堆積を判断した。覆土第 1 層に対応する第 b 層の上面から床面にかけては、同一層と思われた。遺構の埋没は、第 b 層堆積過程に伴う自然堆積と思われる。また、床面の一部と判断した第 b' 層上面は、基本的に第 b 層と同質の土壌であったが、炭化物の検出面とわずかに異なる踏み締めりをもとに床面と判断した。なお、第 b 層と第 a 層との間の第 x 層は、間層として判断した（第 章第 2 節）。
- [その他の付属施設] なし。
- [出土遺物] 第 11 図 1 は第 2 号炉南側床面から出土した復元個体である。第 12 図 3 は第 2 号炉北側の床面で出土した。一見石槍に見えるが、加工・調整から搔器的な機能を有すると思われる。断面形は蒲鉾形となっており、轆皮が片面陵部の中程から先端部にかけて一部残存する。両側縁の刃部調整は比較的粗いものの、両面調整を施している。また、精査時に生じた傷以外ほぼ全面に光沢が見られる。4 は床面から出土した。2 面に礫皮が残存する。刃部は片面調整によるものであり、無調整の刃部背面には不明瞭ながら 3 ～ 8mm 幅の光沢帯が見られる。6・7 はともに床面での出土で、加熱によると思われる黒色変

化が見られる。なお、本遺構に伴うものかどうか不明であるが、第 x 層から 5 の石鏃が出土した。



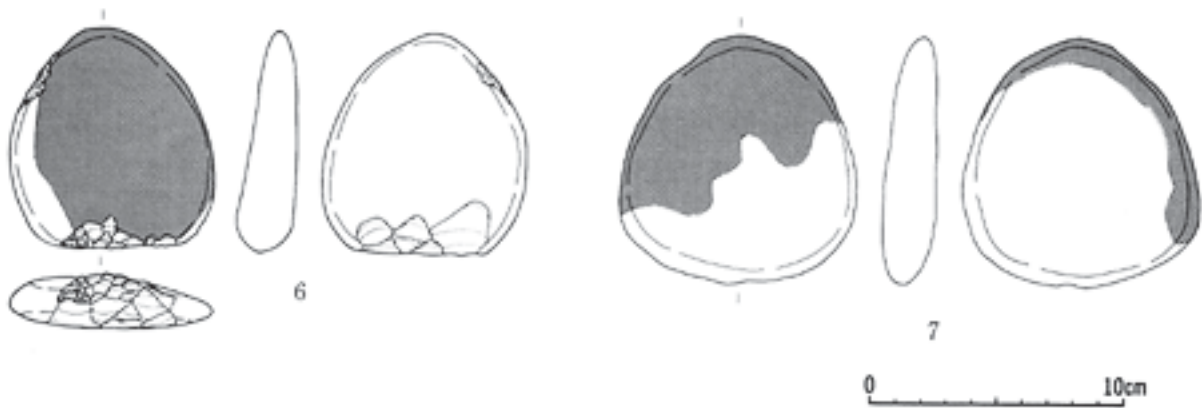
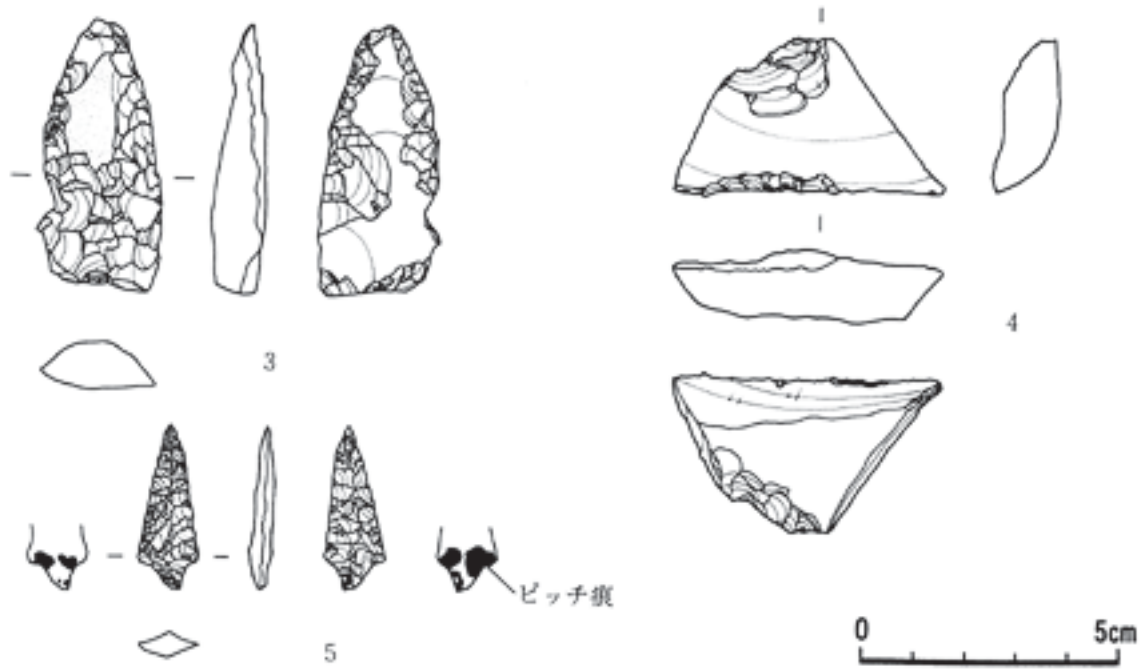
第10図 第1号住居跡



第1号住居跡出土土器観察表

図版番号	遺構	層位	器種・部位	外面の文様	時期	整理番号
11-1	1 住	床面	深鉢形	RL単節横位回転	中期	31
11-2	1 住	床面	深鉢形	RL単節横位回転	中期	32

第11図 第1号住居跡出土遺物



第12図 第1号住居跡出土遺物(2)

第1号住居跡出土石器計測表

図版番号	出土地点	層位	最大計測値				石質	器種	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
12-3	1住(M-109)	床面(b)	52	24	16	10.1	頁	d類	17	両側縁刃部、両面調整、基部欠損?
12-4	1住(M-108)	床面( )	32	53	18	18.4	頁	d類	20	片面調整
12-5	1住(M-107)	x	32	12	4	1.1	頁	a類	12	平基有茎、茎部破接、ピッチ
12-6	1住(M-109)	床面(b)	82	88	22	174	安山	h類	45	タタキ、焼石(黒色変化)
12-7	1住(M-109)	床面(b)	99	94	22	226	安山		46	焼石(黒色変化)

## 2 土 壙

### 第1号土壙(第13図)

- [位 置] G - 91、第 層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。
- [重 複] なし。
- [形状・規模] 開口部は、78 × 70cmの円形を呈する。断面形は、鍋底状である。
- [ 壁 ] 壁高は、32cmである。漸移層のためか、比較的脆弱である。
- [ 底 ] 第 層をわずかに掘り込み、底面としている。65 × 60cmの平坦な不整円形を呈し、比較的堅緻である。
- [堆 積 土] 2層に分層される。ともに、1～2mm大の浮石粒を多量に含んでいる。堆積土中からは、炭化物は見られない。自然堆積によるものと思われる。
- [出 土 遺 物] 出土していない。

### 第2号土壙(第13図)

- [位 置] Q - 82、第 層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。
- [重 複] なし。
- [形状・規模] 開口部は、115 × 90cmの楕円形を呈する。断面形は、鍋底状である。
- [ 壁 ] 壁高は、30cmであり、漸移層のためか、比較的脆弱である。
- [ 底 ] 第 層を底面とするためか、堅緻ではない。100 × 82cmの不整方形を呈し、平坦である。
- [堆 積 土] 2層に分層される。第1層には、1～2mm大のローム粒と石英の混入がわずかに見られる。第2層では、1～2mm大の炭化物がわずかに見られる。ともに、自然堆積によるものと思われる。
- [ 出土遺物 ] 出土していない。

### 第3号土壙(第13図)

- [位 置] Q - 80、第 層で黒褐色土の落ち込みを確認した。
- [重 複] なし。
- [形状・規模] 開口部は、130 × 140cmの不整円形を呈する。断面形は、不整形である。
- [ 壁 ] 壁高は22cmで、比較的堅緻である。
- [ 底 ] 第 層を底面としている。118 × 140cmの不整形を呈する。凹凸が見られるが、比較的堅緻である。北側に浅いピット1基が見られるが、用途は不明である。
- [堆 積 土] 2層に分層される。ローム粒と炭化物が含まれ、第1層には焼土粒も見られる。自然堆積によるものと思われる。
- [出 土 遺 物] 出土していない。

### 第4号土壙(第13図)

- [位 置] H - 90、第 層上面で暗褐色土の落ち込みを確認した。
- [重 複] なし。
- [形状・規模] 開口部は、74 × 69cmの円形を呈する。断面形は、皿状である。



[ 壁 ] 壁高は、14cmである。漸移層のためか、脆弱である。

[ 底 ] 第 層を底面とするためか、脆弱である。76 × 54cmの不整形を呈し、平坦である。

[ 堆 積 土 ] 3層に分層される。暗褐色土と黒褐色土が主体であり、いずれにも1～2mm大のローム粒が混入する。炭化物は見られない。自然堆積によるものと思われる。

[ 出 土 遺 物 ] 出土していない。

#### 第5号土壌（第13図）

[ 位 置 ] I - 91・92、第 層で暗褐色土の落ち込みを確認した。

[ 重 複 ] なし。

[ 形状・規模 ] 開口部は、245 × 80cmの不整形を呈する。

[ 壁 ] 壁高は30cmで、比較的堅緻である。

[ 底 ] 第 層を底面とし、地形にしたがい東側に傾斜する233 × 70cmの不整形を呈する。凹凸が見られるが、比較的堅緻である。

[ 堆 積 土 ] 2層に分層される。ともに1～2mm大のローム粒が含まれている。第1層には、大の炭化物が見られる。自然堆積によるものと思われる。

[ 出 土 遺 物 ] 出土していない。

#### 第6号土壌（第13図）

[ 位 置 ] H・I - 91、第 層で黒褐色土の落ち込みを確認した。

[ 重 複 ] なし。

[ 形状・規模 ] 開口部は、174 × 120cmの不整形を呈する。

[ 壁 ] 壁高は30cmで、比較的堅緻である。

[ 底 ] 第 層を底面とし、地形にしたがい南東側に傾斜する164 × 105cmの不整形を呈する。凹凸が見られ、比較的脆弱である。中央部に浅い掘り込みが見られる。

[ 堆 積 土 ] 1層である。黒褐色土が主体をなし、全体的にローム粒と浮石粒が含まれている。炭化物と焼土粒もわずかに含まれている。自然堆積によるものと思われる。

[ 出 土 遺 物 ] 出土していない。

#### 第7号土壌（第13図）

[ 位 置 ] K・L - 84、第 層で暗褐色土の落ち込みを確認した。

[ 重 複 ] なし。

[ 形状・規模 ] 開口部は、112 × 103cmの円形を呈する。断面形は、鍋底状である。

[ 壁 ] 壁高は40cmで、比較的堅緻である。

[ 底 ] 第 層を底面とし、97 × 85cmの不整形を呈する。若干の凹凸が見られるが、比較的堅緻である。

[ 堆 積 土 ] 1層である。1～2mm大のローム粒と浮石粒が全体的に見られる。

[ 出 土 遺 物 ] 出土していない。

第8号土壙(第13図)

- [位置] P・Q - 110、第 層で黒色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [形状・規模] 開口部は、243 × 183cmの不整形を呈する。
- [壁] 壁高は43cmであるが、短軸では、ゆるやかな壁となっている。比較的堅緻である。
- [底] 第 層を底面とし、地形にしたがい東側に傾斜する220 × 130cmの不整形を呈する。若干の凹凸が見られるが、比較的堅緻である。
- [堆積土] 3層に分層される。全体的に1mm未満のローム粒が含まれている。また、いずれにも焼土粒が含まれている。
- [出土遺物] 出土していない。

第9号土壙(第14・18図)

- [位置] J - 101・102、第 層で黒褐色土の落ち込みを確認した。この地点は、平成5年度に県教育庁文化課が実施した試掘箇所である。
- [重複] なし。
- [形状・規模] 開口部は162 × 127cmの円形である。断面形はフラスコ状である。
- [壁] 壁高は140cmで、堅緻である。
- [底] 第 層を底面とし、219 × 204cmの円形を呈する。ほぼ水平を保ち、平滑で堅緻である。
- [堆積土] 17層に分層される。その土質・色調から第1～3層と第4～17層に大別され、下位層の第4～17層は上位層に比べ、ローム質の強い堆積土となっている。堆積層全体に、炭化物とわずかな焼土粒が見られる。西側に壁の崩落と思われる大きなローム塊が見られたが、その下位にあたる第12～17層は人為堆積の可能性がある。
- [出土遺物] 1・2は、底面からの出土であり、深鉢形土器の破片である。土器型式の特定は困難であるが、縄文時代後期または中期末～後期と考えられる。3も底面からの出土ではある。ただし、1・2以前のものであることと堆積状況から本遺構に直接伴うものではなく、本遺構覆土の際の混入と思われる。

第10号土壙(第14図)

- [位置] O - 136、第 層で黒褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [形状・規模] 開口部は、115 × 115cmの隅丸方形を呈する。
- [壁] 壁高は26cmで、壁上位は比較的脆弱である。また、西壁で焼土化した部分も見られる。
- [底] 第 層を底面とする110 × 100cmの隅丸方形を呈するが、これは掘り方と思われ、遺構使用時の底面は第2層であったと思われる。
- [堆積土] 3層に分層される。第2層内全面から多量の本炭状の炭化物が出土した。炭化物の出土状況と壁面の焼土から、本遺構内において、燃焼行為が行われたものと思われる。また、第1層は、自然堆積によるものと思われる。
- [出土遺物] 出土していない。

第11号土壙（第14・18図）

- [位置] L - 101、第 層で黒色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [形状・規模] 開口部は、152 × 132cm の不整形円形を呈する。断面形は、フラスコ状である。
- [壁] 壁高は162cmで、堅緻である。
- [底] 第 層を底面とし、200 × 195cm の不整形円形を呈する。ほぼ水平を保ち、平滑で堅緻である。また、床面北側とその延長の壁下部から赤色顔料が検出された。
- [堆積土] 20層に分層される。地形の傾斜とは異なり、東側から流れるような層の堆積が見られる。第1～3層は黒色系の土壌が主体となるが、第7層以下はローム質が主体を占めている。特に、第15層以下については、入り混じった土質とその堆積状況から、人為堆積の可能性が高い。
- [出土遺物] 出土した遺物はいずれも、堆積土中からのものである。5・6・8は、第7・15・19層から出土した無文の土器で、時期は不明である。7は、第19層からの出土である。土器型式の特定は困難であるが、縄文時代後～晩期と考えられる。

第12号土壙（第14・18図）

- [位置] I・J - 100・101、第 層で黒褐色土とにぶい黄橙色土の落ち込みを確認した。
- [重複] 底部東側でわずかに第33号土壙と重複するが、本遺構が新しい。
- [形状・規模] 開口部は、145 × 132cm の円形を呈する。断面形は、フラスコ状である。
- [壁] 壁高は137cmで、堅緻である。
- [底] 第 層を底面とし、215 × 200cm の円形を呈する。ほぼ水平を保ち、平滑で堅緻である。また、南西側で、赤色顔料が散布された痕跡を検出した。
- [堆積土] 20層に分層される。第1層は、ローム質であり、本土壙に蓋をする意図が感じられる。第13層は、黄褐色ロームの埋め戻しと思われる。第16層は黄褐色ローム主体の堆積だが、平坦で堅緻になっていることから、二次的な底面としての利用が考えられる。総じて、ローム質等の入り混じった土質と堆積状況から、人為堆積の可能性が高い。
- [出土遺物] 11は、底面からの出土である。深鉢形土器の底部である。11・12は、第15層からの出土したものであるが、別個体の破片である。前述のように第16層を第2期床面すると、層形成直後に包含されたと考えられる。いずれも土器型式の特定は困難であるが、縄文時代中期末～後期と考えられる。

第13号土壙（第15・18図）

- [位置] M - 100、第 層で暗褐色土と黒褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [形状・規模] 開口部は、170 × 157cm の不整形円形を呈する。断面形は、フラスコ状である。
- [壁] 壁高は143cmで、堅緻である。
- [底] 第 層を底面とし、195 × 193cm の円形を呈する。緩やかに湾曲するが、平滑で堅緻である。



[堆積土] 30層に分層される。西側の第8・11～13・15～19層は、ローム粒が多量に含まれた縞状の堆積である。また、第4・14・9・10・21・30層は、黄褐色のロームブロックとなっており、壁の崩落と思われる。中央部での堆積土の色調はいずれも黒褐～暗褐色であり、ローム粒の混入は微量である。これらのことから自然堆積と思われる。

[出土遺物] は、第1・6層から出土した接合破片であり、深鉢形土器の胴部破片である。土器型式の特定は困難であるが、縄文時代後期～晩期と幅を考えられる。また、13は第4層から、15は第2層から出土した土器破片である。ともに縄文時代前期の土器である。以上、3点はいずれも流れ込みによる混入と思われる。

#### 第14号土壙(第15・18図)

[位置] J・K - 89・90、第層で黒褐色土の落ち込みを確認した。なお、基本土層第b層で遺構の掘り込みも確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 開口部は、184 × 170cmの円形を呈する。断面形は、鍋底状である。

[壁] 壁高は52cmで、堅緻である。

[底] 第層を底面とし、148 × 137cmの円形を呈する。ほぼ水平を保ち、平滑で堅緻である。

[堆積土] 6層に分層される。いずれにも、ローム粒・浮石粒・炭化物が含まれている。また、本遺構は、基本土層第b層中位から掘り込まれ、第b層は若干くぼんだ第1層上面を覆っている。第1～6層は、第b層と基本的に同質であり、自然堆積によるものと思われる。

[出土遺物] は、第2・5層から出土した深鉢形土器破片であり、縄文時代晩期の土器である。17は第6層から出土した土器破片であり、磨消縄文から縄文時代後期～晩期に属すると考えられる。16は第5層から出土した土器破片であり、縄文時代中期の土器である。いずれも、堆積土中からの出土ではあるが、15の縄文時代晩期が遺構構築時期に最も近いと思われる。

#### 第15号土壙(第15図)

[位置] N - 99・100、第層で黒褐色土の落ち込みを確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 開口部は、210 × 196cmの不整円形を呈する。断面形は、フラスコ状である。

[壁] 壁高は162cmで、堅緻である。また、東側の開口部は、埋め戻しにより再構築した可能性がある。

[底] 第層を底面とし、161 × 138cmの不整円形を呈する。ほぼ水平であり、平滑で堅緻である。

[堆積土] 23層に分層される。地形の傾斜とは異なり、東側から流れるような層の堆積が見られる。これらの層は、主に黄褐～灰黄褐色であり、ローム粒と浮石が多量に含まれている。一方、黒～暗褐色土は、第1・2・5・11・15層に限られる。これらの堆積状況から人為堆積によるものと考えられたが、東壁開口部再構築の可能性からその自然崩落によることも考えられ、現状においてそれらの決定は困難であった。

[出土遺物] 出土していない。

第16号土壇(第15図)

[位置] J-101、第層で暗褐色土と灰黄褐色土の落ち込みを確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 開口部は、60×55cmの円形を呈する。断面形は、鍋底状である。

[壁] 壁高は18cmで、堅緻である。

[底] 第層を底面とし、52×45cmの不整形円形を呈する。凹凸が見られるが、比較的堅緻である。

[堆積土] 3層に分層される。第2・3層は黄褐色系のローム質であり、埋め固められたものと思われる。第1層は、中央部に縦位に堆積している。これらのことから、第1層が柱穴として使用された際の柱痕とも考えられるが、定かではない。

[出土遺物] 出土していない。

第17号土壇(第15・18図)

[位置] M-109、第層で黒色土の落ち込みを確認した。

[重複] 第1号住居跡内に位置するが、その付属施設が独立した遺構かの確認はできなかった。

[形状・規模] 開口部は、155×143cmの不整形円形を呈する。

[壁] 壁高は84cmで、堅緻である。

[底] 第層を底面とし、112×86cmの不整形を呈する。北側から南側へ傾斜し、堅緻である。

[堆積土] 7層に分層される。黒～黒褐色土が、円錐状に中央部で堆積している。また、第6層は5cm以下の多量のローム塊による堆積である。第7層は粘性の強いローム質である。

[出土遺物] 18は、第4層からの出土である。

第18号土壇(第15図)

[位置] J-101、第層で灰黄褐色土の落ち込みを確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 開口部は、60×55cmの円形を呈する。断面形は、鍋底状である。

[壁] 壁高は24cmで、堅緻である。

[底] 第層を底面とし、45×40cmの不整形円形を呈する。椀状であり、堅緻である。

[堆積土] 1層である。灰黄褐色のローム質であり、堅くしまって堆積している。

[出土遺物] 出土していない。

第19号土壇(第15・18図)

[位置] J・K-100、第層で褐色土と暗褐色土の落ち込みを確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 開口部は、77×63cmの円形を呈する。断面形は、鍋底状である。

[壁] 壁高は26cmで、堅緻である。

[底] 第層を底面とし、51×45cmの円形を呈する。ほぼ平坦で、堅緻である。

[堆積土] 3層に分層される。第2・3層には、1mm大のローム粒と浮石粒が含まれている。  
[出土遺物] 伊は、第2・3層から出土した深鉢形と思われる接合破片である。

#### 第20号土壙(第16図)

[位置] J - 100、第層で暗褐色土の落ち込みを確認した。  
[重複] なし。  
[形状・規模] 開口部は、83 × 75cmの円形を呈する。断面形は、鍋底状である。  
[壁] 壁高は22cmで、堅緻である。  
[底] 第層を底面とし、72 × 65cmの円形を呈する。若干凹凸は見られるが、堅緻である。  
[堆積土] 3層に分層される。第1・3層には、1mm大のローム粒が含まれている。第2層には、炭化物が見られる。  
[出土遺物] 出土していない。

#### 第21号土壙(第16図)

[位置] J - 100、第層で暗褐色土の落ち込みを確認した。  
[重複] なし。  
[形状・規模] 開口部は、58 × 52cmの円形を呈する。断面形は、鍋底状である。  
[壁] 壁高は21cmで、堅緻である。  
[底] 第層を底面とし、47 × 46cmの円形を呈する。若干凹凸は見られるが、堅緻である。  
[堆積土] 1層である。1mm大のローム粒と浮石粒が含まれている。  
[出土遺物] 出土していない。

#### 第22号土壙(第16図)

[位置] J - 100、第層で黒褐色土の落ち込みを確認した。  
[重複] なし。  
[形状・規模] 開口部は、71 × 64cmの円形を呈する。断面形は、鍋底状である。  
[壁] 壁高は35cmで、堅緻である。  
[底] 第層を底面とし、61 × 47cmの楕円形を呈する。緩やかな皿状で、堅緻である。  
[堆積土] 2層に分層される。ともに1mm大のローム粒と石英が含まれている。第1層には、浮石粒と炭化物が含まれている。  
[出土遺物] 出土していない。

#### 第23号土壙(第16・18・19図)

[位置] J - 100・101、第層で暗褐色土の落ち込みを確認した。  
[重複] なし。  
[形状・規模] 開口部は、185 × 110cmの楕円形を呈する。断面形は、フラスコ状である。  
[壁] 壁高は150cmで、堅緻である。  
[底] 第層を底面とし、187 × 176cmの円形を呈する。ほぼ水平を保ち、平滑で堅緻である。

- [堆積土] 15層に分層される。第5・8層は西側から傾斜して堆積している。中位壁際には、ローム塊が見られ、壁の崩落と思われる。堆積状況と土質から、人為堆積よりは自然堆積の可能性が高い。
- [出土遺物] 出土した遺物はいずれも、堆積土中からである。20は第6層、21は第4層、22は第1・4層からの出土である。縄文時代中期末～後期にかけてのものと思われるが、遺構に伴うものであるかは不明である。

第24号土壌(第16・19図)

- [位置] J - 100・101、第 層で暗褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [形状・規模] 開口部は、97 × 80cmの円形を呈する。断面形は、鍋底状である。
- [壁] 壁高は26cmで、堅緻である。
- [底] 第 層を底面とし、67 × 53cmの不整形を呈する。ほぼ平坦で、堅緻である。
- [堆積土] 3層に分層される。いずれにも、1mm大の浮石粒が含まれている。第2・3層には、炭化物が含まれている。
- [出土遺物] 23は、第2層からの出土である。その出土状況から埋設された可能性も考えられたが、残存部がわずかであることから、状況を把握することが困難であり、土壌内の出土として扱った。土器型式の特定も困難であるが、縄文時代中期末～後期と考えられる。

第25号土壌(第16図)

- [位置] N - 84、第 層で黒褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [形状・規模] 開口部は、76 × 71cmの不整円形を呈する。
- [壁] 壁高は41cmで、堅緻である。
- [底] 第 層を底面とし、60 × 52cmの不整形を呈する。堅緻であり、ピット1基が見られる。
- [堆積土] 4層に分層される。いずれにも、5mm大のローム粒が含まれている。第2・3層には、炭化物が含まれている。堆積状況から、自然堆積によるものと思われる。
- [出土遺物] 出土していない。

第26号土壌(第16図)

- [位置] K - 90・91、第 層で黒色土と黒褐色土の落ち込みを確認した。
- [重複] なし。
- [形状・規模] 開口部は、230 × 213cmの円形を呈する。断面形は、鍋底状である。
- [壁] 壁高は73cmで、堅緻である。
- [底] 第 層を底面とし、141 × 115cmの楕円形を呈する。ほぼ水平を保ち、平滑で堅緻である。
- [堆積土] 5層に分層される。いずれにも、1～5mm大のローム粒が含まれている。第1・4・5層には、2～3mm大の炭化物が含まれている。堆積状況から、自然堆積によるものと思われる。

[出土遺物] 第4層から自然礫1個出土したのみである。

#### 第27号土壙(第16図)

[位置] L・M - 101、第1層で黒褐色土の落ち込みを確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 開口部は、48 × 46cmの円形を呈する。断面形は、フラスコ状である。遺構内に入り込むには、窮屈な開口部の規模である。

[壁] 壁高は130cmで、堅緻である。

[底] 第1層を底面とし、170 × 170cmの円形を呈する。緩やかに湾曲しているが、ほぼ平滑で堅緻である。

[堆積土] 9層に分層される。堆積層は、第1層、第3～6層、第7・8層の3群に大別される。中位層の第3～6層は、にぶい黄橙色と黄褐色のロームによる堆積であるため、壁の崩落によるものではないかと考えられたが、地形の傾斜方向とは異なる東側からの堆積であることと各層ごとに異なる粒大の違いから、人為堆積の可能性が高い。第1層については、自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土していない。

#### 第28号土壙(第17・19図)

[位置] O - 99・100、第1層で黒褐色土と褐色土の落ち込みを確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 開口部は、193 × 184cmの円形を呈する。断面形は、フラスコ状である。

[壁] 壁高は160cmで、堅緻である。

[底] 第1層を底面とし、202 × 202cmの円形を呈する。東側に向かい緩やかに傾斜し、ほぼ平滑で堅緻である。この傾斜と関係があるものか確認するまで至らなかったが、東側で2基のピットを検出した。

[堆積土] 15層に分層される。西側の第7・10層、東側の6・9・11層、底面上第13層は、ロームの混入が多く全体的に白濁した色調である。一方、円錐状に堆積する第1・3・4層は、黒褐色系の色調である。色調の違いは、堆積時期の違いによるものと思われる。前者は、壁の崩壊も含め、流れ込みによる堆積と思われる。また、後者についても同様であると思われる。

[出土遺物] 24・25は、第1層からの出土である。26は、第2層からの出土である。

#### 第29号土壙(第17図)

[位置] L - 115、第1層で黒色土の落ち込みを確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 開口部は、118 × 106cmの円形を呈する。断面形は、フラスコ状である。

[壁] 壁高は144cmで、堅緻である。

[底] 第1層を底面とし、164 × 152cmの円形を呈する。西側が緩やかにくぼむ以外は、ほぼ



平滑であり堅緻である。

[堆積土] 13層に分層される。堆積土は、黒色土と黒褐色土が主体を占めている。堆積土ほぼ全体には1～4mm大のローム粒が含まれ、第5～9・11～13層には炭化物がわずかに含まれている。第10層は、ローム粒が縞状に数枚の層を成して堆積し、壁の崩落によるものと思われる。また、第12層上位でも、壁の崩落と思われるローム塊の混入が見られる。これらのことから、自然堆積によるものと思われる。

[出土遺物] 出土していない。

#### 第30号土壙(第17図)

[位置] K-114、第層で黒色土の落ち込みを確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 開口部は、92×82cmの円形を呈する。断面形は、フラスコ状である。

[壁] 壁高は77cmで、堅緻である。

[底] 第層を底面とし、117×108cmの円形を呈する。ほぼ平滑であり堅緻である。中央部には楕円形のピット1基が見られる。

[堆積土] 8層に分層される。堆積土は、黒色土と黒褐色土が主体を占めている。第1～7層には、ローム粒・焼土粒・石英が含まれている。堆積土の土質がほぼ同質であることなどから、自然堆積によるものと思われる。

[出土遺物] 底面から、加工痕・使用痕の見られない自然礫1個が出土したのみである。

#### 第31号土壙(第17・19図)

[位置] N・0-116、第層で暗褐色土の落ち込みを確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 開口部は、89×84cmの円形を呈する。断面形は、フラスコ状である。

[壁] 壁高は61cmで、堅緻である。

[底] 第層を底面とし、118×106cmの不整円形を呈する。ほぼ平滑であり堅緻である。

[堆積土] 5層に分層される。堆積土は、暗褐色土が主体を占めている。第2層は、ローム塊であり、壁の崩落によるものと思われる。第3・4層には、炭化物が含まれている。自然堆積によるものと思われる。

[出土遺物] 27・28・29はいずれも第3層からの出土である。いずれも同一の個体の破片と思われ、無文である。口唇部はほぼ平坦に調整を施されている。口縁部に若干の歪みが見られるが、深鉢形土器である。土器型式の特定は困難であるが、縄文時代後期と考えられる。

#### 第32号土壙(第17図)

[位置] N-101、第層で黒褐色土の落ち込みを確認した。

[重複] なし。

[形状・規模] 開口部は、80×62cmの楕円形を呈する。断面形は、鍋底状である。

[壁] 壁高は28cmで、堅緻である。

- [ 底 第 層を底面とし、75 × 45cmの不整形を呈する。ほぼ平滑であり堅緻である。
- [ 堆 積 土 ] 1層である。ローム粒・炭化物・焼土粒が含まれている。
- [ 出 土 遺 物 ] 出土していない。

#### 第33号土壙（第17図）

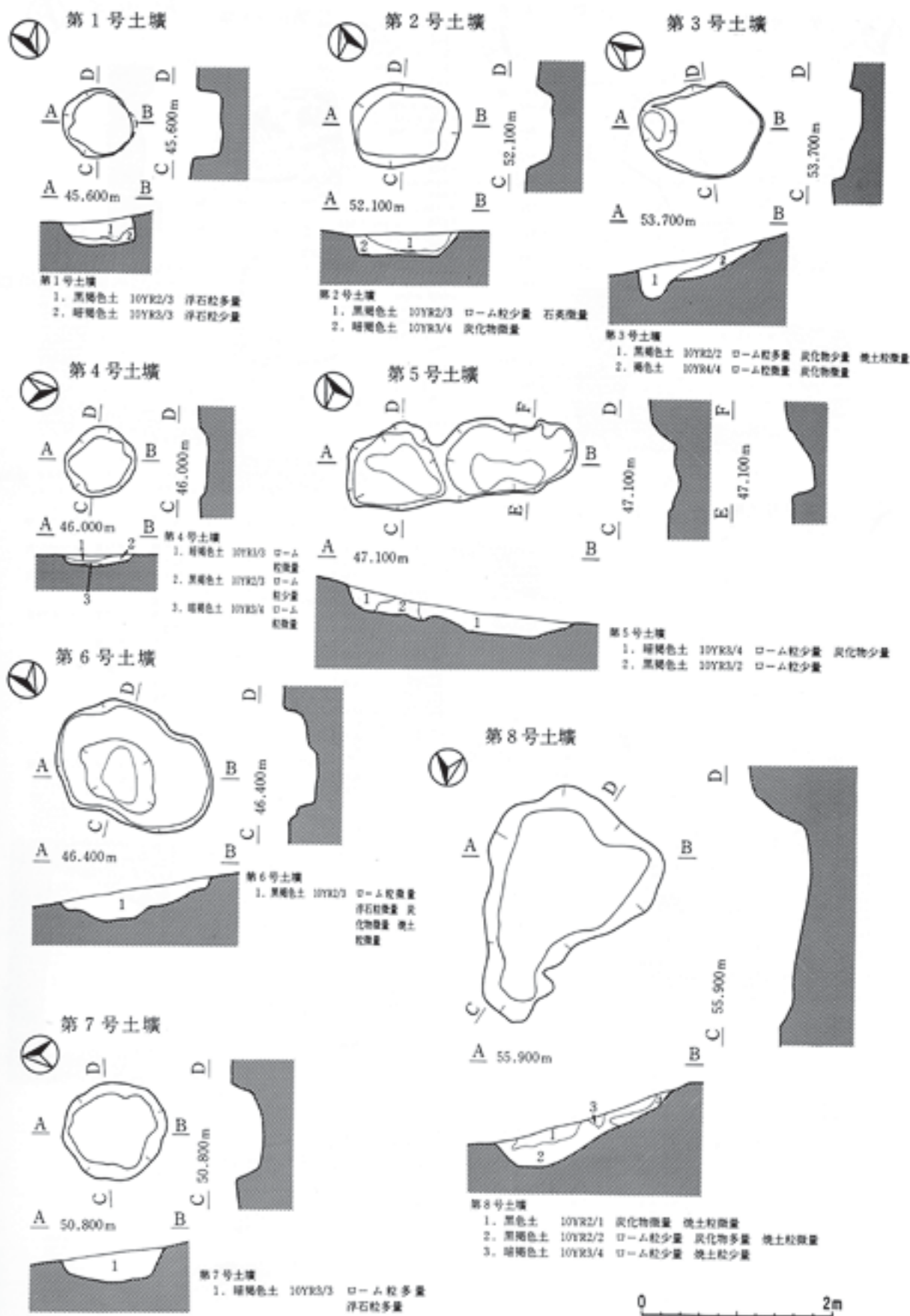
- [ 位 置 ] I - 100、第 層で褐色土の落ち込みを確認した。
- [ 重 複 ] 底面付近で第11号土壙と重複するが、本遺構が古い。
- [ 形状・規模 ] 開口部は、82 × 70cmの楕円形を呈する。断面形は、フラスコ状である。
- [ 壁 壁高 ] は112cmで、堅緻である。
- [ 底 第 層を底面とし、85 × 80cmの円形を呈する。わずかに湾曲するが、ほぼ平滑であり堅緻である。
- [ 堆 積 土 ] 2層に分層される。第1層は、褐色のローム質であり、蓋状に堆積させた意図が感じられる。第2層以下は、全体的にしまりはなく、2～5mm大の浮石が比較的多く見られる。これらのことから、人為堆積によるものと思われる。
- [ 出 土 遺 物 ] 出土していない。

#### 第34号土壙（第17図）

- [ 位 置 ] I - 100、第 層で暗褐色土の落ち込みを確認した。
- [ 重 複 ] 北側で第35号土壙と重複するが、本遺構が新しい。
- [ 形状・規模 ] 開口部は、55 × 46cmの楕円形を呈する。断面形は、鍋底状である。
- [ 壁 壁高 ] は38cmで、堅緻である。
- [ 底 第 層を底面とし、28 × 28cmの円形を呈する。わずかに湾曲するが、ほぼ平滑であり堅緻である。
- [ 堆 積 土 ] 5層に分層される。上位の第1・2層は暗褐色土の堆積であるが、下位の第3～5層は黄褐色系のローム質である。
- [ 出 土 遺 物 ] 出土していない。

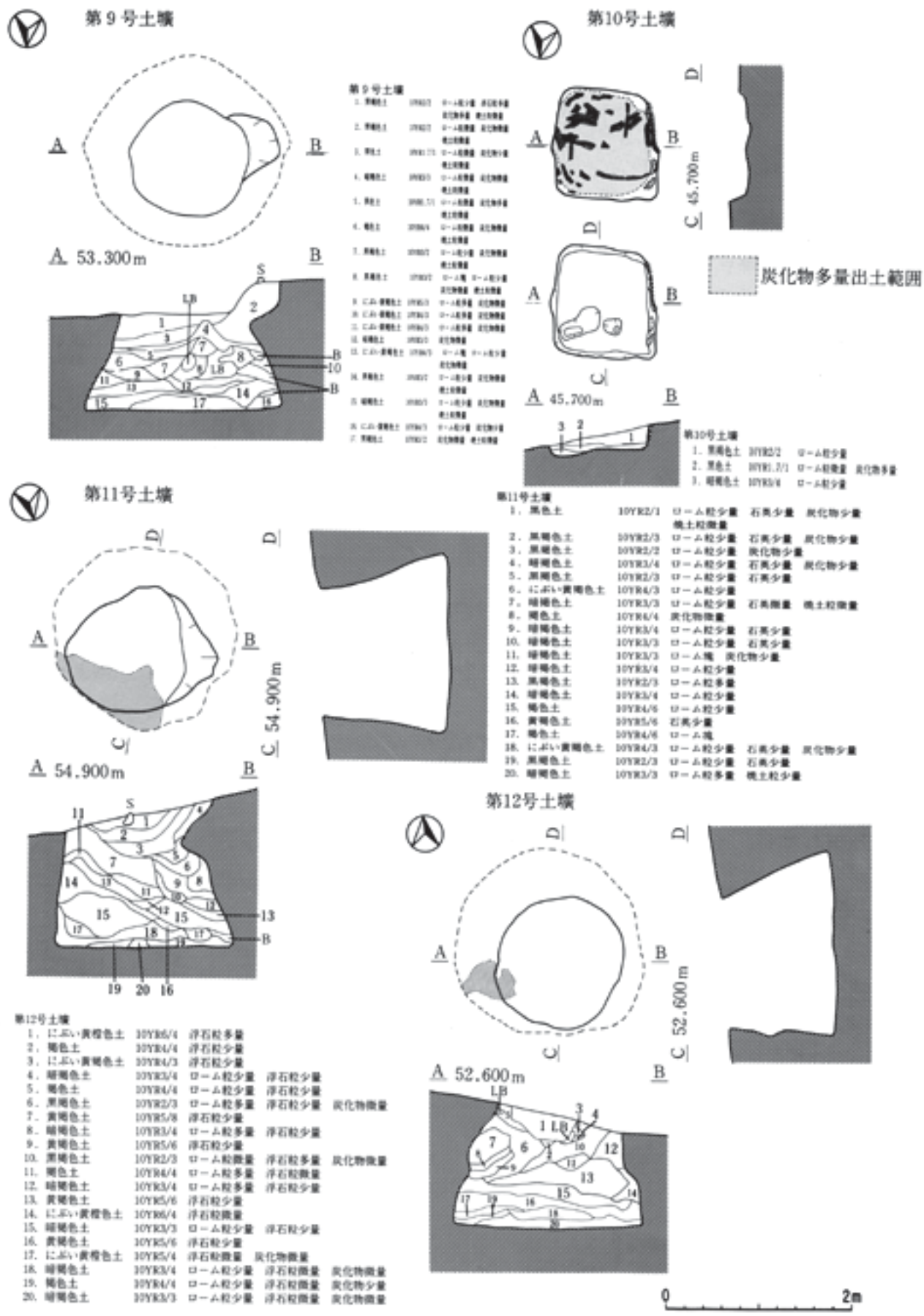
#### 第35号土壙（第17図）

- [ 位 置 ] II - 100・101、第 層でにぶい黄褐色土の落ち込みを確認した。
- [ 重 複 ] 南側で第34号土壙と重複するが、本遺構が古い。
- [ 形状・規模 ] 重複のため規模は不明であるが、開口部は48 × 30cmの不整形を呈すると思われる。
- [ 壁 残存部の壁高 ] は24cmで、堅緻である。
- [ 底 第 層を底面とし、南側へ傾斜し、堅緻である。
- [ 堆 積 土 ] 2層に分層される。ともに黄褐色系のローム質である。
- [ 出 土 遺 物 ] 出土していない。

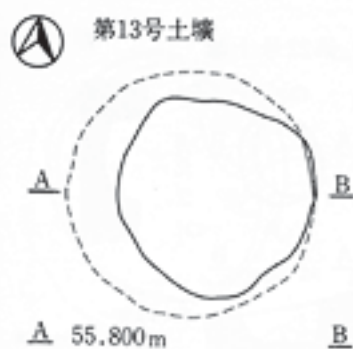


第13图 第1~8号土壤





第14图 第9~12号土壤



A 55.800m



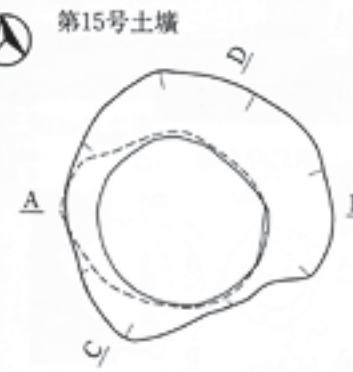
- 第13号土壤
- |           |         |        |
|-----------|---------|--------|
| 1. 暗褐色土   | 10YR2/1 | ロ-A粒少量 |
| 2. 暗褐色土   | 10YR2/2 | ロ-A粒少量 |
| 3. 灰黄褐色土  | 10YR3/2 | ロ-A粒少量 |
| 4. 褐色土    | 10YR4/1 | ロ-A粒少量 |
| 5. 暗褐色土   | 10YR2/2 | ロ-A粒少量 |
| 6. 暗褐色土   | 10YR2/2 | ロ-A粒少量 |
| 7. 灰黄褐色土  | 10YR3/2 | ロ-A粒少量 |
| 8. 暗褐色土   | 10YR2/2 | ロ-A粒少量 |
| 9. 暗褐色土   | 10YR2/2 | ロ-A粒少量 |
| 10. 暗黄褐色土 | 10YR3/2 | ロ-A粒少量 |
| 11. 灰黄褐色土 | 10YR3/4 | ロ-A粒少量 |
| 12. 暗褐色土  | 10YR2/2 | ロ-A粒少量 |
| 13. 暗褐色土  | 10YR2/2 | ロ-A粒少量 |
| 14. 灰黄褐色土 | 10YR3/4 | ロ-A粒少量 |
| 15. 灰黄褐色土 | 10YR3/4 | ロ-A粒少量 |
| 16. 暗褐色土  | 10YR2/2 | ロ-A粒少量 |
| 17. 暗褐色土  | 10YR2/2 | ロ-A粒少量 |
| 18. 灰黄褐色土 | 10YR3/2 | ロ-A粒少量 |
| 19. 暗褐色土  | 10YR2/2 | ロ-A粒少量 |
| 20. 暗褐色土  | 10YR2/2 | ロ-A粒少量 |
| 21. 灰黄褐色土 | 10YR3/2 | ロ-A粒少量 |
| 22. 暗褐色土  | 10YR2/2 | ロ-A粒少量 |
| 23. 暗褐色土  | 10YR2/2 | ロ-A粒少量 |
| 24. 暗褐色土  | 10YR2/2 | ロ-A粒少量 |
| 25. 暗褐色土  | 10YR2/2 | ロ-A粒少量 |
| 26. 暗褐色土  | 10YR2/2 | ロ-A粒少量 |
| 27. 暗褐色土  | 10YR2/2 | ロ-A粒少量 |
| 28. 暗褐色土  | 10YR2/2 | ロ-A粒少量 |
| 29. 灰黄褐色土 | 10YR3/2 | ロ-A粒少量 |
| 30. 灰黄褐色土 | 10YR3/4 | ロ-A粒少量 |



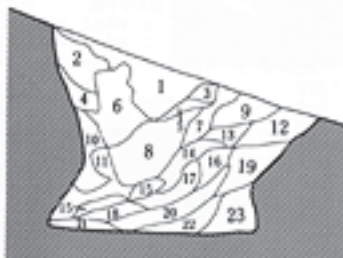
A 47.200m



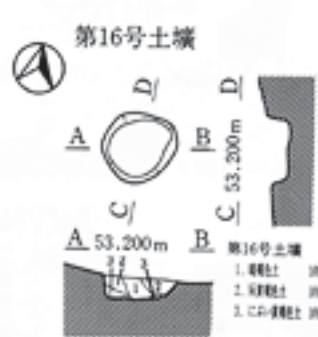
- 第14号土壤
- |         |         |        |       |       |
|---------|---------|--------|-------|-------|
| 1. 暗褐色土 | 10YR2/2 | ロ-A粒少量 | 炭化物少量 |       |
| 2. 暗褐色土 | 10YR2/2 | ロ-A粒少量 | 浮石粒少量 | 炭化物少量 |
| 3. 暗褐色土 | 10YR2/2 | ロ-A粒少量 | 浮石粒少量 | 炭化物少量 |
| 4. 暗褐色土 | 10YR2/2 | ロ-A粒少量 | 浮石粒少量 | 炭化物少量 |
| 5. 褐色土  | 10YR4/1 | ロ-A粒少量 | 浮石粒少量 | 炭化物少量 |
| 6. 暗褐色土 | 10YR2/2 | ロ-A粒少量 | 浮石粒少量 | 炭化物少量 |



A 57.300m



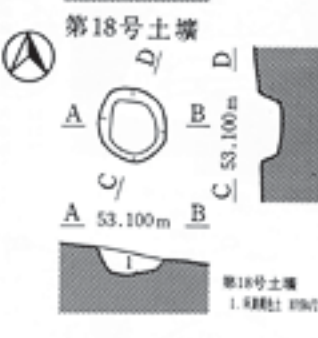
- 第15号土壤
- |           |         |        |        |       |
|-----------|---------|--------|--------|-------|
| 1. 暗褐色土   | 10YR2/2 | ロ-A粒少量 | 浮石粒少量  | 炭化物少量 |
| 2. 暗褐色土   | 10YR2/2 | ロ-A粒少量 | 浮石粒少量  |       |
| 3. 灰黄褐色土  | 10YR3/2 | ロ-A粒少量 | 浮石粒少量  |       |
| 4. 褐色土    | 10YR4/1 | ロ-A粒少量 | 浮石粒少量  |       |
| 5. 暗褐色土   | 10YR2/2 | 浮石粒少量  |        |       |
| 6. 暗褐色土   | 10YR2/2 | ロ-A粒少量 | 浮石粒少量  | 炭化物少量 |
| 7. 灰黄褐色土  | 10YR3/2 | ロ-A粒少量 | 浮石粒少量  |       |
| 8. 灰黄褐色土  | 10YR3/2 | ロ-A粒少量 | 浮石粒少量  | 炭化物少量 |
| 9. 褐色土    | 10YR4/1 | ロ-A粒少量 | 浮石粒少量  | 炭化物少量 |
| 10. 灰黄褐色土 | 10YR3/2 | ロ-A粒少量 |        |       |
| 11. 暗褐色土  | 10YR2/2 | ロ-A粒少量 | 炭化物少量  |       |
| 12. 褐色土   | 10YR4/1 | ロ-A粒少量 | 浮石粒少量  |       |
| 13. 灰黄褐色土 | 10YR3/4 | ロ-A粒少量 | ロ-A粒少量 |       |
| 14. 灰黄褐色土 | 10YR3/2 | ロ-A粒少量 | 浮石粒少量  |       |



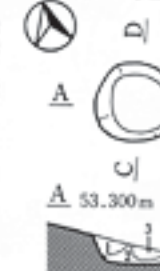
A 53.200m



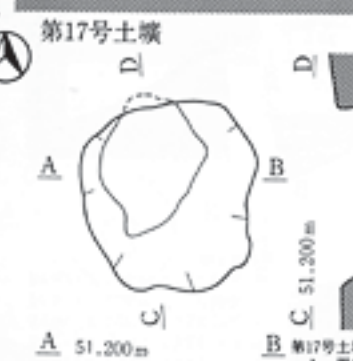
- 第16号土壤
- |          |         |        |
|----------|---------|--------|
| 1. 暗褐色土  | 10YR2/2 | ロ-A粒少量 |
| 2. 灰黄褐色土 | 10YR3/2 | ロ-A粒少量 |
| 3. 灰黄褐色土 | 10YR3/2 | ロ-A粒少量 |



A 53.100m



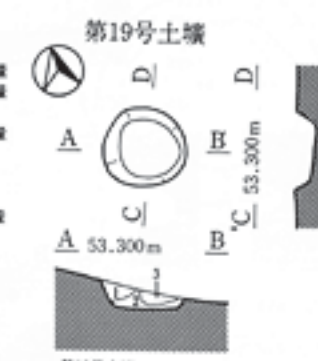
- 第18号土壤
- |         |         |        |
|---------|---------|--------|
| 1. 暗褐色土 | 10YR2/2 | ロ-A粒少量 |
|---------|---------|--------|



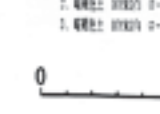
A 51.300m



- 第17号土壤
- |          |           |        |       |    |
|----------|-----------|--------|-------|----|
| 1. 褐色土   | 10YR2/1   | ロ-A粒少量 | 炭化物少量 |    |
| 2. 暗褐色土  | 10YR2/2   | ロ-A粒少量 | 炭化物少量 | 粘土 |
| 3. 褐色土   | 10YR1.7/3 | ロ-A粒少量 | 炭化物少量 | 粘土 |
| 4. 暗褐色土  | 10YR2/2   | 粘土粒少量  |       |    |
| 5. 褐色土   | 10YR2/1   | ロ-A粒少量 |       |    |
| 6. 褐色土   | 10YR2/2   | ロ-A粒少量 |       |    |
| 7. 灰黄褐色土 | 10YR3/4   | ロ-A粒少量 | 炭化物少量 |    |



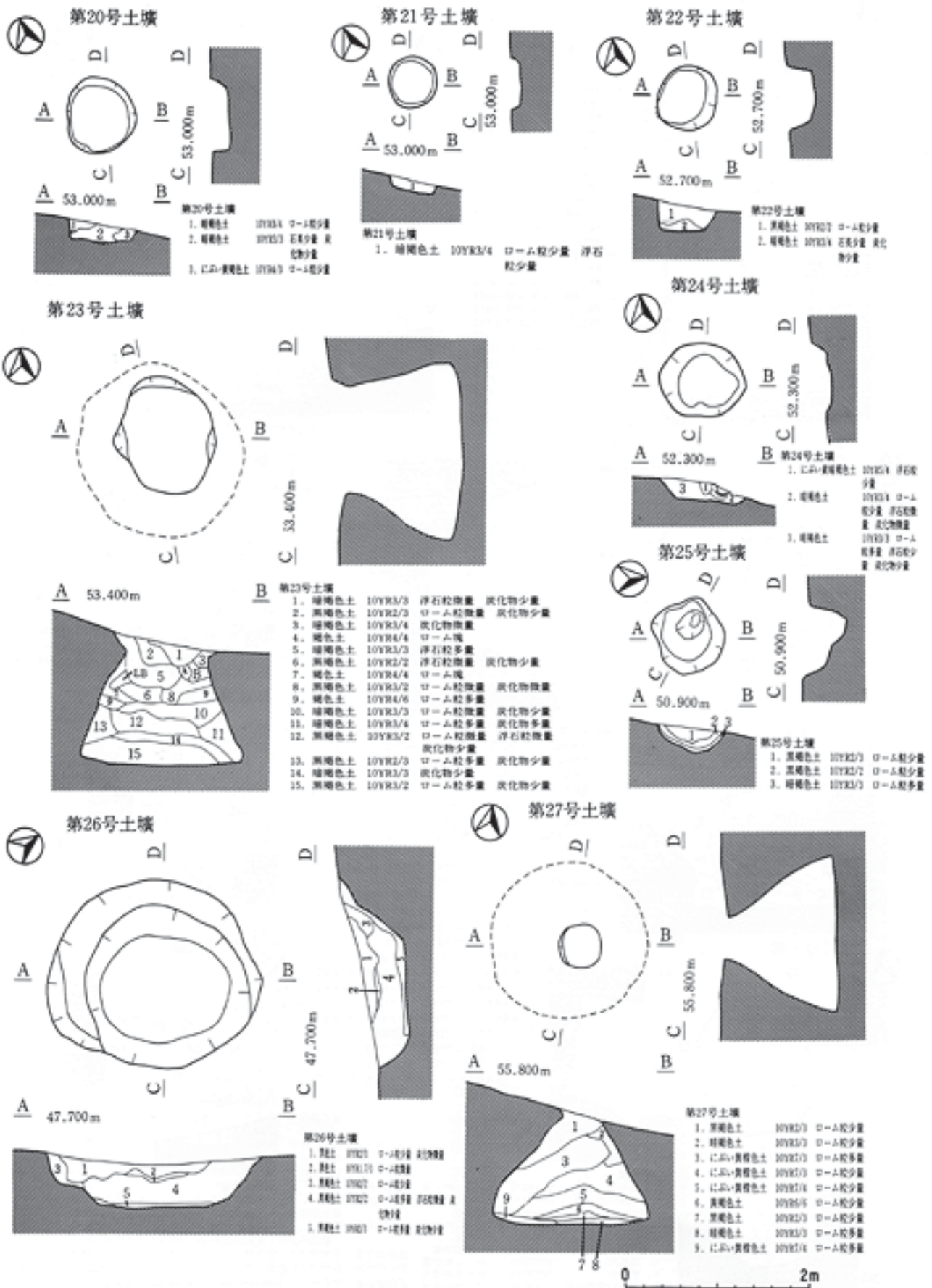
A 53.300m



- 第19号土壤
- |         |         |        |       |
|---------|---------|--------|-------|
| 1. 暗褐色土 | 10YR2/2 | ロ-A粒少量 | 浮石粒少量 |
| 2. 暗褐色土 | 10YR2/2 | ロ-A粒少量 | 浮石粒少量 |
| 3. 暗褐色土 | 10YR2/2 | ロ-A粒少量 | 浮石粒少量 |

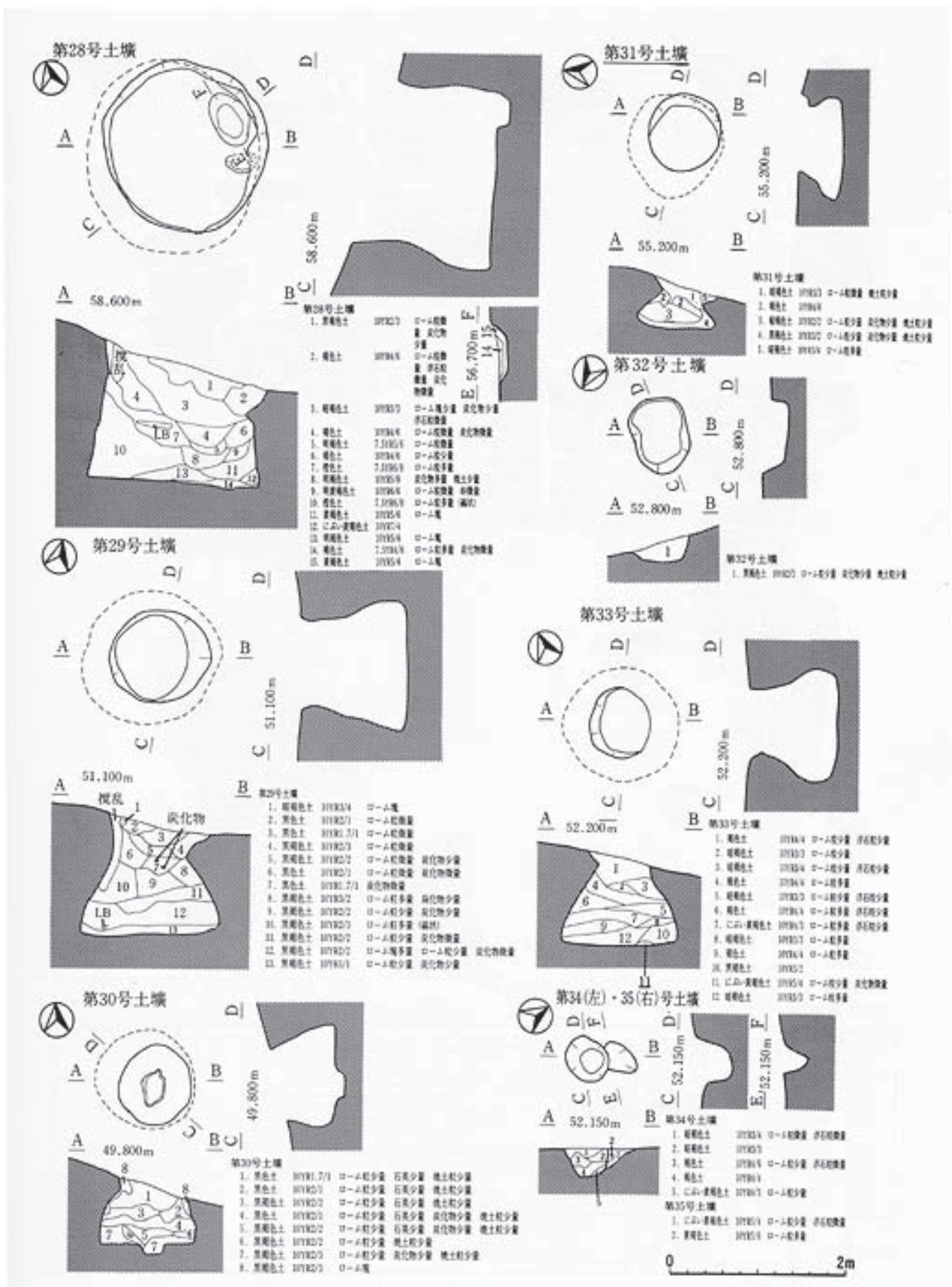
0 2m

第15图 第13~19号土壤



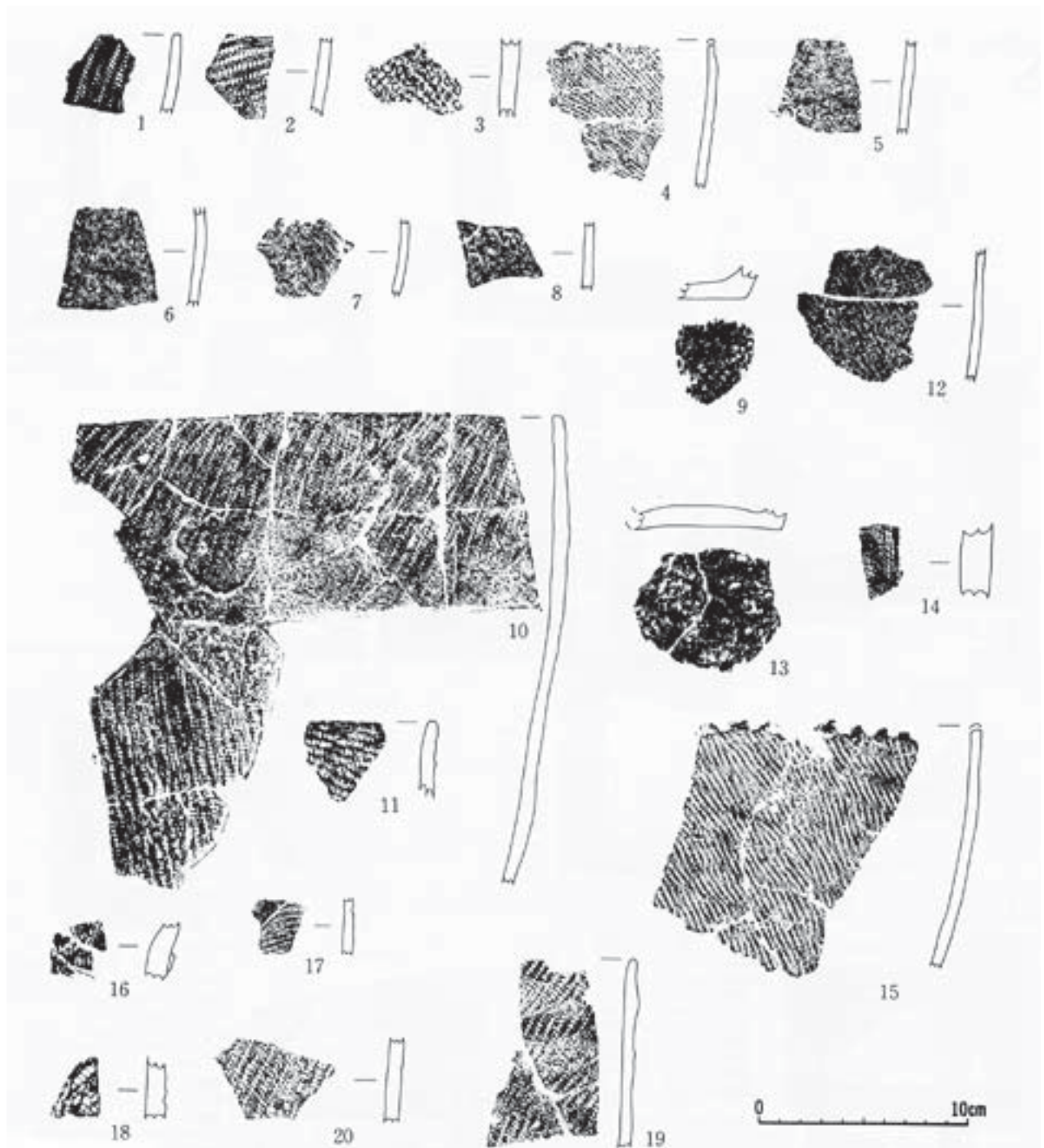
第16图 第20～27号土壤





第17图 第28~35号土壤

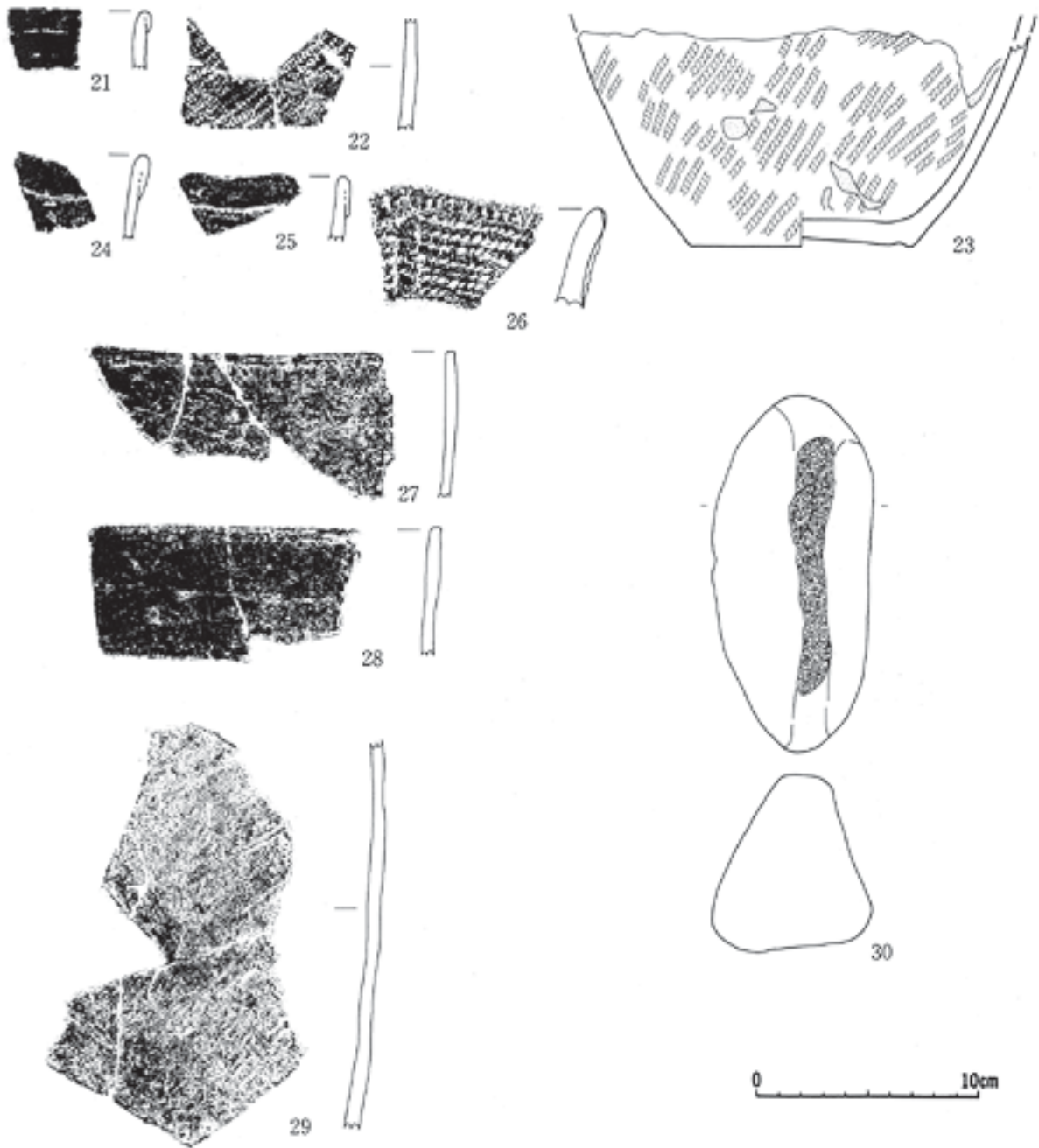




土器観察表(1)

図版番号	遺構	層位	器種・部位	外面の文様	時期	整理番号
18-1	9 土	底面	深鉢形・口縁部	平口縁?、LR単節	中～後期	1
18-2	9 土	底面	深鉢形・胴部	平口縁?、LR単節	中～後期	2
18-3	9 土	底面	深鉢形・胴部	RL復節?	中期	3
18-4	9 土	1	深鉢形・口縁部	小波状口縁、RL単節横位回転	晩期	4
18-5	11 土	7	深鉢形・胴部	無文?	不明	5
18-6	11 土	15	深鉢形・胴部	無文?	不明	6
18-7	11 土	19	深鉢形・胴部	RL単節	後～晩期	7
18-8	11 土	19	深鉢形・胴部	無文?	不明	8
18-9	12 土	底面	深鉢形・底部		中～後期	9
18-10	12 土	15	深鉢形・口～胴部	平口縁、LR単節(口縁部横位・胴部斜位回転)、胴部外面粘土附着	中～後期	10
18-11	12 土	15	深鉢形・口縁部	平口縁、RL単節	中～後期	11
18-12	13 土	1・6	深鉢形・胴部	RL単節横位回転	後～晩期	12
18-13	13 土	4	深鉢形・底部		前期	13
18-14	13 土	2	深鉢形・胴部	R絡条体回転(木目状?)	前期	14
18-15	14 土	2・5	深鉢形・口縁部	小波状口縁、RL単節横位回転	晩期	15
18-16	14 土	5	深鉢形・口縁部	粘土紐貼付(刻目状L側面圧痕)、L・R側面圧痕	中期	16
18-17	14 土	6	深鉢形・胴部	RL単節、摩消区画	後～晩期	17
18-18	17 土	4	深鉢形・胴部	羽状縄文(第1種結束)	中期	18
18-19	19 土	2・3	深鉢形・口縁部	平口縁?、LR単節横位回転	中～後期	19
18-20	23 土	6	深鉢形・胴部	LR単節	中～後期	20

第18図 土壌内出土遺物(1)



土器観察表(2)

図版番号	遺構	層位	器種・部位	外面の文様	時期	整理番号
19-21	23	土 4	深鉢形・口縁部	わずかに口縁部折り返し、無文	中～後期	21
19-22	23	土 4・1	深鉢形・胴部	LR単節	中～後期	22
19-23	24	土 2	深鉢形・底部	RL単節横位回転、底部上底ぎみ	後期	23
19-24	28	土 1	深鉢形・口縁部	口唇部磨き、折り返し口縁(波状)	中～後期	24
19-25	28	土 1	深鉢形・口縁部	折り返し口縁(波状)、R側面圧痕(垂下)	中～後期	25
19-26	28	土 2	深鉢形・口縁部	口唇部に刻目状圧痕、粘土紐貼付(垂下)、R横位側面圧痕	中期	26
19-27	31	土 3	深鉢形・口縁部	平口縁、無文、横位調整	後期?	27
19-28	31	土 3	深鉢形・口縁部	平口縁、無文、横位調整	後期?	28
19-29	31	土 3	深鉢形・胴部	無文、外面粘土紐付着(縦位調整)	後期?	29

石器計測表

図版番号	出土地点	層位	最大計測値				石質	器種	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
19-30	9 土	2	146	86	44	690	安山	h類	68	夕タキ

第19図 土壌内出土遺物(2)

### 3 配石遺構

#### 第1号配石遺構（第20図）

- [位置] N - 105、第 b 層で確認した。
- [重複] 配石直下に掘り込みが見られるが、本遺構に伴うものと思われる。
- [形状・規模] 9個の安山岩を80 × 75cmの規模で「コ」の字状に配置している。斜面上位の西側が開口しており、石の抜き取り痕は確認されなかった。現存する石には掘り方は見られなかった。また、いずれの石からも使用痕は見られない。配石直下の土壌は、第 b 層から第 層まで掘り込まれ、底面は緩やかに湾曲し68 × 55cmの楕円形である。
- [堆積土] 2層に分層される。焼土は見られないため、石組炉以外の構築目的が考えられる。

#### 第2号配石遺構（第20図）

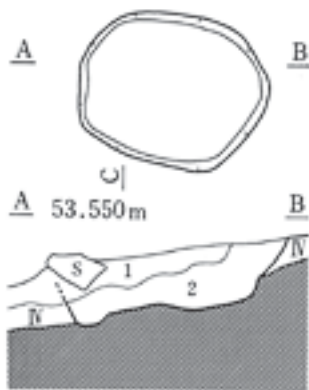
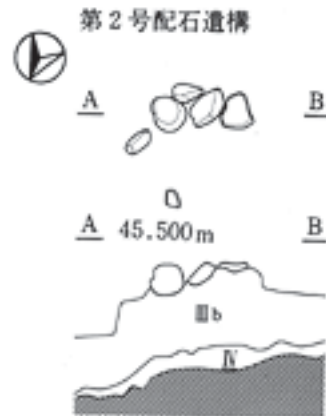
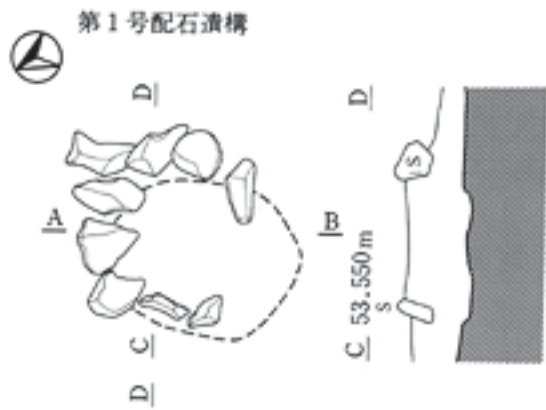
- [位置] F - 91、第 b 層で確認した。
- [重複] なし。
- [形状・規模] 6個の石が残存していた。このうち5個の安山岩が55cmの長さで一列に並んでおり、配石遺構と呼ぶよりは集石遺構と呼ぶ方がふさわしい形態である。S - 1のみが、すり石として使用されたものである。なお、S - 6は、本遺構の一部であるかどうかは不明である。
- [堆積土] 本遺構の掘り方とその堆積土は確認されず、当時の地表面第 b 層中に置かれたものと思われる。

### 4 埋設土器遺構

#### 第1号埋設土器遺構（第20図）

- [位置] M - 105、第 層で黒褐色土の落ち込みと埋設された土器を確認した。
- [重複] なし。
- [形状・規模] 掘り方は、第 層まででありその深さは20cmである。また、全面に凹凸が見られる。
- [堆積土] 掘り方内堆積土と土器内堆積土はともに分層されず1層である。炭化物と暁土粒がともにわずかながら含まれている。
- [埋設土器] 器面は粗雑であり、地文の斜行縄文がわずかに確認できるのみである。土器型式の特定は困難であるが、縄文時代中期後半のものと考えられる。

（小林）



1. 黒褐色土 10YR2/1 炭化物微量  
2. 黒褐色土 10YR2/2 砂-△粒微量



1. 黒褐色土 10YR2/2  
砂-△粒  
微量 炭  
化物少量  
焼土粒微  
量

0 1m

(第1号埋設土器遺構)

(第2号配石遺構)



土器観察表

図版番号	遺構	層位	器種・部位	外面の文様	時期	整理番号
20-1	1 埋	1	深鉢形・底部	RL単節横位回転?	中期?	30

石器計測表

図版番号	出土地点	層位	最大計測値				石質	器種	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
20-2	2 配	b	163	74	81	962	安山	h類	70	夕タキ

第20図 第1・2号配石遺構、第1号埋設土器遺構



第2表 土壌観察一覧表

(数値単位・cm)

図版	遺構番号	グリッド	重複	開口部平面形・規模		底面平面形・規模		探さ	遺物の時期	備考
13	1	G-91	なし	円形	78・70	不整形	65・60	32		鍋底状
13	2	Q-82	なし	楕円形	115・90	不整形	100・82	24		鍋底状
13	3	Q-80	なし	不整形	130・104	不整形	118・94	22		小ピット有り
13	4	H-90	なし	円形	74・69	不整形	76・54	14		皿状
13	5	I-91・92	なし	不整形	245・80	不整形	233・70	30		
13	6	H・I-91	なし	不整形	174・120	不整形	164・105	30		
13	7	K・L-84	なし	円形	112・103	不整形	97・85	40		鍋底状
13	8	P・Q-110	なし	不整形	243・183	不整形	220・130	43		
14	9	J-101・102	なし	円形	162・127	円形	219・204	140	縄文中～後期	フラスコ状
14	10	O-136	なし	隅丸方形	115・115	隅丸方形	110・100	26		炭窯?
14	11	L-101	なし	不整形	152・132	不整形	200・195	162	縄文後～晩期	フラスコ状
14	12	I・J-100・101	33土	円形	145・132	円形	215・200	137	縄文中～後期	フラスコ状
15	13	M-100	なし	不整形	170・157	円形	195・193	143	縄文後～晩期	フラスコ状
15	14	J・K-89・90	なし	円形	184・170	円形	148・137	52	縄文晩期	鍋底状
15	15	N-99・100	なし	不整形	210・196	不整形	161・138	162		フラスコ状
15	16	J-101	なし	円形	60・55	不整形	52・45	18		鍋底状
15	17	M-109	1住	不整形	155・143	不整形	112・86	84	縄文中期	
15	18	J-101	なし	円形	60・55	不整形	45・40	24		
15	19	J・K-100	なし	円形	77・63	円形	51・45	26	縄文中～後期	鍋底状
16	20	J-100	なし	円形	83・75	円形	72・65	22		鍋底状
16	21	J-100	なし	円形	58・52	円形	47・46	21		鍋底状
16	22	J-100	なし	円形	71・64	楕円形	61・47	35		鍋底状
16	23	J-100・101	なし	楕円形	185・110	円形	187・176	150	縄文中～後期	フラスコ状
16	24	J-100・101	なし	円形	97・80	不整形	67・53	26	縄文後期	鍋底状
16	25	N-84	なし	不整形	76・71	不整形	60・52	41		
16	26	K-90・91	なし	円形	230・213	楕円形	141・115	73		鍋底状
16	27	L・M-101	なし	円形	48・46	円形	170・170	130		フラスコ状
17	28	O-99・100	なし	円形	193・184	円形	202・202	160	縄文中～後期	フラスコ状
17	29	L-115	なし	円形	118・106	円形	164・152	144		フラスコ状
17	30	K-114	なし	円形	92・82	円形	117・108	77		フラスコ状・ピット有
17	31	N・O-116	なし	円形	89・84	不整形	118・106	61	縄文後期?	フラスコ状
17	32	N-101	なし	楕円形	80・62	不整形	75・45	28		鍋底状
17	33	I-100	12土	楕円形	82・70	円形	85・80	112		フラスコ状
17	34	I-100	35土	楕円形	55・46	円形	28・28	38		
17	35	I-100・101	34土	不整形	48・30			24		

## 第2節 出土遺物の概要

今回の調査で出土した遺物は、土器・石器・その他の遺物を含め、ダンボール箱で約10箱と調査面積の割りには少量であった。また、復元できた土器の個体数も少なかった。このことは、調査区域の性格の一つに散布地的性格が挙げられるという特徴をそのまま示していると思われる。

遺物について詳細な分類を行うには出土量が限られているため、今回は簡単ながらそれらの概要についてのみ記述することにする。

なお、名称と分類基準は先学諸氏の研究成果等をもとに行ったが、それらと若干異なる場合については、上述の事項を踏まえてのものであることを、前提として述べておきたい。

### 1 土 器

ここでは、主に遺構外から出土した土器について記述する。少量の出土であるため、詳細な分類や検討は行わず、資料紹介的に扱うことにした。時期ごとにみると、以下のような出土である。なお、各々少量の出土ではあるが、量的には縄文時代中期の遺物が多い結果となった。

- (1) 縄文時代早期後半～前期初頭の土器
- (2) 縄文時代前期後半の土器
- (3) 縄文時代中期の土器
- (4) 縄文時代後期の土器
- (5) 縄文時代晩期の土器
- (6) 平安時代の土師器・須恵器

#### (1) 縄文時代早期後半～前期初頭の土器 (第21図1・2)

2片のみの出土である。ともに同一個体と思われるが、口縁部の欠損により、土器型式の特定は困難である。胴部には縄文が施文され、条の流れが交差しているが、同一の原体を用いた縦位と横位の交互施文である。

#### (2) 縄文時代前期後半の土器 (第21図3～22)

3～21は、いわゆる円筒下層式土器である。3は、口縁部文様帯には絡条体回転施文が見られ、円筒下層b式土器に比定される。4～16は、口縁部に原体の側面押圧による施文が見られる。なお、9～11は同一の個体であると思われる。器形が不明であることもあり特定は困難であるが、円筒下層d1～d2式土器に比定されると思われる。17～22は、胴部及び底部の破片である。17～20は絡条体回転施文であり、21はRLR複節斜位回転による縦走縄文である。以上、円筒下層式土器についての記述であるが、従来型式を踏まえると、細分を行うべきであろうが、遺物が少量で断片的であること、層序的な出土を明確に把握できなかったことなどから、大まかな分類を行った。

なお、22は、胴部にヘラまたは貝殻による条痕が見られる。土器型式は不明であるが、口縁径と胴部径には、円筒下層式土器に近いものがある。類似する土器は、函館市権現台場遺跡32号住居址から出土しているが、共伴する土器から縄文前期後半と報告されている(函館市教育委員会、1981)。

(3)縄文時代中期の土器（第22図23～36、第23図37～56）

23は、口縁部文様帯に縦位の列点状原体押圧が見られ、円筒上層a<sub>1</sub>式に比定される。24～30には、原体の爪形圧痕が見られ、円筒上層b式土器に比定される。34・35には、半截竹管等による爪形刺突が見られ、円筒上層c式土器に比定される。37は口縁部が大きく外反する平口縁の土器で円筒上層c式またはd式土器に比定され、38は円筒上層d式またはe式土器に比定される。42・43・46・47は、沈線文が見られ、中期末の土器群と思われる。44の土器底部には網代痕が見られ、中期末の土器と思われる。53は無文の口縁部破片である。55・56は、口唇部に縄文が施された深鉢形土器である。48～52は、磨消縄文の施文された土器である。

(4)縄文時代後期の土器（第23図57～第24図78）

57～61・78は、同一の個体と思われるが、復元することができなかった。後期初頭の土器群のなかに位置づけられ、「蛭沢式」(葛西、1979)あるいは「沖附(2)式」(成田、1988)に比定されると思われる。62～75・77は、十腰内式土器に比定される。なお、成田の型式提唱ではこの型式を二つに分けているが(成田、1988)今回の出土では層序的な出土が確認されなかったため、一括して扱うこととした。

(5)縄文時代晩期の土器（第24図81～83）

81は、三叉文をネガティブに浮き彫り的な文様を構成し、羊歯状文が充填されている。大洞BC式土器に比定すると思われる。口縁部の破片として考えたが、台部の破片である可能性もある。82・83は、粗製の深鉢形土器胴部の破片である。

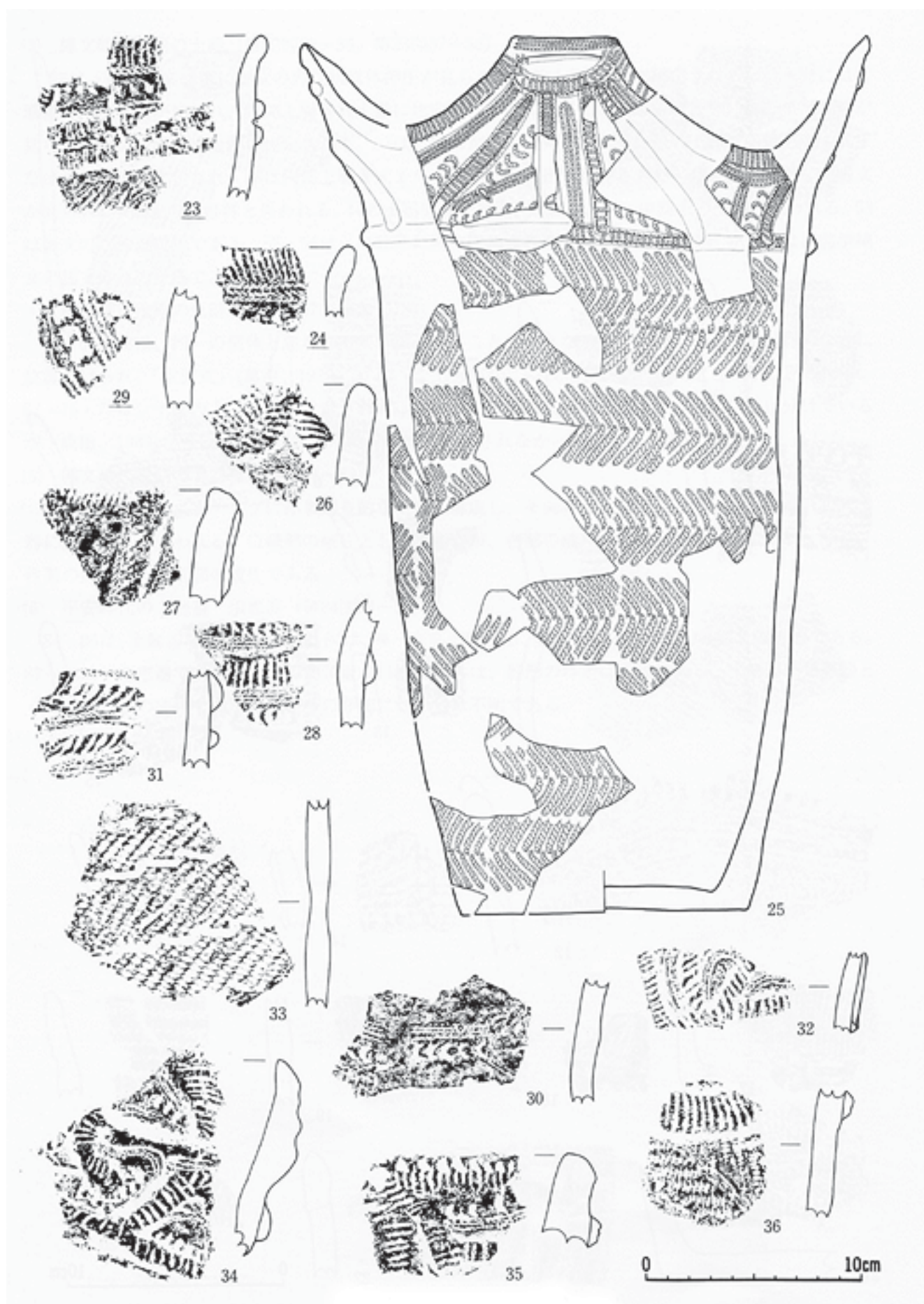
(6)平安時代の土師器・須恵器（第24図84～92）

84～86は、土師器坏の破片である。84は、唯一底部が残存し、切り離しは回転系切りによるものである。87～92は、須恵器であるが、92の長頸壺の口縁部以外は、器形の特定は困難である。土師器・須恵器ともにごく少数の破片であるため、その詳細については不明である。



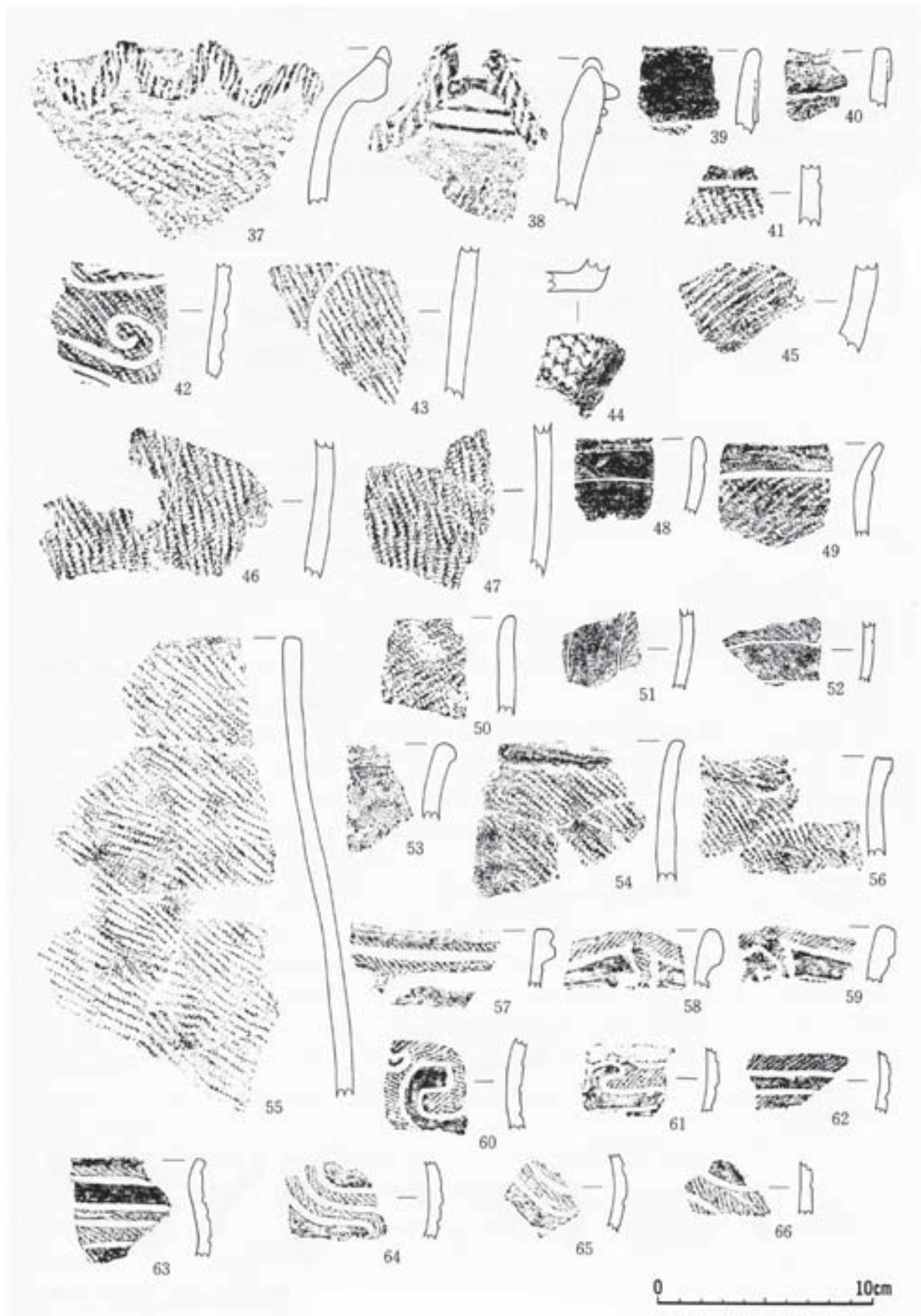
第21図 遺構外出土土器(1)



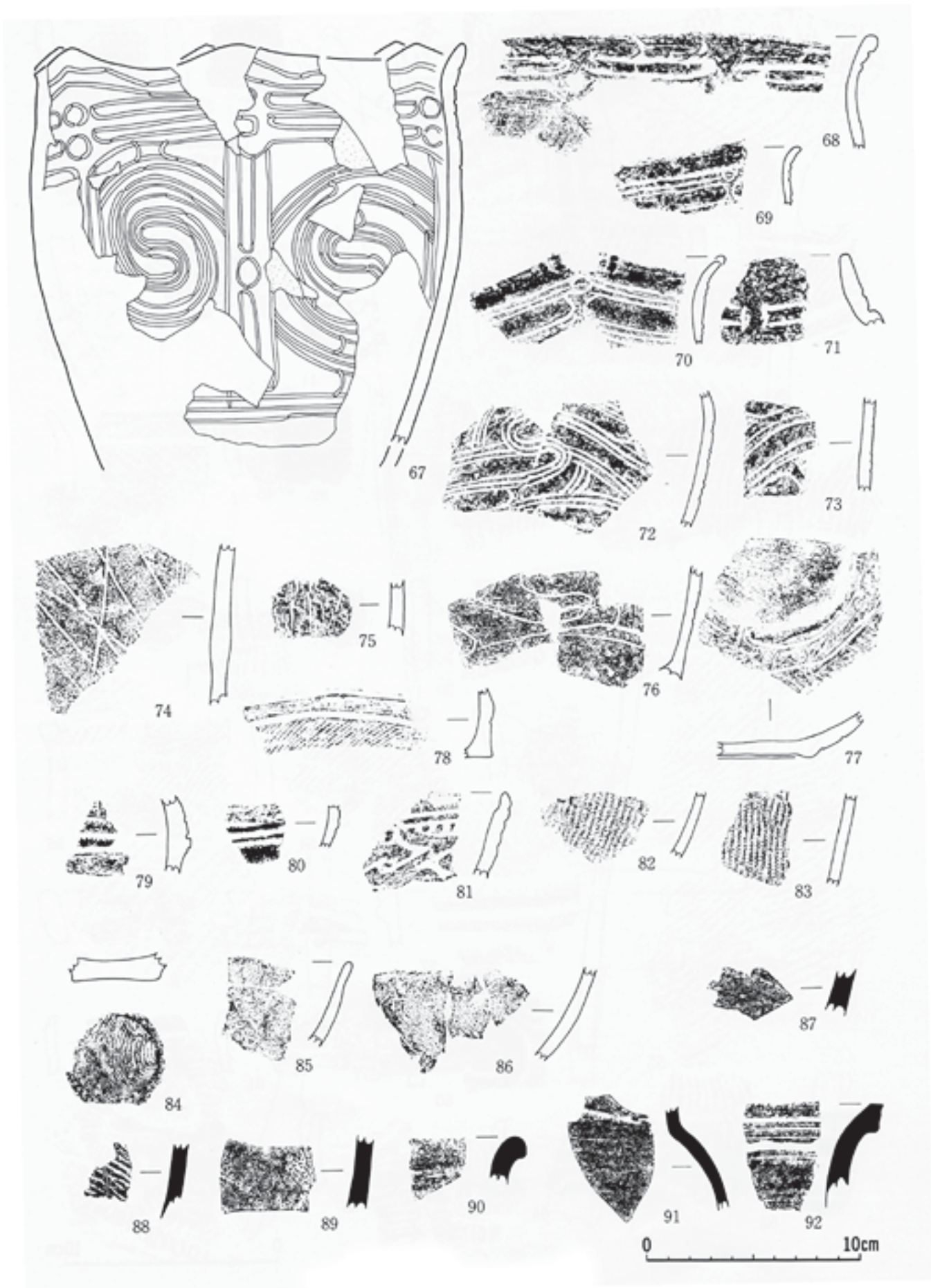


第22図 遺構外出土土器(2)





第 23 図 遺構外出土土器 (3)



第 24 図 遺構外出土土器



## 2 石 器

ここでは、主に遺構外から出土した石器について記述する。少数の出土であるため、細分や検討は行わず資料紹介的な形をとることにした。なお、出土した石器の器種分類は以下の形態で行った。

- (1) 剥片石器 製作の初期から最終段階まで剥離技術により製作されたもの
  - a 左右対称をなし尖頭部と基部・茎部を有するもの(石鏃)
  - b つまみ状の基部と刃部を有するもの(石匙)
  - c 長軸と交わる1辺に刃部を有する筥状のもの(筥状石器)
  - d 上記の形態にあてはまらない刃部を有するもの(不定形石器)
  - e 刃部調整のない剥片に使用による剥離が見られるもの(U-フレイク)
  - f 母岩に分割または剥離加工を施したもの(石核)
- (2) 磨製石器 製作の最終段階で研磨技術により製作されたもの
  - g 長軸の両端で基部と刃部が対するもの(磨製石斧)
- (3) 礫石器 自然礫をそのまま使用したもの、または整形後に使用したもの
  - h 礫の平坦面または周縁に、使用・整形痕跡が見られるもの
  - i 扁平な礫のほぼ周縁を打ち欠き整形した後、使用されたもの
  - j 扁平な礫の周縁の一部が打ち欠かれたもの
  - k 比較的大型の礫の平坦面に使用痕跡が見られるもの

### (1) 剥片石器

#### a類(第12図5、第25図1・2)

「石鏃」である。3点出土したが、いずれも遺構外での出土である。頁岩を素材とし、礫面および打面は残っておらず、全面にわたり調整されている。尖頭部または茎部が、欠損または破損しているが、いずれも平基有茎鏃である。3点の規格・形態はそれぞれ異なるが、3点のみに限られているため比較することは差し控えたい。なお、第12図5には、ピッチ痕が見られる。

#### b類(第25図3・4)

「石匙」・「有柄石匙」である。2点出土したが、ともに遺構外での出土である。頁岩を素材とし、主に片面調整による刃部作出である。背面の加工は全面に行われず、基部での調整が主であり、側縁ではわずかに見られるだけである。一般的に、縦長の剥片を素材として打面を基部とするものが主流を占めるであろうが、3はこの方法で作られている。逆に、4は打面側に刃部がある。また、刃部の調整角度も異なり、3は薄く調整されているのに対し、4は厚く急斜度に調整されている。この違いは、押圧剥離の段階で偶然起こったとは考えにくく、用途が異なる可能性がある。特に、4は再調製を重ね現形になったと思われ、それにともない急斜度に調整する必要が生じた可能性も考えられる。

#### c類(第25図5・6)

「石筥」・「筥状石器」である。頁岩を素材としている。5は、「八」の字状のもので、基部は欠損している。刃部・側縁ともに片面のみの調整であり、背面は加工されていない。縦長剥片を素材とし、周縁のみの調整によるものである。6は、比較的粗い調整であるため、製作途中であることも考えられ、強いて言うと打製石斧的な形態にも見られる。

#### d類(第12図3・4、第25図7～9、第26図10～13)



定形ではない剥片石器である「不定形石器」等を一括して扱っている。本類に含めたのは7点で、いずれも頁岩を素材としたものである。第25図7・8は、両側縁が調整されサイド・スクレイパー(削器)的な形態であるが、調整された側縁が刃部として使用されたかは不明である。第26図12は、片側縁のみの調整である。調整の行われていない側は、破砕面である可能性もあるが定かではない。

第26図13は大型の剥片で素材の形状がそのまま残存し、調整斜度からスクレイパー(搔器)的な要素が考えられる。フレイクと呼ぶには厚く大型のものであるが、製作的な過程では、いわゆる「R - フレイク (retouched flake)」的ともいえる。また、第1号住居跡から出土した第12図4も、R - フレイクに含まれよう。

e類(第26図14・15)

「U - フレイク (used flake)」である。出土したフレイク(残滓剥片)は、ごく少量であるが、そのなかで2点使用による剥離が見られるものがあつた。ともに遺構外からの出土であり、頁岩を用いている。

f類(第27図16)

「石核(コア)」である。1点のみの出土である。厳密な意味での石核であるか不明な点があるが、剥片剥離技術によるものと思われるため、本類に含めることとした。

## (2) 磨製石器

g類(第27図17～20)

「磨製石斧」である。遺構外から4点出土しているが、いずれも破損・欠損したもので、完形品の出土はなかった。素材は、3種類に分けられ、17・18は輝緑凝灰岩、20は閃緑岩、19は結晶片岩である。17はもっとも残存部が大きく、斜位方向の研磨痕が明瞭に観察される。擦り切り技法によるものと思われるが、側面は斜位方向の研磨が完全に行われその痕跡は見られない。破損面の状況から、横型石斧として使用されたと思われる。18は、刃部側縁側である。刃部に対して垂直方向の擦痕が見られ、使用痕と思われるが、部分的な破片での観察のため定かではない。20は、閃緑岩の岩相のためか、肉眼で擦痕は確認できない。破損部が片面に集中し破断方向が横位であること、さらに材質を踏まえると横型石斧としての使用が考えられる。19は、素材の岩相の流れる方向を長軸にして作られている。製作方法・使用方法ともに、定かではない。

## (3) 礫石器

h類(第28図21～29、第29図30～40、第30図41～52、第31図53～58)

「敲磨器」類の「すり石」・「敲石」・「凹石」を一括した。「すり」と「敲」では、どちらにもとれるようなものがある。また、「敲」と「凹」でも同様なことが言える。よってこれらの識別は、以下の基準で行った。

- ・すり 礫の自然面の凹凸がとれ、比較的平滑な面が生じたもの
- ・敲 礫の自然面とは異なる、ざらつきや荒れが生じたもの
- ・凹 敲により生じているが、基本的に円形をなしその最深部が5mm以上になるもの

21～53は、扁平・球形状の礫の比較的平坦な面や側面を機能面とする敲磨器であり、一般的なものである。一つの機能のみ見られるものと、複数の機能が見られるものがある。素材は主に安山岩が使用され、稀に石英安山岩・ヒン岩・溶結凝灰岩が見られる。21の「すり」は、むしろ「研磨」と表現するほうがふさわしい面を2面有している。また、「敲」の面には、単なる「敲」のものと「潰し」が強く感じら

れるものが見られる。49の「凹」は、最もしっかりしたものであり、両面ではほぼ同位置に対峙している。

54～56は、断面形が三角形で細長い柱状のすり石で、三宅が称した「三角柱状磨石」(青森県教育委員会、1982)の形態を有するものである。素材は安山岩で、三角形の頂部にあたる柱稜線に機能面として幅1cm前後のすり面が細長く生じている。すり面は1～2面であり、すべての柱稜線が使用されたものは見られない。また、断面形が四角形のものも見られるが、基本的には三角形に近似するものである。機能面の両側に使用以前に整形されたと思われる剥離が見られるものと、それが見られないものの二つに分けられる。なお、同様の剥離でも、使用によって剥落したようなものも見られ、使用方法や用途に、若干の違いがあるものと思われる。また、機能面も「すり」より「敲」と表現した方がよいものも見られる。

i類(第31図59・60)

「半円状扁平打製石器」である。扁平な礫の周縁ほぼ全周を打ち欠くことによって整形したものである。遺構外から2点出土した。素材は、ともに安山岩である。半円状のものと方形状のものとが見られるが、基本的には同様の機能を有している。直線部がすり面となるのが一般的であるが、59・60にも、同様な面が見られる。この形態の石器の用途については、以前よりいくつかの説が出されているが、2点の状況を見ても直線部のすり面が機能面であり、すり潰し的な用途が最も妥当と思われる。

j類(第32図61)

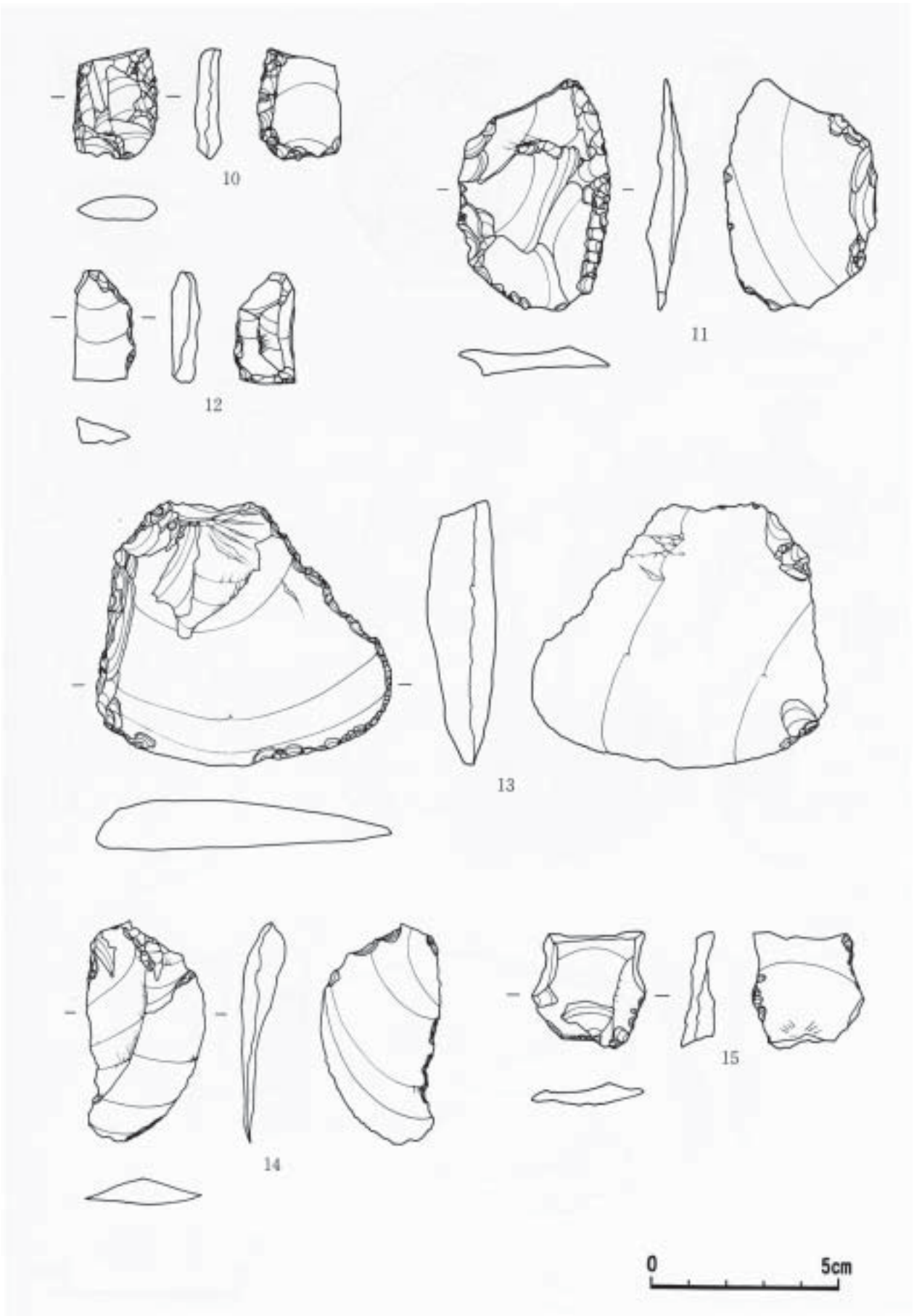
縄文時代早期にしばしば見られるいわゆる「礫器」の形態を有するものである。扁平な礫の一端を打ち欠くことによって刃部を作り出したものである。素材として安山岩が用いられることが多いが、遺構外から出土した61は比較的新しい頁岩が用いられている。また、形態的には十分なものと思われるが、刃部での使用痕は、肉眼では観察されない。このことから実際に使用されたものかまた製作時期についても定かではない。なお、第1号住居跡から出土した第12図6も、若干、形態的に類似するが、こちらは「潰し」的な形態となっており、本類とは異なるものと考えている。

k類(第32図64)

「石皿」または「台石」に含まれるものである。遺構外から、1点出土した。素材は安山岩である。平坦面が、機能面として使用され、「すり」による緩やかな湾曲が見られる。(小林)

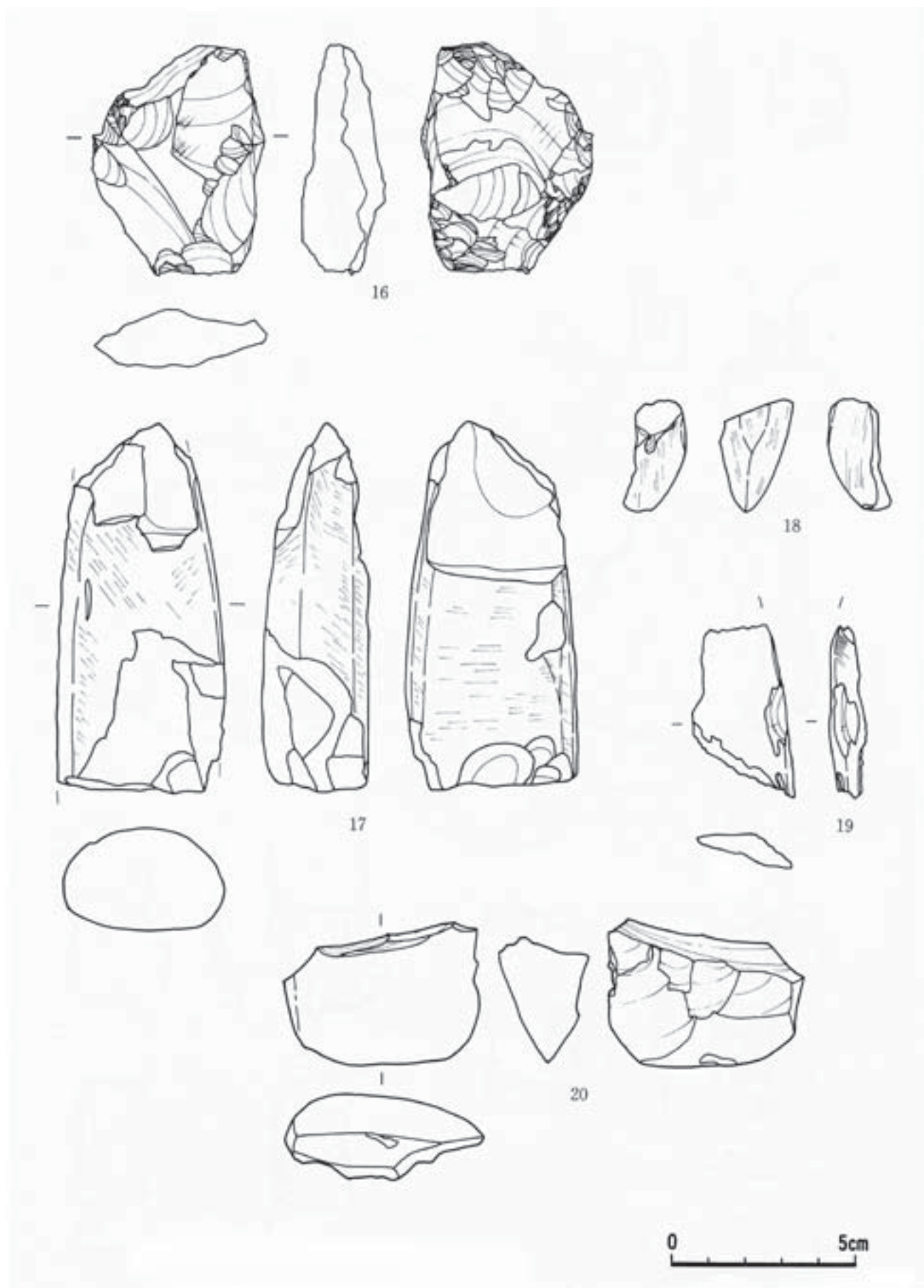


第25圖 遺構外出土石器(1)

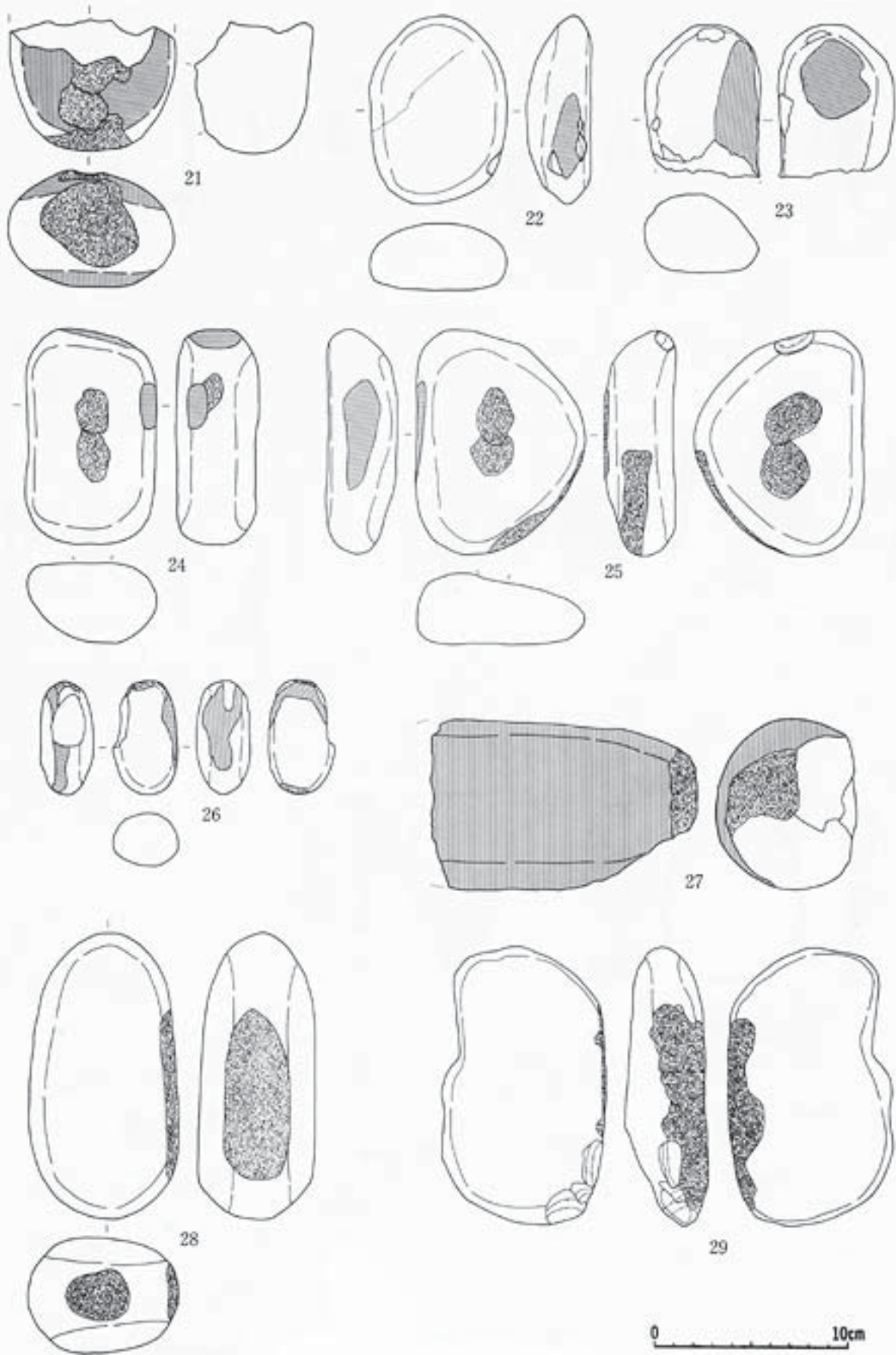


第26圖 遺構外出土石器(2)





第27圖 遺構外出土石器(3)

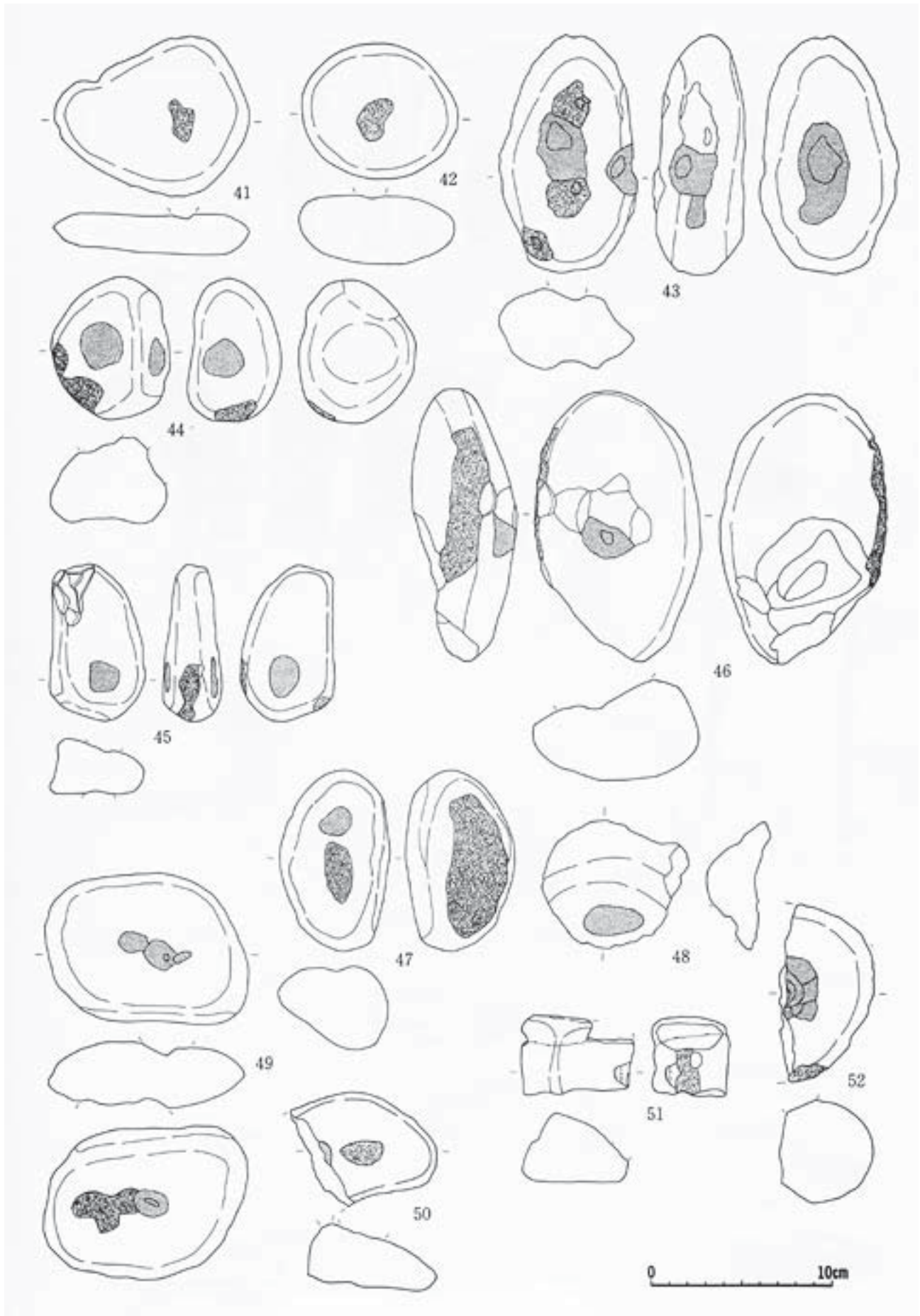


第 28 図 遺構外出土石器 (4)



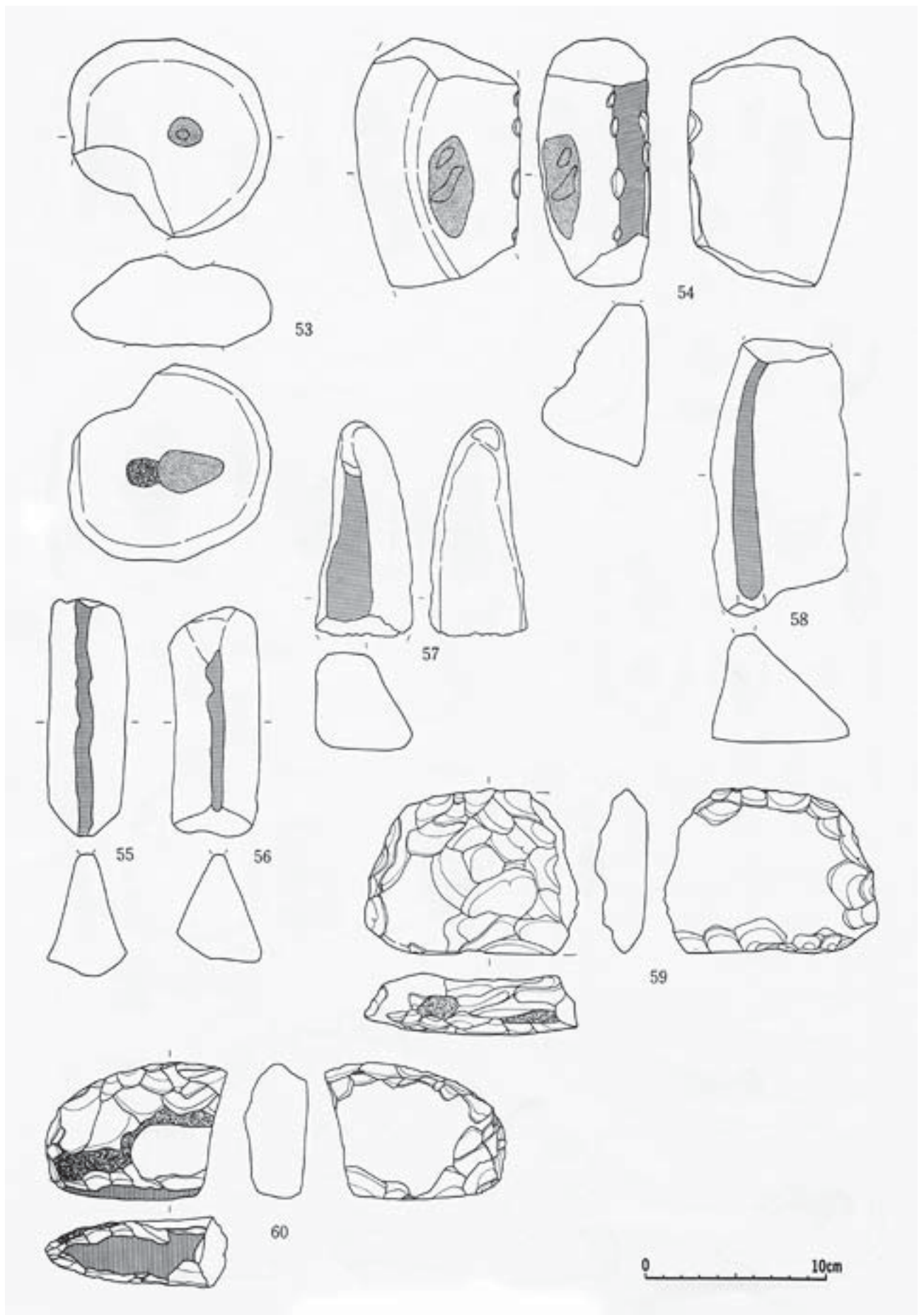
第29圖 遺構外出土石器(5)



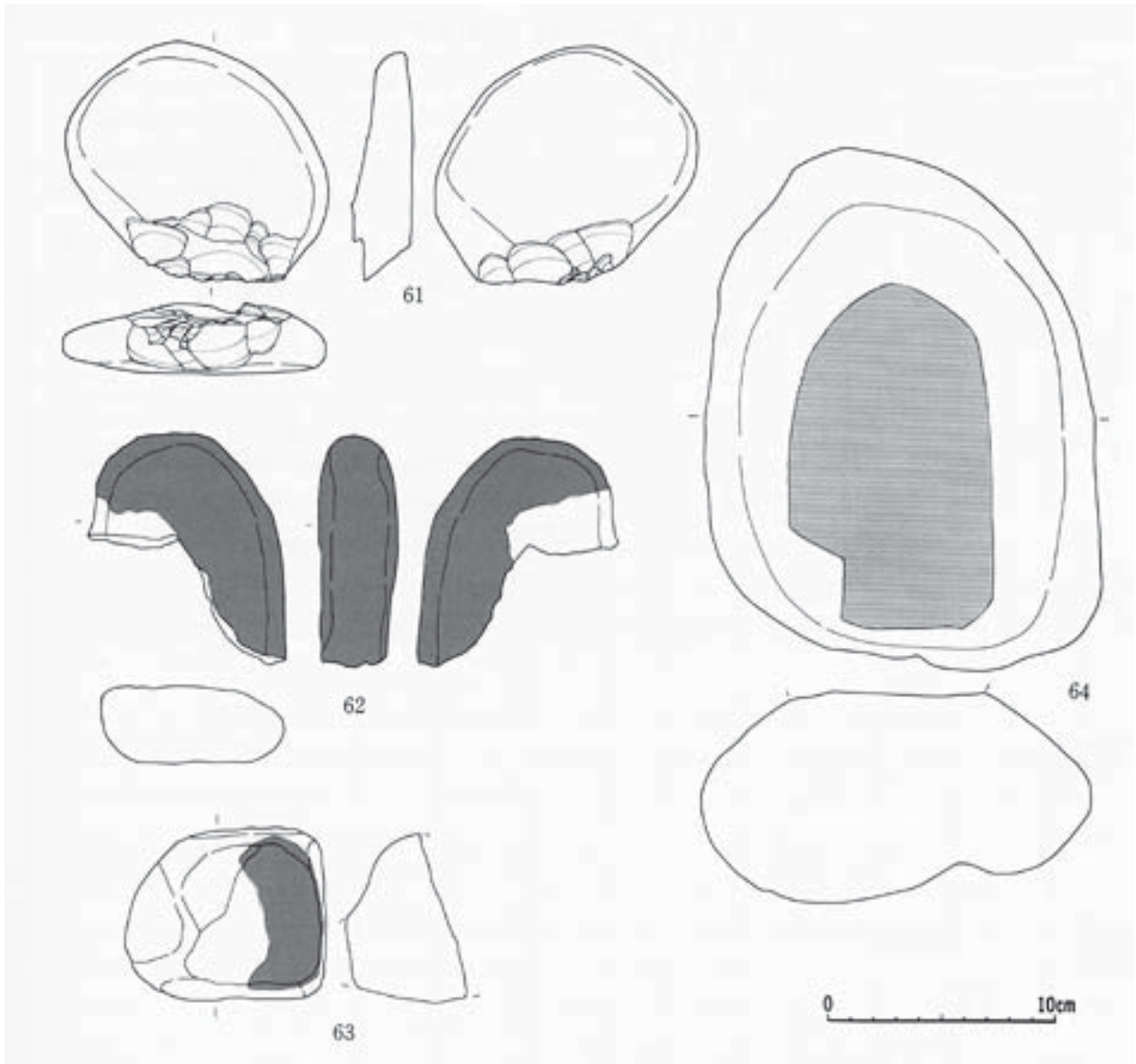


第30図 遺構外出土石器(6)





第31図 遺構外出土石器(7)



第 32 図 遺構外出土石器 (8)

第3表 遺構外出土石器計測表

図版番号	出土地点	層位	最大計測値				石質	器種	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
25-1	N-86	b	(34)	14	7	2.9	頁	a類	7	平基有茎、先端・茎部欠損、ピッチ
25-2	L-110	b	(60)	17	7	6	頁	a類	10	平基有茎、茎部欠損
25-3	O-91	b	62	36	7	16.6	頁	b類	9	縦型石匙、一部のみ両面調整
25-4	D-116	b	54	38	8	12.8	頁	b類	16	打点の反対側が基部、主に片面調整
25-5	N-103	b	41	36	6	8.6	頁	c類	19	基部欠損、片面調整
25-6	N-131	b	60	50	18	45.6	頁	c類	22	刃部片面調整、両側面粗い両面調整
25-7	O-137	b	42	24	7	10.1	頁	d類	6	両側面中位、粗い両面調整
25-8	O-85	b	31	25	10	9.7	頁	d類	4	両面調整
25-9	Q-144	b	32	18	6	4.1	頁	d類	13	全面調整
26-10	N-86	b	(29)	22	6	5.1	頁	d類	8	両側縁刃部、片側のみ両面調整
26-11	N-111	b	41	63	8	17.3	頁	d類	5	片面調整
26-12	P-86	a	30	16	7	3.9	頁	d類	1	片面調整
26-13	G-92		72	8	14	97.6	頁	d類	23	製作途中? 片面調整
26-14	G-92		(6)	32	12	11.6	頁	e類	14	縦長剥片
26-15	Q-146	b	30	31	6	5	頁	e類	15	2辺に使用痕
27-16	O-85	b	64	48	23	60.6	頁	f類	11	
27-17	Q-88	b	(102)	46	29	221.2	輝緑凝灰	g類	2	刃部・基部欠損
27-18	L-90	b	(3.1)	(1.7)	(2.1)	9	輝緑凝灰	g類	18	刃部一部のみ残存
27-19	L-89	a	(4.9)	(2.6)	(1)	15.1	結晶片	g類	21	一部のみ残存
27-20	L-108	表採	(37)	(52)	23	50.9	閃緑	g類	3	刃部残存
28-21	I-92	b	(69)	87	61	474	石英安山	h類	32	スリ・タタキ
28-22	L-89	b	98	72	35	282	安山	h類	33	打ち欠いた後のスリ?
28-23	L-88	b	(80)	61	41	222	安山	h類	55	スリ
28-24	N-89	b	112	68	42	508	安山	h類	31	スリ・タタキ
28-25	L-89	b	118	88	37	486	安山	h類	34	スリ・タタキ
28-26	Q-89	b	59	34	27	62	安山	h類	30	スリ・タタキ
28-27	P-86	b	224	173	95	5000	ヒン	h類	63	ほぼ全面スリ、頂点タタキ
28-28	R-134	表採	150	79	60	1022	安山	h類	48	スリ・タタキ
28-29	K-85	a	135	69	52	734	安山	h類	69	タタキ
29-30	L-87	b	118	96	50	622	安山	h類	65	タタキ
29-31	K-90	a	141	50	55	468	安山	h類	37	タタキ
29-32	N-104	b	112	85	67	742	安山	h類	49	タタキ
29-33	Q-86	表採	94	66	33	272	チャート	h類	43	タタキ
29-34	Q-86		63	44	24	64	安山	h類	29	タタキ
29-35	L-88	b	95	77	33	248	溶結凝灰	h類	54	側縁ほぼ全周タタキ
29-36	K-87	b	75	57	30	136	凝灰	h類	36	タタキ
29-37	K-92	表採	109	62	39	408	安山	h類	40	タタキ
29-38	P-151	表採	(103)	75	36	294	安山	h類	35	タタキ
29-39	K-90	a	124	110	33	508	安山	h類	41	タタキ
29-40	Q-84	b	111	83	38	290	安山	h類	24	タタキ
30-41	Q-83	a	109	90	25	254	安山	h類	38	タタキ
30-42	N-86	表採	88	76	38	272	安山	h類	39	タタキ
30-43	J-92	a	134	78	45	490	安山	h類	60	凹・タタキ
30-44	H-93		80	66	49	306	安山	h類	27	凹・タタキ
30-45	K-89	a	87	53	32	198	安山	h類	57	凹・タタキ
30-46	L-87	b	(147)	93	58	716	安山	h類	67	凹・タタキ
30-47	Q-86	b	102	62	47	322	安山	h類	44	凹・タタキ
30-48	L-89	a	(72)	(80)	(3.9)	196	溶結凝灰	h類	51	凹
30-49	H-93	a	111	83	38	458	安山	h類	26	凹・タタキ
30-50	H-93		(72)	63	33	160	石英安山	h類	25	凹・タタキ
30-51	Q-86		(45)	63	40	134	安山	h類	28	タタキ
30-52	H-93	b	(53)	10	59	304	安山	h類	61	凹・タタキ
31-53	I-93		111	(111)	54	728	安山	h類	53	凹・タタキ
31-54	K-89	a	(155)	77	61	986	安山	h類	58	三角柱状スリ石、凹
31-55	O-136	b	135	44	68	624	安山	h類	62	三角柱状スリ石
31-56	O-136	b	130	50	59	536	安山	h類	71	三角柱状スリ石
31-57	O-89	b	(122)	55	55	476	安山	h類	47	三角柱状スリ石
31-58	K-89	b	(139)	91	59	1038	安山	h類	59	三角柱状スリ石
31-59	N-105	b	118	93	33	534	安山	i類	50	半円状扁平打製石器・スリ
31-60	K-89	b	92	77	37	426	安山	i類	52	半円状扁平打製石器・スリ
32-61	Q-88	b	113	105	28	398	頁	j類	42	タタキ
32-62	O-79		(103)	89	35	280	安山		66	加熱による黒色変化
32-63	L-88	b	89	78	(52)	470	安山		56	加熱による黒色変化
32-64	J-86	表採	224	173	95	5000	安山	k類	64	スリ

## ま と め

本調査の成果のまとめは、下記のとおりである。

1. 桜峯(2)遺跡は、青森市大字横内字桜峯に所在する遺跡である。
2. 立地環境は、八甲田火砕流堆積物を基盤とする火山性台地にあり、その北縁に形成された標高40～50mの河岸段丘の斜面上に位置する。
3. 本調査での対象面積は、6,100 m<sup>2</sup>である。
4. 本調査において検出した遺構は、竪穴式住居跡1軒、土壇35基、配石遺構2基、埋設土器遺構1基である。
5. 本調査において出土した遺物は、土器・石器を含め、ダンボール約10箱である。
6. 検出遺構・出土遺物の主体は、縄文時代中期に位置づけられる。
7. 検出遺構の主体である土壇35基のうち12基は、いわゆるフラスコ状ピットである。
8. フラスコ状の土壇12基のうち9基は、一部に集中して構築されている。
9. フラスコ状土壇2基の底面から赤色顔料を検出し、墓壇への転用が推測される。
10. 以上の成果をふまえると、本調査区域は遺跡の縁辺部に相当と考えられる。

青森市では、平野部水田地帯と台地・丘陵部との地形変換点は標高約20mラインであり、この標高を辿るように青森環状野内線は敷設されている。縄文時代での集落に限って言えば、遺跡の所在は地形形成の面でその立地条件を考慮すると、野内環状線の近辺あるいはその外側に分布することは明らかである。現に、横内地区一帯を含め青森市に大きな弧を描くこのライン沿いの地域では、ここ数年の分布調査で徐々に縄文時代の遺跡数が増加しており、今後も重点的に調査を進める必要のある地域と言えるであろう。未知とも言える八甲田山の裾野に広がる広大な丘陵・台地における遺跡の把握があつてこそ、当市における先人の歩みをたどる資料を補充することができると思われる。

青森市での縄文時代の遺跡といえば、三内丸山遺跡と小牧野遺跡が代表されがちであるが、市内には多くの遺跡が分布している。当時の人々にとって、八甲田山またはその広大な裾野はどのような意味を持っていたのであろうか。このことは、非常に関心の沸く問題であるとともに、当時の人々の行動を知るためにも、欠かすことのできない地域と言える。

今回の桜峯(2)遺跡の調査を契機に、さらに一層の調査を要する区域として改めて位置づけなければならないであろう。

最後ではあるが、調査から本書刊行に至るまでご協力ご援助を賜った多くの方々に改めて感謝の意を添えまとめとさせていただきます。  
(担当者一同)



引用・参考文献

青森県教育委員会	1976	第31集	泉山遺跡発掘調査報告書	上北町教育委員会	1983	第1集	上北町古屋敷貝塚・
"	1977	第34集	水木沢遺跡発掘調査報告書	"	1986	第2集	上北町古屋敷貝塚・
"	1978a	第38集	熊沢遺跡	階上町教育委員会	1989		白座遺跡・野場(3)遺跡 発掘調査報告書
"	1978b	第41集	三内沢部遺跡発掘調査報告書	天間林村教育委員会	1994	第2集	ニッ森貝塚
"	1979	第51集	桔梗野工業団地造成に伴う 埋蔵文化財試掘調査報告書	青森市教育委員会	1965	2	四ツ石遺跡調査概報
"	1980a	第52集	大平遺跡発掘調査報告書	"	1967	3	玉清水遺跡調査概報
"	1980b	第55集	大面遺跡発掘調査報告書	"	1971	6	玉清水 遺跡発掘調査報告書
"	1980c	第56集	永野遺跡発掘調査報告書	"	1979		蛭沢遺跡
"	1980d	第57集	長七谷地貝塚遺跡発掘調査報告書	"	1983		四戸橋遺跡発掘調査報告書
"	1980e	第59集	板留(2)遺跡発掘調査報告書	"	1986		田茂木野遺跡発掘調査報告書
"	1981a	第61集	表館遺跡発掘調査報告書	"	1987		構内城跡発掘調査報告書
"	1981b	第62集	新納屋遺跡(2)発掘調査報告書	"	1991	第16集	山吹(1)遺跡発掘調査報告書
"	1981c	第63集	鷹架遺跡発掘調査報告書	"	1993	第19集	市内遺跡発掘調査報告書
"	1982	第68集	山崎遺跡発掘調査報告書	"	1994	第21集	市内遺跡詳細分布調査報告書
"	1985	第90集	大石平遺跡発掘調査報告書	池田 敬	1979		青森市の大地のなりたち 『青森市の自然』高校生版
"	1986	第97集	大石平遺跡 発掘調査報告書	江坂輝彌	1957		前期縄文文化に村する一考察 『史想』7
"	1987	第103集	大石平遺跡発掘調査報告書	"	1970		『石神遺跡』(単)
"	1988	第115集	上尾駁(2)遺跡 発掘調査報告書	葛西 励・高橋 潤	1987		青森市四ツ石遺跡調査報告
"	1989	第119集	館野遺跡	加藤 邦夫	1981		縄文尖底土器 『縄文文化の研究』3
"	1990	第130集	空沢遺跡	北林 八洲晴	1968		青森市の原始時代研究録1
"	1992	第143集	富ノ(2)遺跡	工藤 竹久	1988		縄文尖底系土器様式 『縄文土器大観』1
"	1993	第147集	富ノ沢(2)遺跡・富ノ沢(3)遺跡	町田 洋・新井房夫	1992		『火山灰アトラス』(単)
"	1994	第165集	青森県遺跡詳細分布調査報告書	三宅 徹也	1974		青森県における円筒下層式土器群の地域展開 『北奥古代文化』6号
(財)岩手県埋蔵文化財センター	1984	第55集	上里遺跡発掘調査報告書	"	1978		円筒土器の概念とその崩壊 『青森県立郷土館調査研究年報』3
函館市教育委員会	1981		権現台遺跡発掘調査報告書	"	1981		円筒土器 『縄文文化の研究』3
"	1987		豊原1遺跡	"	1988		円筒土器下層様式 『縄文土器大観』1
"	1994		豊原2遺跡				
八戸市教育委員会	1976		赤御堂遺跡発掘調査概要報告書	三宅徹也・石岡憲雄	1969		青森県青森市横内遺跡(1) 『遮光器』2号
"	1982	第8集	長七谷地遺跡発掘調査報告書-2,7,8号遺跡(昭和55,56年度)	村 越 潔	1974		『増補円筒土器文化』
"	1988	第26集	八幡遺跡発掘調査報告書	"	1976		円筒土器に伴う特殊な石器 『東北考古学の諸問題』
"	1991	第42集	風張(1)遺跡	"	1988		東北北部における石器・石製品の出現と消滅 『月刊考古学ジャーナル』2月号NO.287
三沢市教育委員会	1985	第2集	根井沼(1)遺跡緊急発掘調査報告書	山内 清 男	1929		関東北における繊維土器 『史前学雑誌』1-2
"	1988a	第4集	根井沼(1)遺跡緊急発掘調査報告書	"	1930		斜行縄紋に関する二三の考察 『史前学雑誌』2-3
"	1988b	第5集	根井沼(1)遺跡緊急発掘調査報告書				
十和田市教育委員会	1983	第2集	明戸遺跡発掘調査概報				

# 写 真 图 版



遺跡遠景 (NE SW)

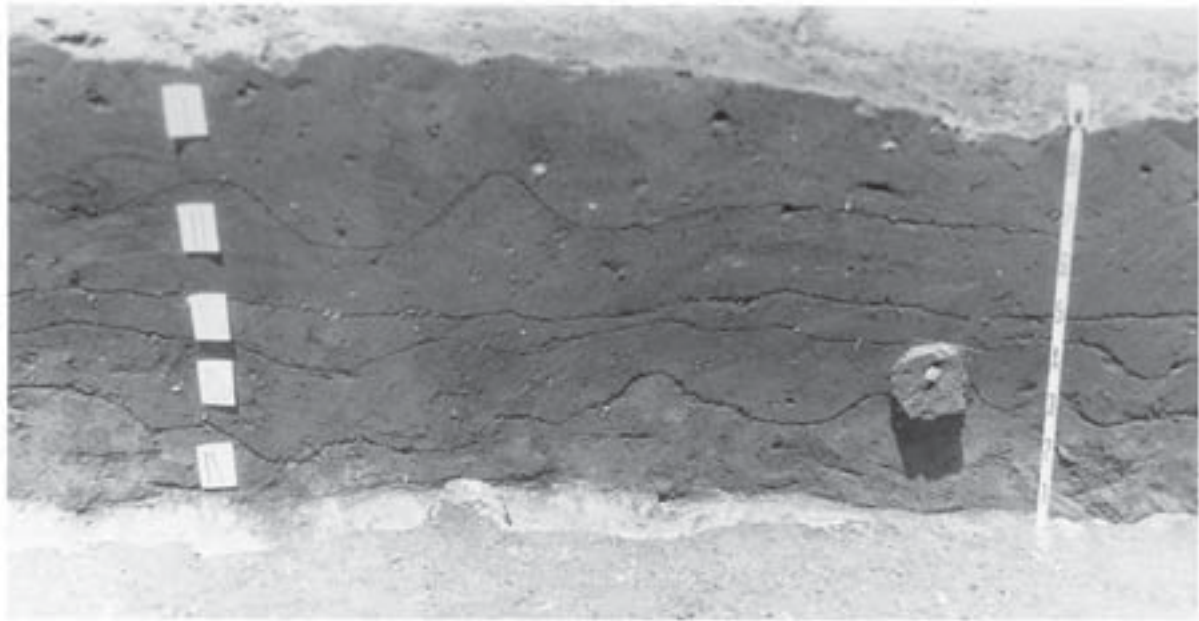


遺跡近景 (S N)



遺跡近景 (N S)

写真1 遺跡風景



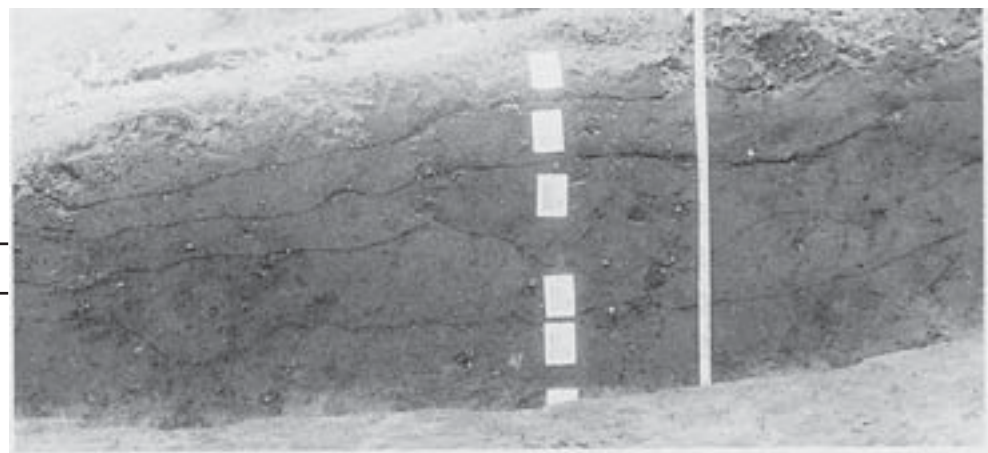
基本土層

a層  
 上位 B-Tm  
 下位 To-a



a層内でのB-TmとTo-aの堆積状況

x層



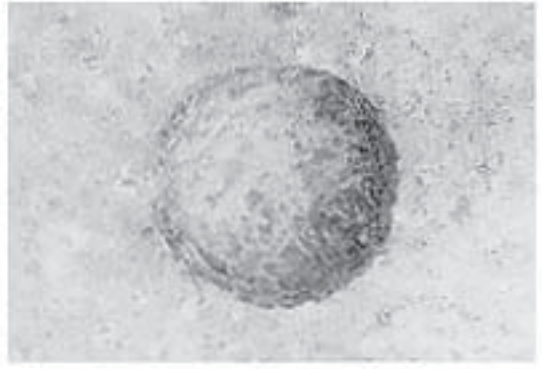
x層堆積状況（第1号住居跡）

写真2 堆積状況





第1号住居跡 完掘



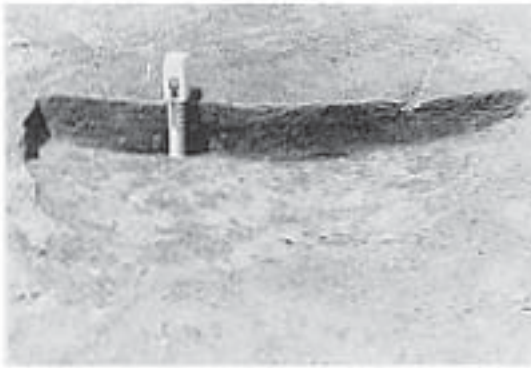
第1号土壙 完掘



第2号土壙 完掘



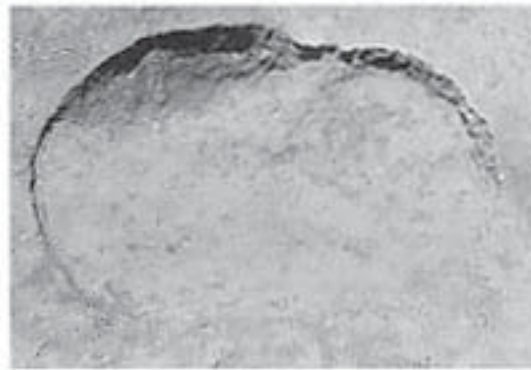
第3号土壙 完掘



第4号土壙 完掘



第5号土壙 完掘



第6号土壙 完掘



第7号土壙 完掘

写真3 第1号住居跡、第1～7号土壙



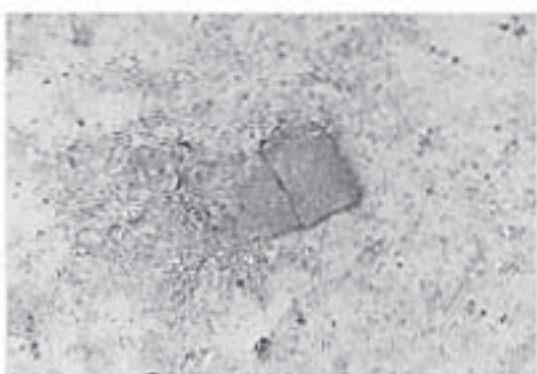
第8号土壙 完掘



第9号土壙 半截



第9号土壙 堆積状況



第9号土壙 底面出土遺物



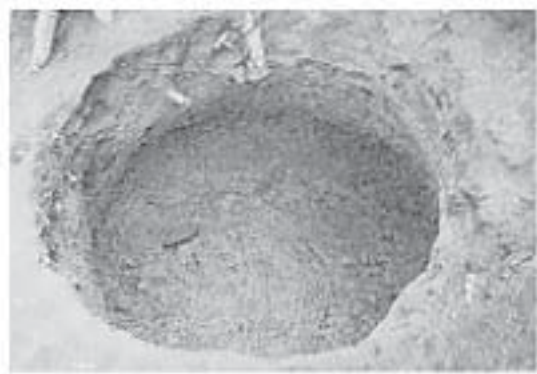
第9号土壙 確認面(県文課試掘)



第10号土壙 完掘



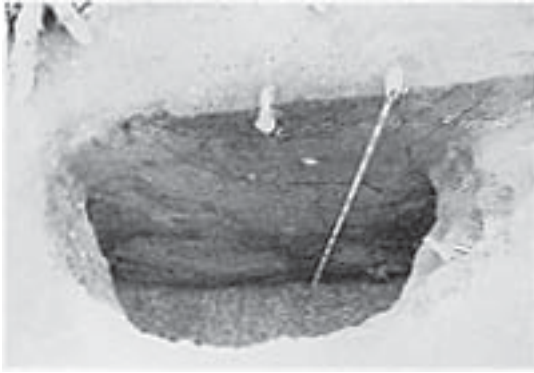
第10号土壙 堆積状況



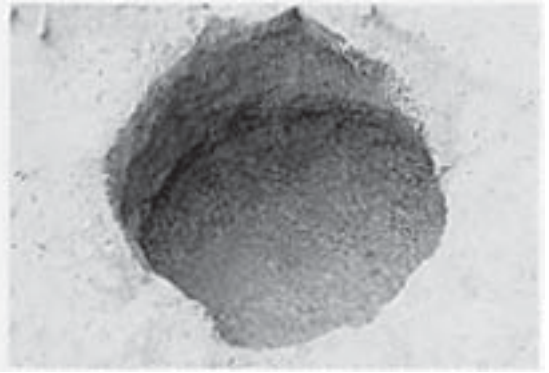
第11号土壙 完掘

写真4 第8～11号土壙





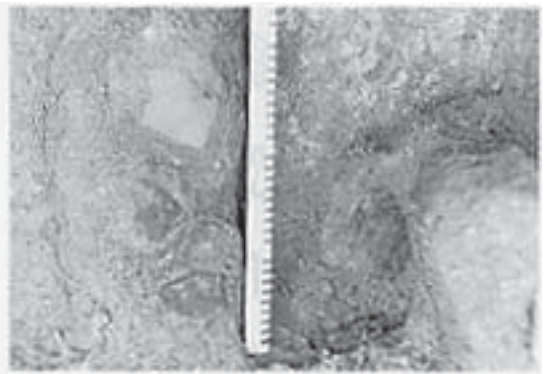
第11号土壙 堆積状況



第12号土壙 完掘



第12号土壙 堆積状況



第12号土壙 遺物出土状況



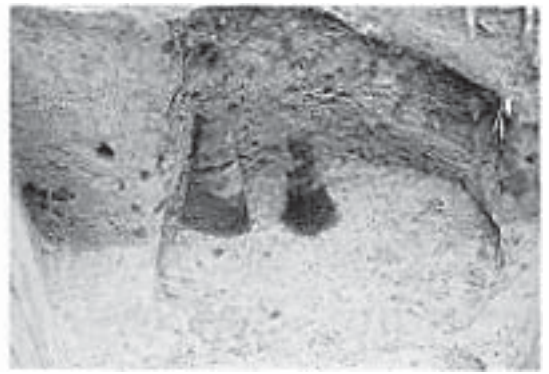
第12号土壙 確認面



第13号土壙 完掘



第13号土壙 堆積状況



第13号土壙 遺物出土状況

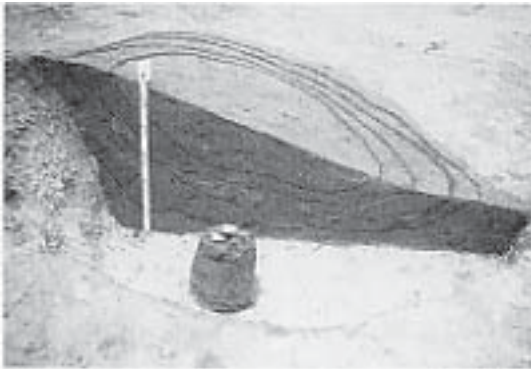
写真5 第11～13号土壙



第14号土壙 完掘



第14号土壙 確認面



第14号土壙 堆積状況



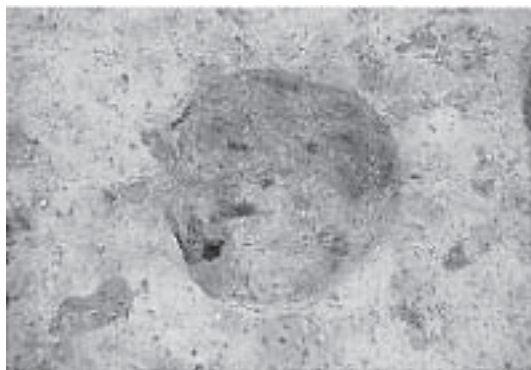
第14号土壙 遺物出土状況



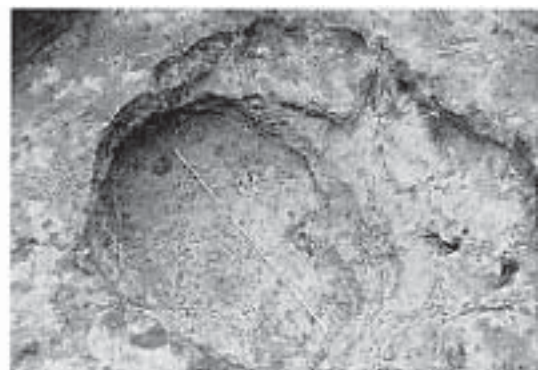
第15号土壙 完掘



第15号土壙 堆積状況



第16号土壙 完掘



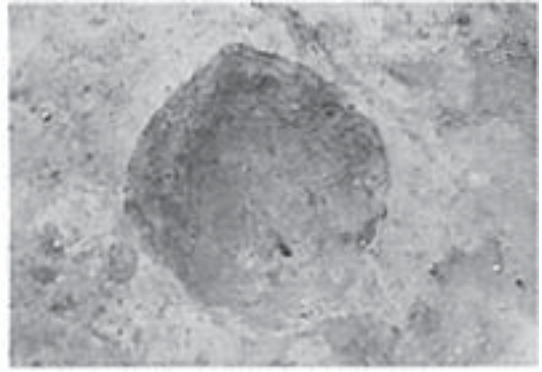
第17号土壙 完掘

写真6 第14～17号土壙





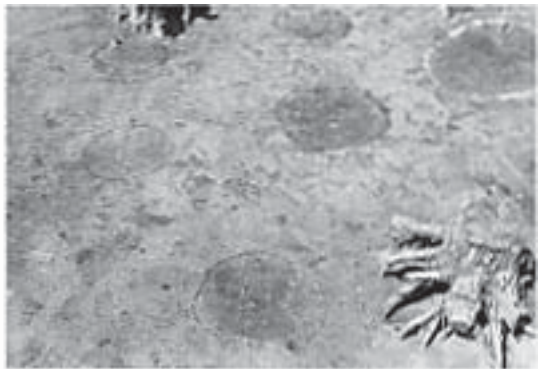
第17号土壤 堆積状況



第18号土壤 完掘



第19・20・21・22号土壤 完掘



第19・20・21・22号土壤 確認面



第19号土壤 完掘



第19号土壤 遺物出土状況



第20号土壤 完掘

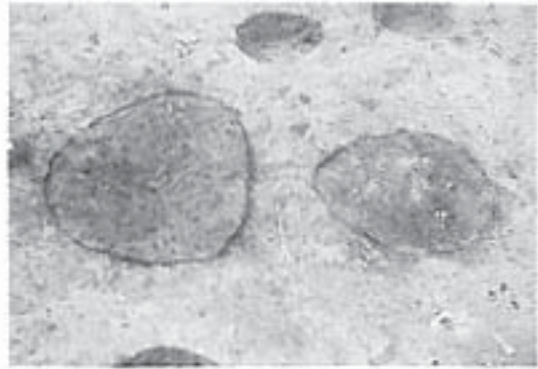


第21号土壤 完掘

写真7 第17～21号土壤



第22号土壤 完掘



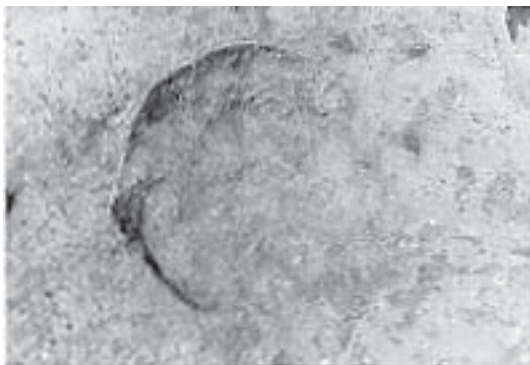
第23・24号土壤 確認面



第23号土壤 完掘



第23号土壤 堆積状況



第24号土壤 完掘



第24号土壤 堆積状況



第25号土壤 完掘



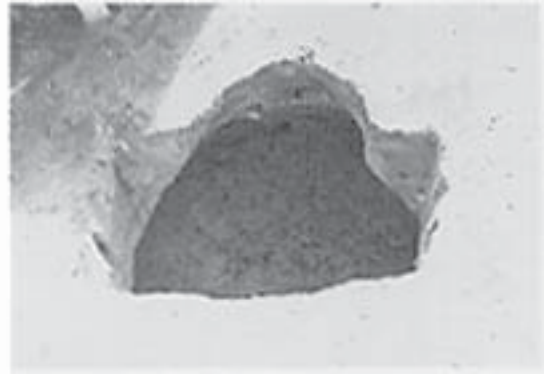
第26号土壤 完掘

写真8 第22～26号土壤





第26号土壤 堆積状況



第27号土壤 完掘



第27号土壤 堆積状況



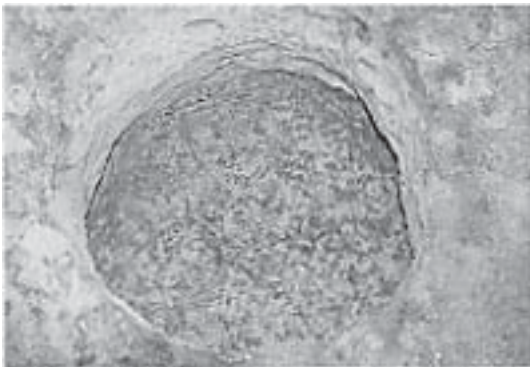
第28号土壤 完掘



第28号土壤 堆積状況



第28号土壤 底面ピット堆積状況

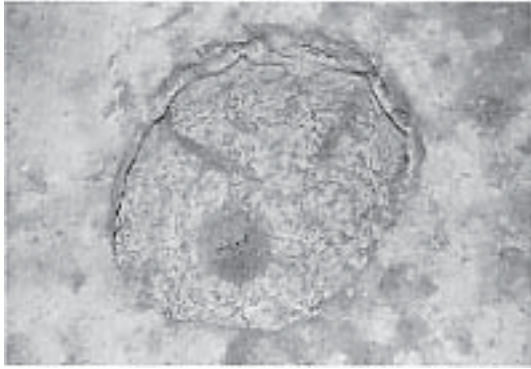


第29号土壤 完掘

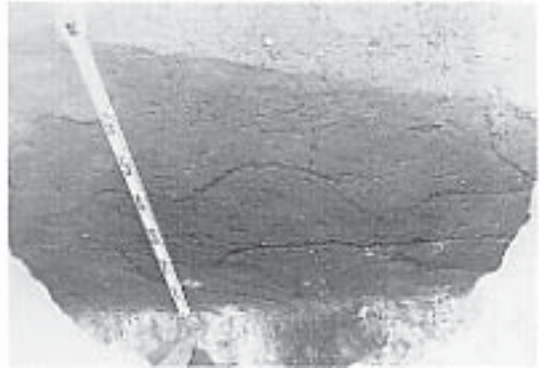


第29号土壤 堆積状況

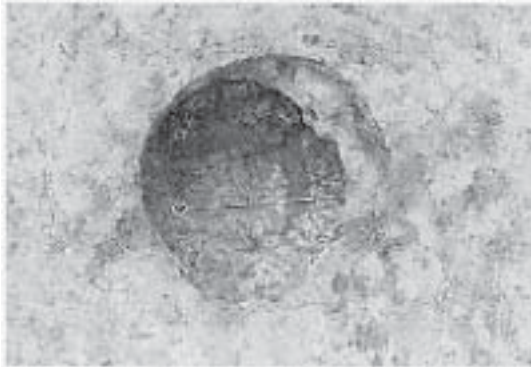
写真9 第26～29号土壤



第30号土壤 完掘



第30号土壤 堆積狀況



第31号土壤 完掘



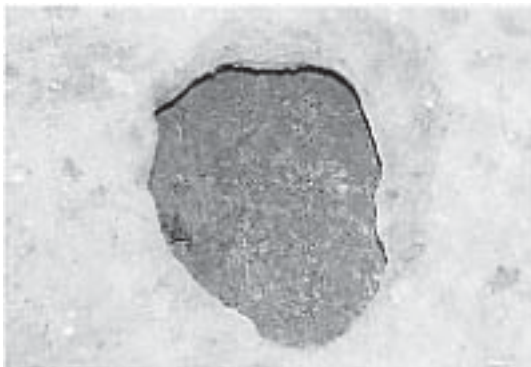
第31号土壤 遺物堆積狀況



第31号土壤 堆積狀況



第32号土壤 完掘



第33号土壤 完掘



第33号土壤 堆積狀況





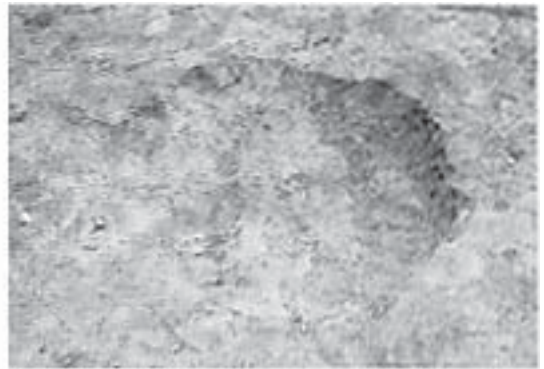
第34・35号土壤 堆積状況



第1号配石遺構



第1号配石遺構 半截状況



第1号配石遺構 完掘



第2号配石遺構



第2号配石遺構 半截状況



第1号埋設土器遺構



第1号埋設土器遺構 半截状況

写真11 第34・35号土壤、第1・2号配石遺構、第1号埋設土器遺構



11-1



11-2



18-1



18-2



18-3



18-4



18-5



18-6



18-7



18-8



18-9



18-12



18-13



18-14

写真 12 遺構内出土土器 (1)



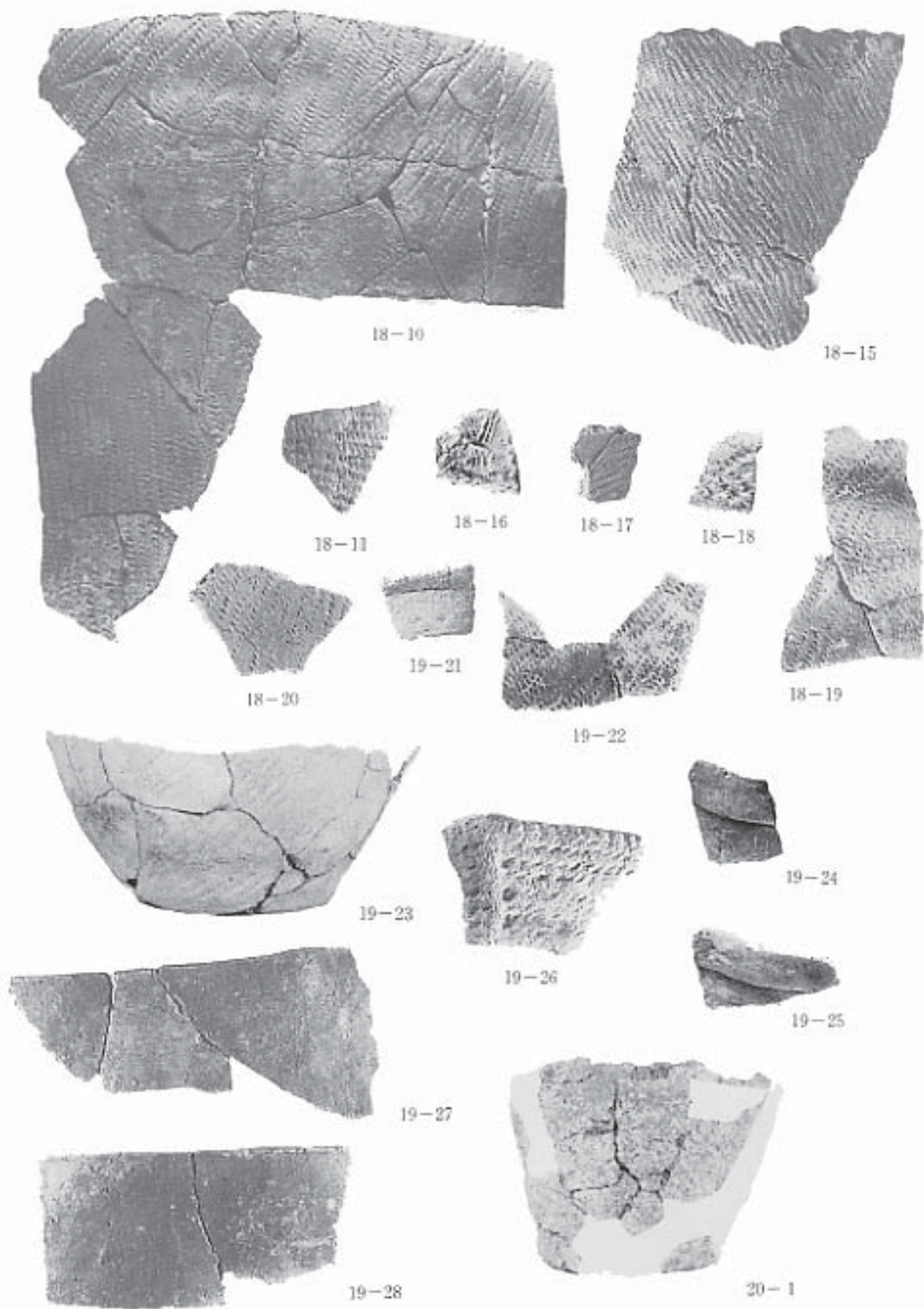


写真 13 遺構内出土土器 (2)



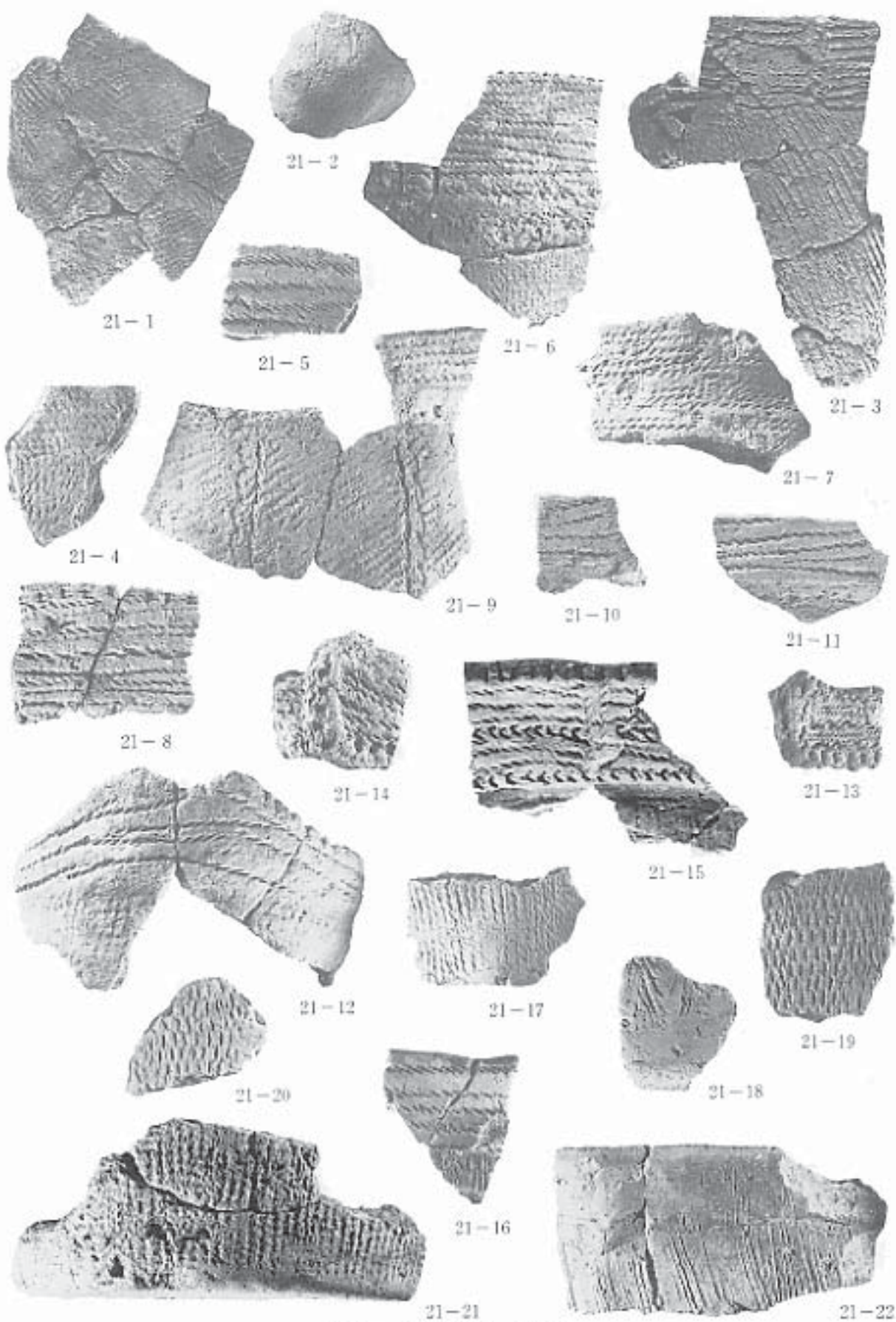


写真14 遺構外出土土器(1)

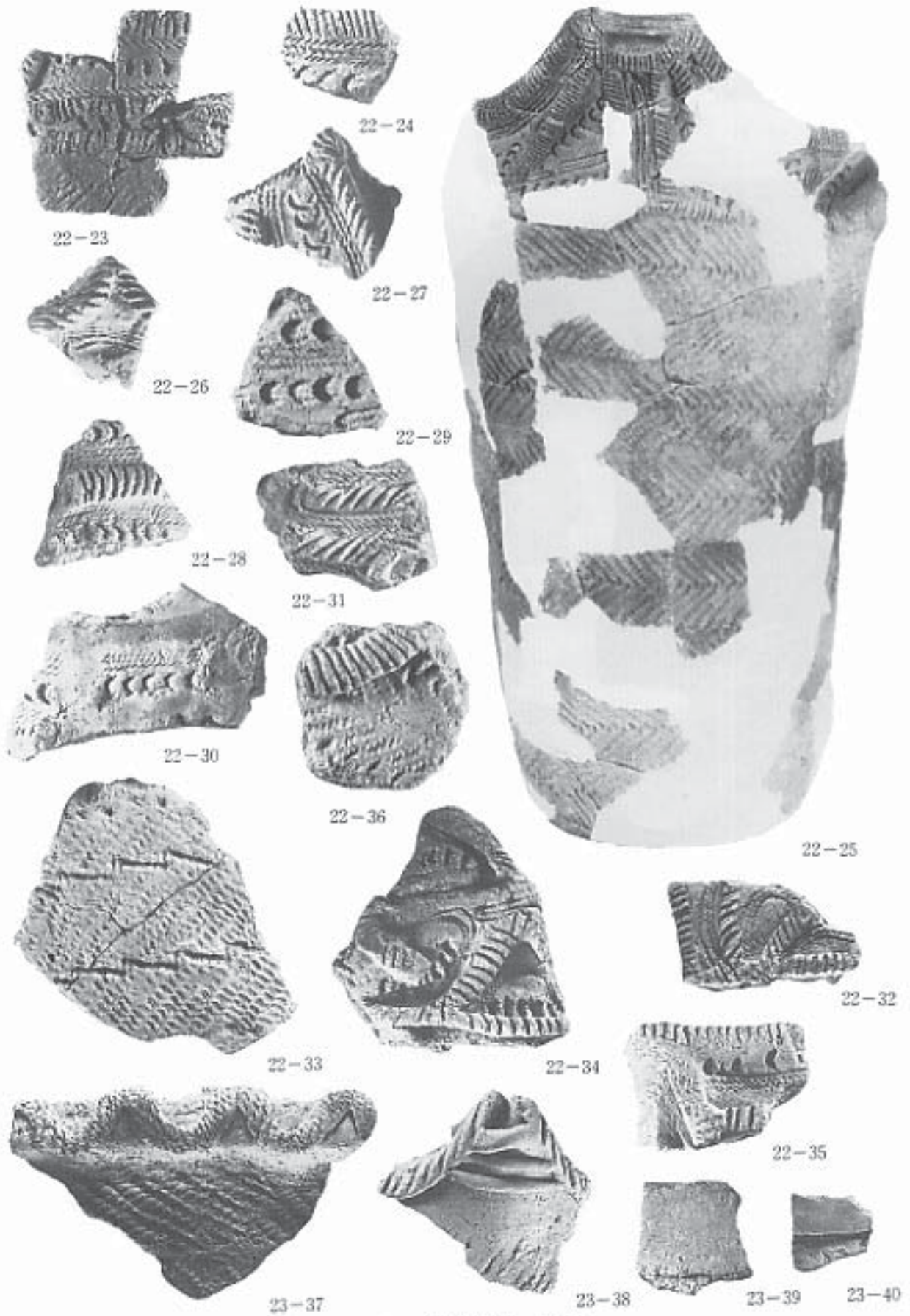


写真 15 遺構外出土土器 (2)



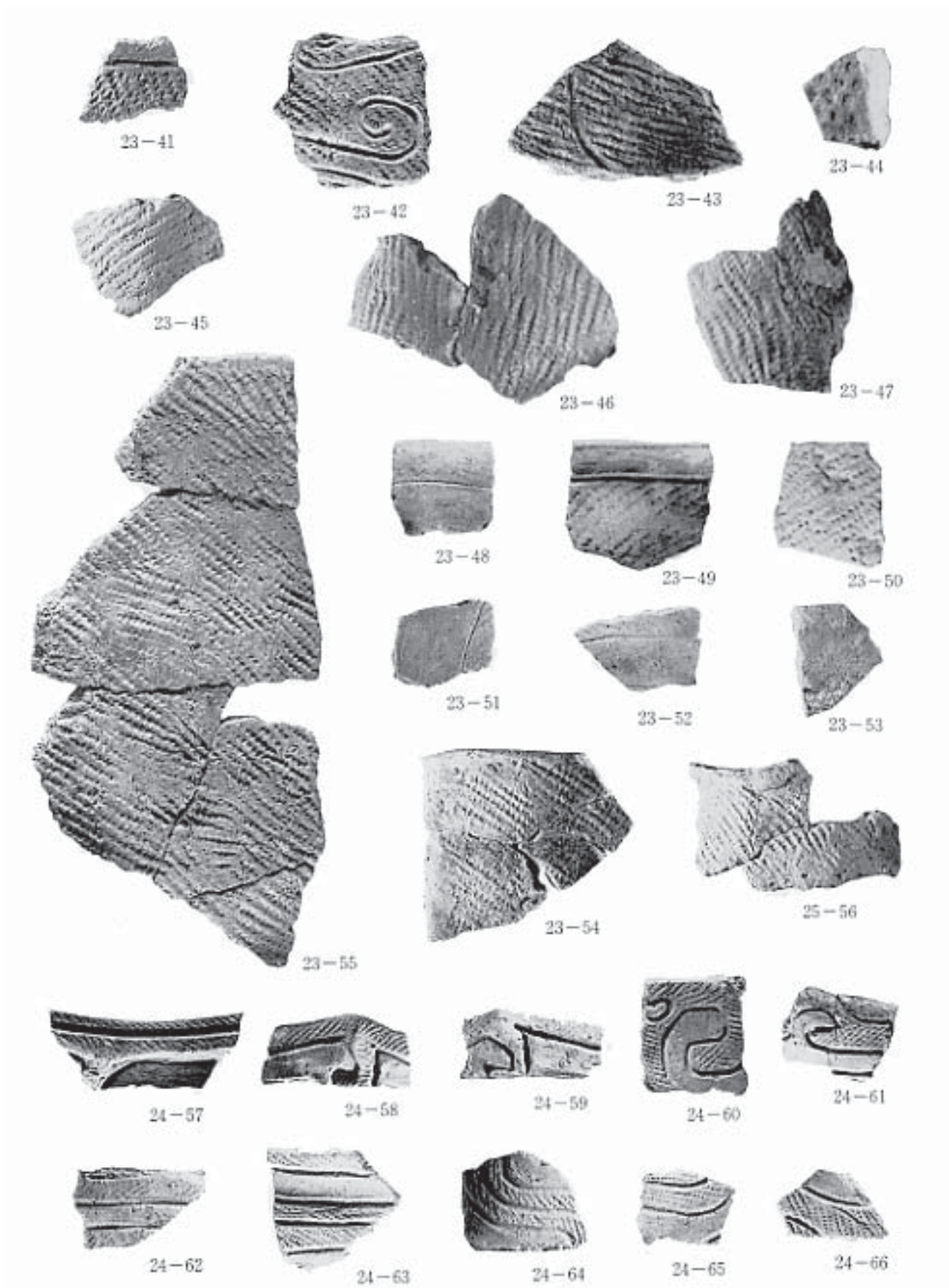


写真 16 遺構外出土土器 (3)



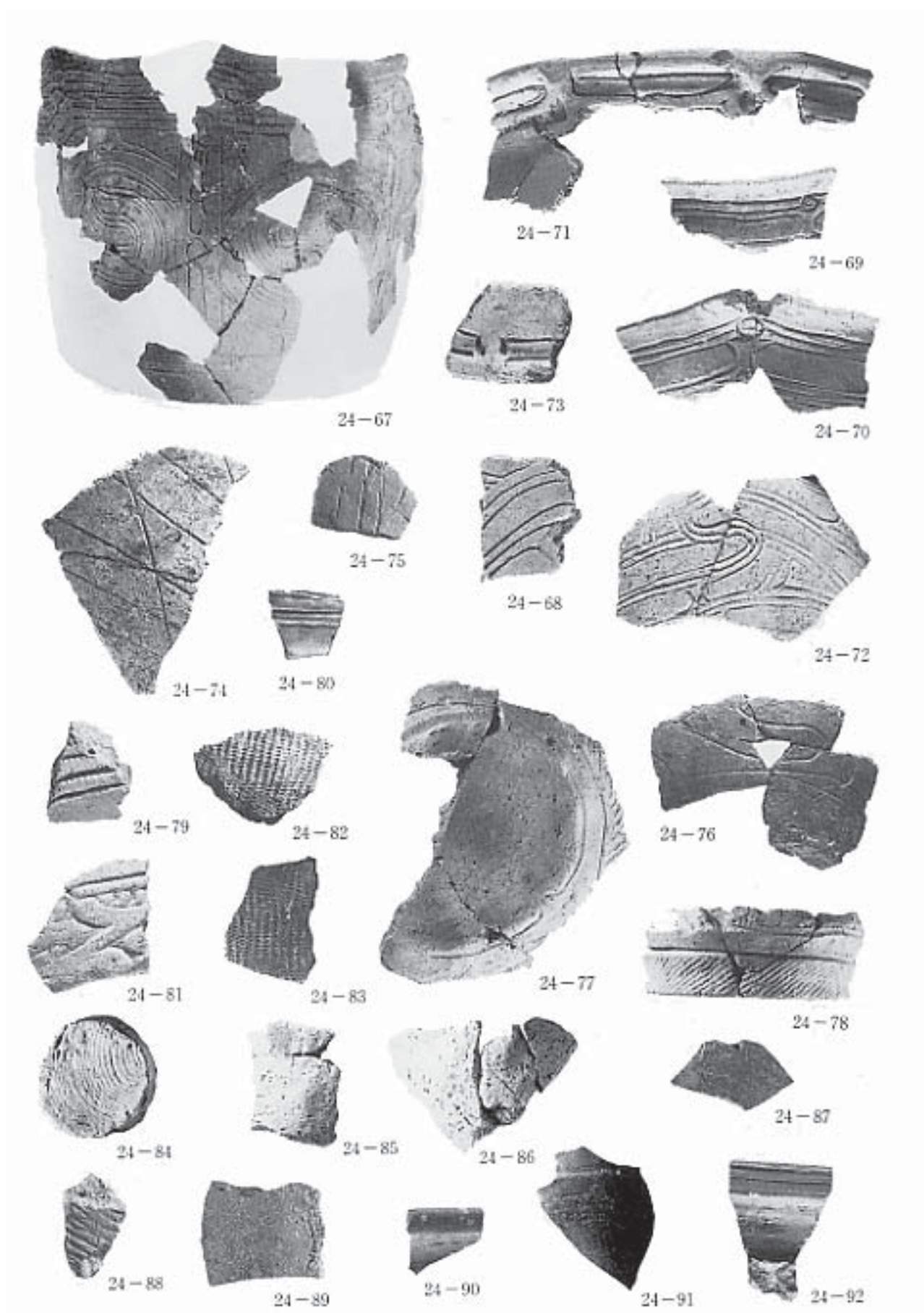


写真 17 遺構外出土土器(4)

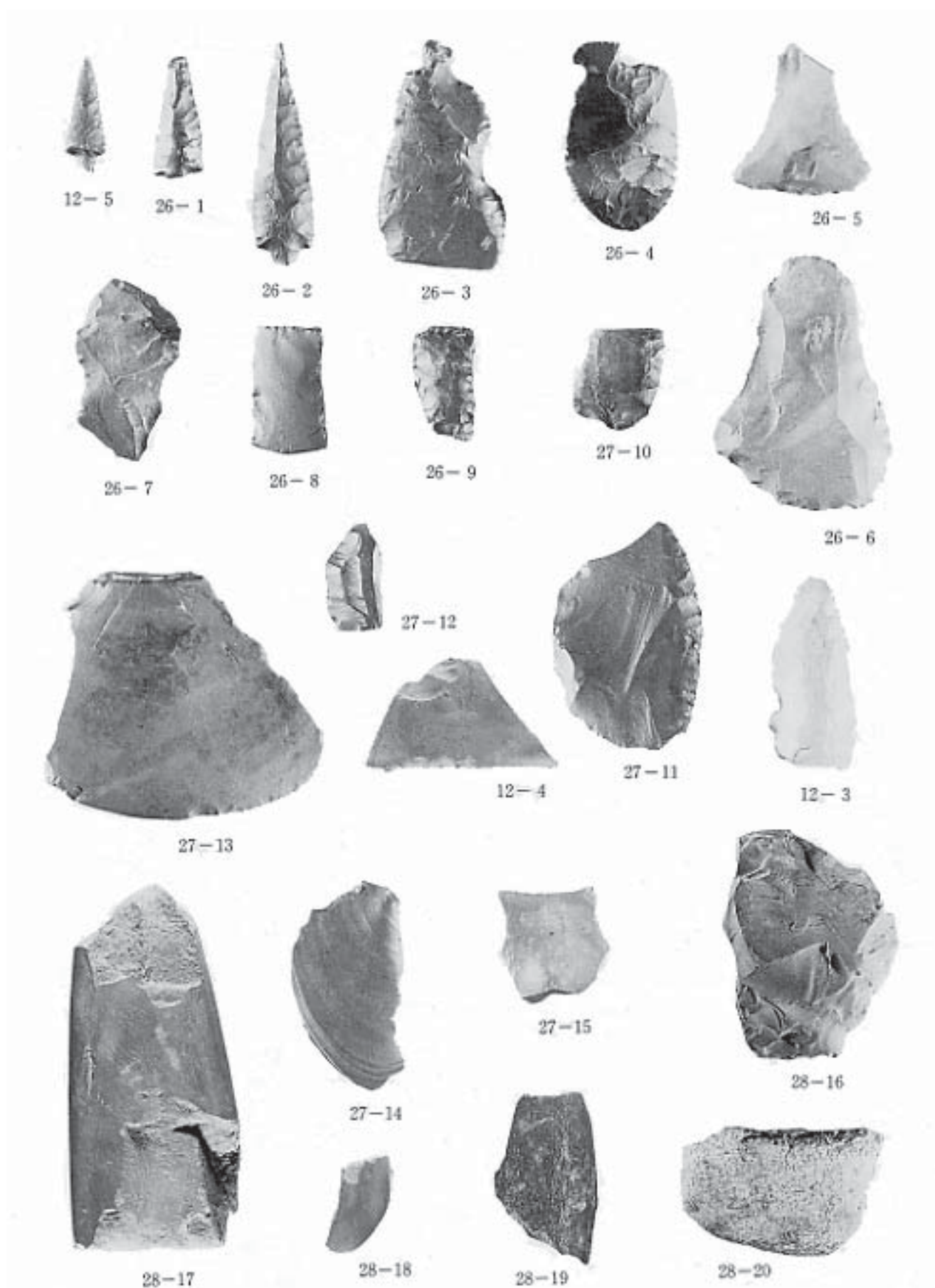


写真18 石器(1)



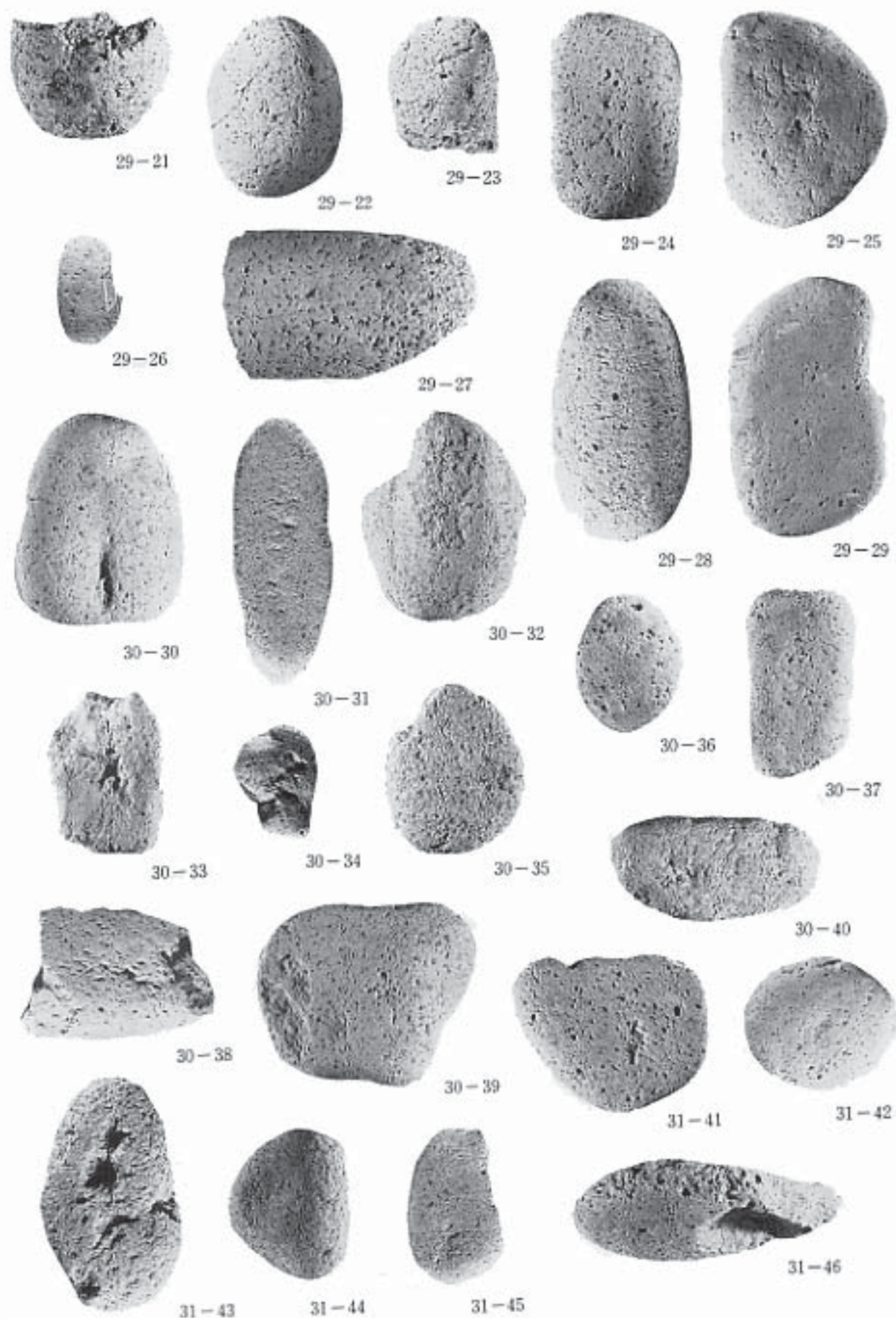


写真19 石器(2)



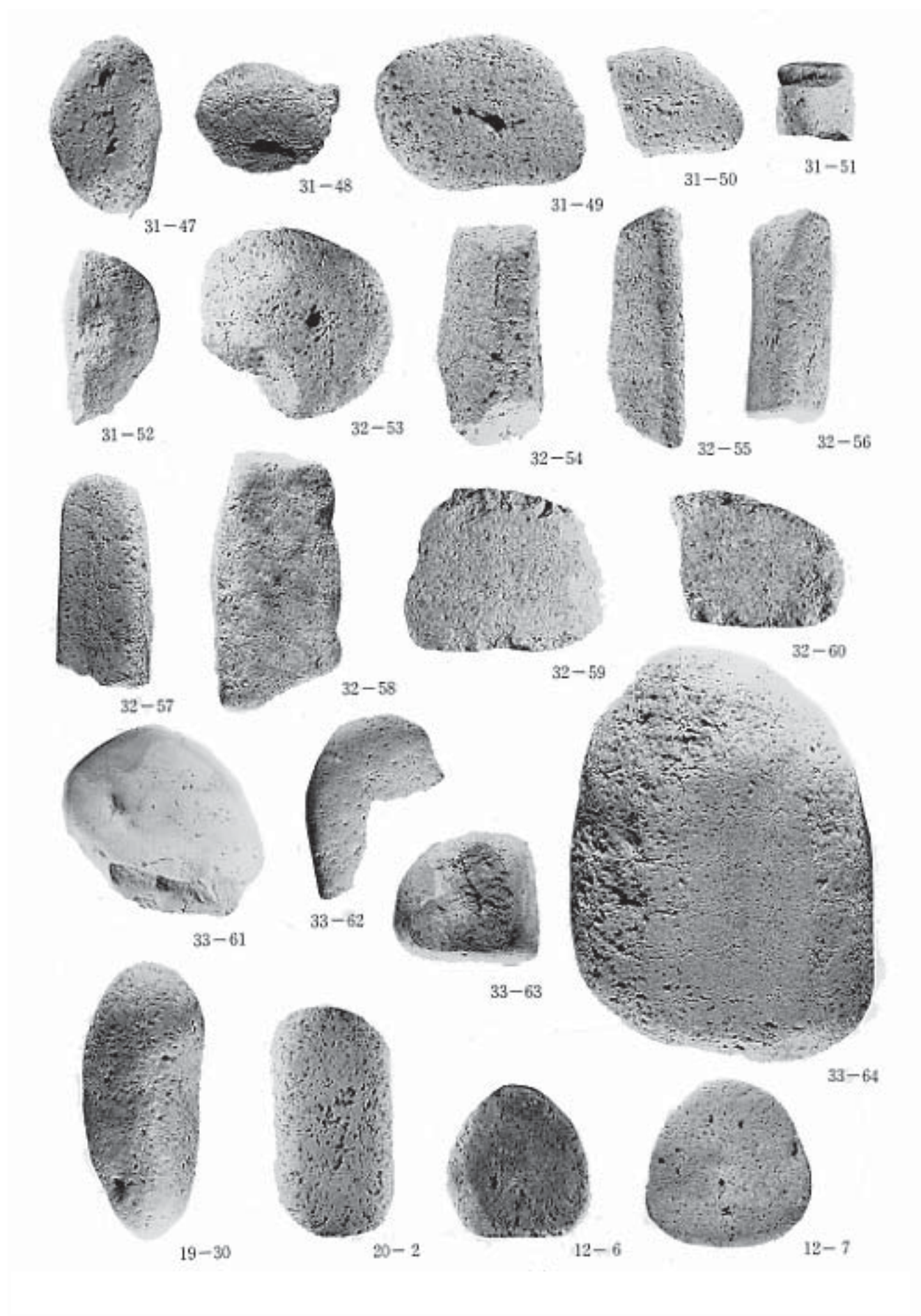


写真20 石器(3)

報告書抄録

ふりがな	さくらみね かつこに いせき							
書名	桜 峯 (2) 遺 跡							
副書名								
巻次								
シリーズ	青森市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第26集							
編著者名	小林 淳							
編集機関	青森市教育委員会							
所在地	〒030 青森県青森市中央一丁目22-5 TEL0177-34-1111							
発行年月	西暦 1995年3月31日							
ふりが 所収遺跡名	なふりが 所在地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さくらみね 桜 峯 (2)	あおもりけんあおもりし 青森県青森市 よこうちあざ さくらみね 横内字 桜 峯	02201	207	40° 45 50"	140° 46 27"	19940511 ~ 19941108	6100	国道103号横内 バイパス道路 改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特記事項	
桜 峯 (2)	集落 (縁辺)	縄文時代	竪穴式住居跡 1軒 土壇 35基 配石遺構 2基 埋設土器遺構 1基		縄文土器 石器		土壇35基のうち フラスコ状12基	

## 既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

- 青森市の文化財 1 1962 『三内霊園遺跡調査概報』  
" 2 1965 『四ツ石遺跡調査概報』  
" 3 1967 『玉清水遺跡調査概報』  
" 4 1970 『三内丸山遺跡調査概報』  
" 5 1971 『野木和遺跡調査報告書』  
" 6 1971 『玉清水 遺跡発掘調査報告書』  
" 7 1971 『大浦遺跡調査報告書』  
" 8 1973 『孫内遺跡発掘調査報告書』  
1979 『螢沢遺跡』  
1983 『四戸橋遺跡調査報告書』
- 青森市の埋蔵文化財 1983 『山野峠遺跡』  
" 1985 『長森遺跡発掘調査報告書』  
" 1986 『田茂木野遺跡発掘調査報告書』  
" 1986 『横内城遺跡発掘調査報告書』  
" 1988 『三内丸山 遺跡発掘調査報告書』
- 青森市埋蔵文化財調査報告書第 16 集 1991 『山吹(1) 遺跡発掘調査報告書』  
" 第 17 集 1992 『埋蔵文化財出土遺物調査報告書』  
" 第 18 集 1993 『三内丸山(2) 遺跡発掘調査概報』  
" 第 19 集 1993 『市内遺跡発掘調査報告書』  
" 第 20 集 1994 『小牧野遺跡発掘調査概報』  
" 第 21 集 1994 『市内遺跡詳細分布調査報告書』  
" 第 22 集 1994 『小三内遺跡発掘調査報告書』  
" 第 23 集 1994 『三内丸山(2) 遺跡・小三内遺跡発掘調査報告書』  
" 第 24 集 1995 『横内遺跡・横内(2) 遺跡発掘調査報告書』  
" 第 25 集 1995 『市内遺跡詳細分布調査報告書』  
" 第 26 集 1995 『桜峯(2) 遺跡発掘調査報告書』

---

青森市埋蔵文化財調査報告書第 26 集

### 桜峯(2) 遺跡発掘調査報告書

発行年月日 平成 7 年 3 月 31 日

発行 青森市教育委員会

〒030 青森市中央一丁目 22 - 5

TEL 0177 - 34 - 1111

印刷 東北印刷業株式会社

〒030 青森市合浦一丁目 2 - 122

TEL 0177 - 42 - 2221

---



